仙台市文化財調査報告書第59集

下ノ内浦遺跡

昭和58年3月

仙台市教育委員会

C—C′　旧カマド、旧煙道縦断面

層No.	上　色	上　質	そ　の　他
1	7.5YR 2/1 ・ 黒	焼　土	
2	10YR 3/2　黒褐色	粘土質シルト	焼土を少量含む
3	10YR 2/2　黒褐色	粘土質シルト	黒色焼土ブロックを含む
4	10YR 3/2　黒褐色	シルト質粘土	
5	10YR 3/2　黒褐色	粘土質シルト	黒色焼土ブロックを多量に含む
6	10YR 3/2　黒褐色		
A	黒	煙　土	

H—H′　旧煙道横断面

層No.	上　色	上　質	そ　の　他
1	7.5R1.7/・赤黒色	粘土質シルト	黒褐色焼土を含む
2	2.5Y 4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	焼土・炭を含む
3	10YR 4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黄灰色粘土を含む
4	10YR 3/4　暗褐色	粘土質シルト	黄灰色粘土・焼土を含む

F—F′　ピットⅠ断面

層No.	上　色	上　質	そ　の　他
1	7.5YR 2/2 ・黒色	粘土質シルト	焼土・灰・炭化物を多量に含む

G—G′　新煙道横断面

層No.	上　色	上　質	そ　の　他	
1	10YR 3/3　暗褐色	シ　ル　ト	酸化鉄・灰色粘土・炭を含む	焼面
2	7.5YR 2/1　黒	シルト～シルト質粘土	赤褐色焼土粘を多く含む	焼面
3	10YR 3/3　暗褐色	シ　ル　ト	酸化鉄を含む	基本層
4	10YR 3/3　暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含む	基本層
5	10YR 3/3　暗褐色	シルト質粘土	灰色粘土を含む	基本層

E—E′　SI—Ⅰ内　SK—2断面

層No.	上　色	上　質	そ　の　他
A—1	10YR 3/2　黒褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物を含む
A—2	10YR 3/2　黒褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物・黒色土のブロックを含む
B—1	10YR 3/3　黒褐色	粘土質シルト	焼土を少量含む
B—2	10YR 3/3　黒褐色	粘土質シルト	
B—3	10YR 3/2　黒褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物・灰を多量に含む

D—D′　SI—Ⅰ内　SK—Ⅰ縦断面

層No.	上　色	上　質	そ　の　他
1	10YR 3/2　黒褐色	シルト質粘土	焼土・炭化物を少量含む
2	10YR 3/2　黒褐色	シルト質粘土	焼土・炭化物を少量含む、一層より赤い

仙台市文化財調査報告書第59集

下ノ内浦遺跡

昭和58年3月

仙台市教育委員会

序

下ノ内浦遺跡のある富沢地区は、近年、土地区画整理事業や、高速鉄道建設事業等々に伴い、大きく変貌しつつあります。

西多賀を含む笊川流域には、仙台市域の中でも最も濃密な遺跡群の分布をみる地域となっています。近隣の山口・六反田・泉崎・中谷地・鍋田等の各遺跡の調査では、数多くの貴重な文化遺産の発見をみております。

本報告書は、富沢区画整理地区の一画にある下ノ内浦遺跡に開発行為が計画されたため、文化財保護保存の協議を重ねた結果、記録保存の措置を講ずる旨をもって、事前の調査を実施するに至り、その成果をまとめ、公表するものであります。

本書が文化財保護・保存・啓発に大きく寄与することができますならば、望外のよろこびであります。市民のみなさんはもとより、学兄諸氏の研究・活用を期待するとともに、本遺跡の調査や報告書作成に当り、多くの方々の御協力・御助言をいただきましたことに対し、心から感謝を申し上げ、序といたします。

昭和 58 年 3 月

仙台市教育委員会
教育長 藤　井　　黎

例　　言

1．本書は、みやぎ生活協同組合泉崎倉庫第１期建設工事及び、灯油スタンド建設工事に先行する下ノ内浦遺跡発掘調査報告書である。

2．本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の１：25,000仙台東南部地形図を使用した。

3．土層と遺物の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人、日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖を使用した。

4．本文の執筆は調査担当者のうち佐藤　隆、柳沢みどり、工藤哲司が行ない、編集も３名で行なった。執筆の分担は下記の通りである。

佐藤　　隆　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ－１・Ⅴ・Ⅶ－３

柳沢みどり　Ⅳ－２・Ⅶ－１－(1)～(2)

工藤　哲司　Ⅵ・Ⅶ－１－(3)～(9)・Ⅶ－２

5．本調査においては、次の通りの遺構略号を使用した。

ＳＢ：掘立柱建物跡

ＳＤ：溝跡

ＳＩ：竪穴住居跡

ＳＫ：土壙

ＳＸ：その他の遺構

6．本報告中の実測図の方位、実測基準線は真北を基準としている。

7．遺物は下記の通り分類し、登録してある。

A	縄文土器	J	陶磁器
B	弥生土器	K	石製品・石器
C	土師器（非ロクロ）	L	木製品
D	土師器（ロクロ）	N	鉄製品
E	須恵器	P	土製品
I	自然遺物		

8．遺物実測図中、須恵器については断面を黒く塗潰して示した。

9．遺物実測図の中心線が一点鎖線のものは、復原径によって実測を行なったものである。

10．本報告書に関係する出土遺物、作成図面、写真は一括して仙台市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

序　文
例　言
Ⅰ．はじめに……1
Ⅱ．調査に至る経過……2
Ⅲ．遺跡の位置と環境……3
Ⅳ．調査の方法と基本層位……4
Ⅴ．Ⅰ区の調査……6
1．発見遺構……6
(1)　土　壙……6
(2)　1号河川跡……10
(3)　ピット……10
(4)　遺構外の出土遺物……10
Ⅵ．Ⅱ区の調査……14
1．発見遺構……14
(1)　竪穴住居跡……14
(2)　掘立柱建物跡……23
(3)　土　壙……26
(4)　溝　跡……28
(5)　性格不明遺構……31
2．遺構以外のⅡ区出土土器……34
(1)　表土出土土器……34
(2)　Ⅱ層出土土器……34
(3)　Ⅴ層出土土器……34
(4)　Ⅴ～Ⅵ層出土土器……37
(5)　Ⅵ層出土土器……37
(6)　Ⅶ層出土土器……38
3．その他のⅡ区出土遺物……39
(1)　土　錘……39
(2)　小形手捏ね土器……39
(3)　刀　子……40
(4)　陶　硯……40
Ⅶ．まとめ……40
1．出土遺物の総括……40
2．発見遺構の年代と総括……49
3．調査成果のまとめ……51

下ノ内浦遺跡発掘調査報告

Ⅰ. は じ め に

1. 調査要項

●遺　跡　名　下ノ内浦遺跡

●遺跡の所在地　仙台市富沢字下ノ内浦12他５筆

●遺跡の現状　宅地及び更地

●調査目的　倉庫建設工事及び灯油スタンド建設工事に伴う事前調査

●調査対象面積　540m²

●調査面積　270m²

●調査期間　（現地）昭和57年７月16日～９月７日

（整理）昭和57年10月１日～昭和58年３月26日

2. 調査体制

●調査主体　仙台市教育委員会

●調査担当　仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

教諭・佐藤　隆、主事・柳沢みどり、金森安孝、工藤哲司

●調査協力　みやぎ生活協同組合

●調査参加者　松林四郎、斉　すき、本郷孝治、増子きねよ、小嶋登喜子、伊藤　毅、高橋敬一、佐々木博之、根深亀八郎、朝山喜八郎、佐藤忠勝、佐藤智雄、武藤秀哉、織内　登、梶川恒雄、及川由美、佐藤花子、佐藤美賀子、葛原礼子、阿部敏之、中山　潤

●整理参加者　横山広美、赤間郁子、神尾恵美子、神尾紀以子、相沢尚子、菊地雅之、渡辺紀雄、高橋薫子、三浦和子、氏家弘子、池田真弓、菊池　豊、小島真弓

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

1	下ノ内浦遺跡	11	富沢館跡	21	六反田遺跡	31	上野遺跡	41	紙漉山遺跡
2	三神峯遺跡	12	鍛治屋敷Ａ遺跡	22	元袋Ⅱ遺跡	32	北目城跡	42	北前遺跡
3	富沢金山窯跡	13	鍛治屋敷Ｂ遺跡	23	大野田遺跡	33	矢来遺跡	43	山田上ノ台遺跡
4	原遺跡	14	六本松遺跡	24	元袋Ⅲ遺跡	34	郡山遺跡	44	南ノ東遺跡
5	裏町東遺跡	15	愛宕下切通上古墳	25	新田遺跡	35	矢来遺跡	45	富田南西遺跡
6	裏町古墳	16	山口遺跡	26	長町六丁目遺跡	36	籠ノ瀬遺跡	46	清太原西遺跡
7	原東遺跡	17	泉崎浦遺跡	27	北屋敷遺跡	37	欠ノ上Ⅰ遺跡	47	清太原東遺跡
8	富沢清水遺跡	18	下ノ内前遺跡	28	長町清水遺跡	38	欠ノ上Ⅱ遺跡	48	船渡前遺跡
9	富沢上ノ台遺跡	19	伊古田遺跡	29	上古川古墳	39	欠ノ上Ⅲ遺跡	49	竹の内遺跡
10	堀ノ内遺跡	20	袋東遺跡	30	西台畑遺跡	40	大塚山古墳	50	河田通遺跡

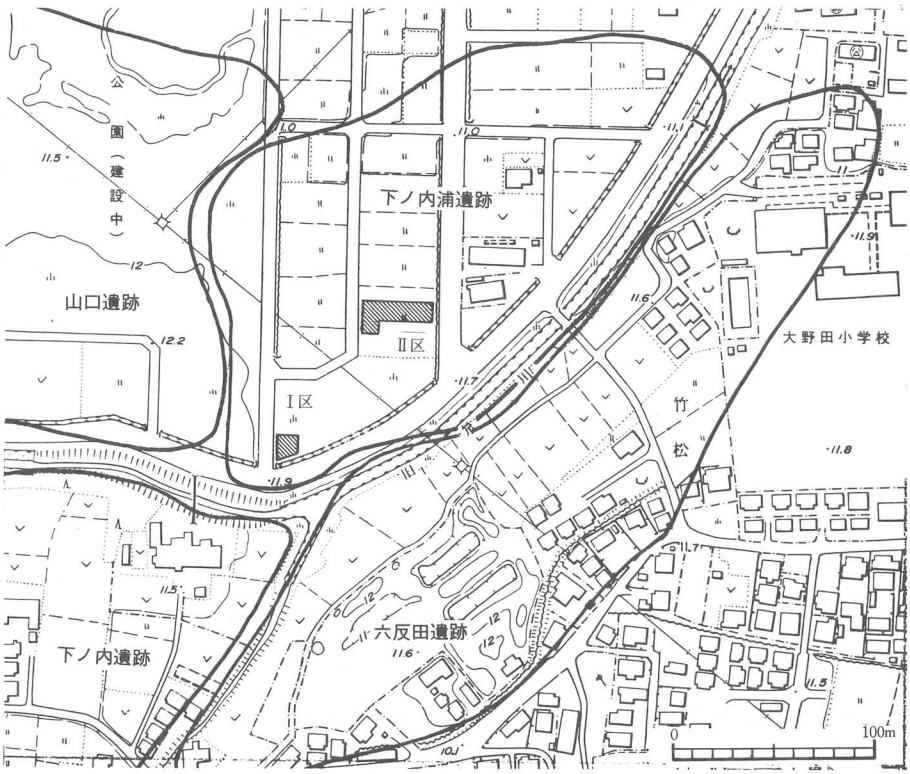
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ．調査に至る経過

昭和57年６月、みやぎ生活協同組合より、仙台市富沢字下ノ内浦地内に、倉庫を建設する旨の発掘届が提出された。この個所は、周知の遺跡ではないが、昭和51～53年の六反田遺跡の発掘調査地点より北 150ｍに位置し、この調査の結果より推測すると旧笊川に関連する自然堤防が、今回の調査区に出現することが考えられる。また、昭和57年度の六反田遺跡、下ノ内遺跡、山口遺跡の発掘調査の結果より、本調査区まで、遺構等が拡がっていると考えられる。そこで、みやぎ生活協同組合と協議し、記録保存のための発掘調査を、昭和57年７月より仙台市教育委員会が行なった。

この富沢地区においては、昭和48年10月に、仙台市長町富沢土地区画整理組合が設立され、約147万㎡の土地が造成された。大部分が水田と畑であったので、盛土がなされている。本調

査区は、大部分が水田として耕作され、時折、旧笊川が氾濫しその影響をうけていた。調査区は、灯油スタンド建設予定地に12m×11mの不整形の第Ⅰ調査区（Ⅰ区）と倉庫建設予定地に30m×7.5mの長方形の第Ⅱ調査区（Ⅱ区）を設定し、約0.7～1.0mの盛土と旧耕作土を重機により排土した。地表下１mで遺物等の散布する層を検出した。第Ⅰ調査区と第Ⅱ調査区では、自然堆積の状況が異なり、遺構の残存は、第Ⅱ調査区の方が良い状況であった。



第２図　遺跡の範囲とトレンチ配置図

Ⅲ．遺跡の位置と環境

下ノ内浦遺跡は、東北本線長町駅より南西 1.5km の仙台市富沢字下ノ内浦12地内にあり、今回の発掘調査で発見されたものである。この富沢地区と南隣の大野田地区は、沖積平野である「宮城野海岸平野」に含まれ、微地形では「郡山低地」に属している。郡山低地は、名取川によって形成された自然堤防、後背湿地等から成り立っている。名取川の支流である旧笊川が、当調査区の南隣にある。この旧笊川の影響を大きく受けているのが、下ノ内浦遺跡である。

この地域には数多くの遺跡があり、昭和51年以降、発掘調査が急速に進み、仙台市内の沖積地において、縄文時代の住居跡が初めて発見された。当調査区の南 150m にある六反田遺跡（註

1）は、昭和51～53年度に発掘調査が行なわれ、縄文時代中期中葉（大木８ｂ式期)、後期初頭、奈良時代、平安時代の竪穴住居跡、古墳の周湟が確認されている。昭和56年度からの高速鉄道関係及び市民体育館建設工事関係の発掘調査では、この富沢地区に平安時代前後の水田跡が確認されている（註２・３)。同じく高速鉄道関係の発掘調査により発見された下ノ内遺跡では、表土より2.1m 下で縄文時代中期末葉（大木10式期）の竪穴住居跡が確認され、その床面より複式炉と埋設土器が検出されている（註４)。古墳時代の竪穴住居跡　軒、平安時代の竪穴住居跡　軒も確認されている。六反田遺跡と下ノ内遺跡は、名取川と笊川が形成した自然堤防上であるということは、前述の発掘調査から明らかであり、縄文時代中期より平安時代以降までの複合遺跡である。このことは、昭和53～56年に行なわれた、西隣にある山口遺跡でも同様なことがいえる。大野田地区では、古墳が６基確認されている。埴輪を伴うものが５基ある。これらの古墳は、確認されているものだけであり、江戸時代の新田開発等により墳丘が削平されていて、確認されていないものもあると考えられる。

周辺に分布する遺跡には、前期旧石器の文化層が確認された山田上ノ台遺跡（註５）と北前遺跡（註６）があり、縄文時代早期～中期の遺構と遺物が発見された北前遺跡や三神峯遺跡(註７)、縄文時代中後期の遺構と遺物が発見された六反田遺跡がある。弥生時代の遺物は、山口遺跡（註８）や六反田遺跡で出土している。古墳時代の遺跡は数多く、裏町古墳（註９）は、５世紀末から６世紀初めに造られたもので、主軸40m以上の前方後円墳で、竪穴式石室より珠文鏡等が出土し、葺石や埴輪も確認されている。裏町古墳や大野田１、２号墳（註10）に埴輪を供給したと考えられる富沢窯跡（註11）もある。平安時代の遺跡としては、前述の山口遺跡、下ノ内遺跡、六反田遺跡があり、それ以外にも数多く存在するものと考えられる。中世には、新笊川の南にある富沢館跡や大年寺山にある茂ケ崎城がある。

Ⅳ．調査の方法と基本層位

１．調査の方法

今回の調査対象となった個所は、同一敷地内に、南に灯油スタンド、北に倉庫が建設されることとなったので、第１調査区、第２調査区とし、７月16日より発掘調査を行なった。重機で盛土部分と旧耕作土を排土し、地表下1.0～1.2m で遺構面を検出した。

Ⅰ区においては、遺構が少ないので平板測量を行なった。調査区の南西コーナーの境界杭を

基準とし、ベンチマークNo.1を12.00mとした。Ⅱ区においては、真北の線上にある境界杭を基準とし、3m方眼のグリットを調査区内に設け、北から南にA・B・C区、西から東へ1・2・3～区とし、ベンチマークNo.2は12.20mとした。Ⅸ層上面まで精査を行ない、縄文土器片が若干出土しているので確認のため、E6～E8、E14～E16の2ケ所にテストピットを設けた。Ⅸ層上面より1.6m掘り下げ、XⅢ層まで検出したが、遺物包含層は確認できなかった。

C1、C2のグリット内ではⅤ層上面でSI－1を検出し、全形を得るためにD、Fの1・2までグリットを拡張した。拡張区については、調査期間の関係によってⅤ層上面までを調査し、それ以下の層については、調査をすることができなかった。

2. 基本層位

Ⅰ区の基本層位は、13枚確認された。Ⅰ～Ⅲ層は、盛土・表土・旧表土で、Ⅳ層以下の土性は以下のとおりである。Ⅳa・Ⅳb層は細砂、Va・Vb・Ⅵ層はシルト、Ⅶ層は灰白火山灰、Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ層はシルト、Ⅺ層は粗砂、XⅡ層は砂質シルト、XⅢ層は粗砂である。

遺物は、Va・Vb・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ層に含まれるが、出土遺物の7割が、Va・Vb層中、及び、Vb層上面、Ⅵ層上面、Ⅷ層上面から出土している。Vb層は調査区の北東半分に、Ⅷ層は南西半分に分布しているが、遺構の検出状況、遺物の出土状況から、Vb・Ⅵ・Ⅷ層の各上面に生活面の存在が推定できる。Vb・Ⅵ層上面は標高10.6～10.7mで、ほぼ水平に堆積しているが、Ⅷ層上面は、調査区の南方へ向かってやや傾斜している。

Ⅶ・Ⅸ層を剝土すると、Ⅹ層が調査区全域に拡がったが、Ⅹ層を一部掘り下げた段階で、調査区の東側半分に、ほぼ南北方向に、幅5m以上の第1号河川を検出した。Ⅹ・Ⅺ層はこの河川の埋土であるが、河川は未完堀である。Ⅶ層はこの河川がほぼ埋まりきってから降下したものと考えられる。

Ⅱ区の基本層位は、17枚確認された。Ⅰ～Ⅲ層は、盛土・表土・旧表土で、Ⅳ層以下の土性は以下のとおりである。Ⅳ・Va～Vc層はシルト、Ⅵa・Ⅵb層は粘土質シルト、Ⅶa層はシルト、Ⅶb層は砂質シルト、Ⅶc・Ⅷa層は粘土質シルト、Ⅷb層は粘土、Ⅸ層は砂、Ⅹ層は細砂、Ⅺ～XⅢ層は粘土質シルト、XⅣ層は細砂、XⅤ・XⅥ層は粘土質シルト、XⅦ層は粘土である。

遺物は、Ⅱ～Ⅶ層に含まれるが、出土遺物の7～8割がⅤ層とⅦ層に包含されている。遺物を含む各層は、標高10.4～11.2mの範囲に、ほぼ水平に堆積している。遺構はⅤ・Ⅵ・Ⅶ層の各上面で確認されているが、基本層の各層と基本層を除く亜層、遺構内埋土層の土色・土性が非常に類似しており、遺構の確認は困難であった。未確認の遺構が他に存在していたことが充分考えられる。

Ⅶc層を剝土すると、Ⅷa層が調査区の全域に拡がったが、Ⅷc層を一部堀り下げた段階で、調査区の東隅に、幅３ｍ以上の第１号河川を検出し、完掘した。

尚、XⅢ層以下については、深掘区Ａ・Ｂ２地点での部分調査である。

Ⅰ区とⅡ区の基本層位は、土色・土性がⅠ区では褐色・黄褐色を基調とするシルト・砂質シルトなのに対し、Ⅱ区は、暗褐色・灰黄褐色を基調とする粘土質シルトであり、両調査区間が約75ｍにもかかわらず、層の変化が著しい。層の対比が可能なのは、Ⅰ区のⅦ層とⅡ区の第１号土壙埋土１層の灰白火山灰層のみである。

本調査で生活面が把えられたのは、両区のⅤ層前後の層で、時代は７世紀後半から10世紀代に限定される。又、この時期以前のこの時期に近接した時期に、笊川の影響を受けた時期があったことが確認された。

V．Ⅰ区の調査

1．発見遺構

(1) 土　壙

1号土壙

長軸 100cm、短軸60cm、深さ24cmを計る楕円形の土壙で、Ⅴb層上面で検出された。断面形はU字状を呈し、堆積土は１層で、出土遺物はない。

2号土壙

長軸 130cm、短軸90cm、深さ26cmを計る卵形の土壙で、Ⅴb層上面で検出された。断面形は、V字状を呈し、壁は緩やかに立つ。堆積土は１層で炭を含む。出土遺物はない。

3号土壙

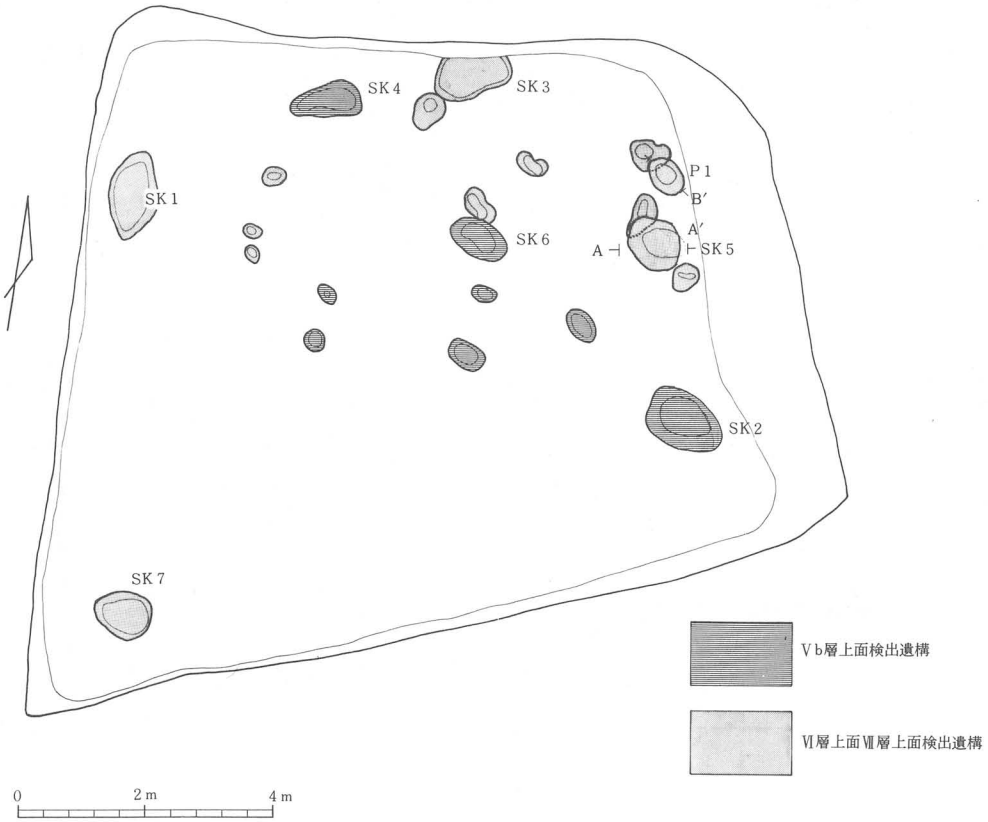
長軸 120cm、短軸60cm以上、深さ10cmを計る不整形の土壙で、Ⅴb層上面で検出された。断面形はU字状を呈し、底面はほぼ平担で、壁面は70°位に急に立ち上がる。堆積土は１層でオリーブ黒色のシルトであり、炭を多量に含む。出土遺物は土師器が２点あり、ロクロを使用した土師器が１点含まれる。

4号土壙

長軸 110cm、短軸50cm、深さ15cmを計る不整形の土壙で、Ⅵ層上面で検出された。断面形はU字状を呈し、底面はほぼ平担で、壁は急に立ち上がる。堆積土は１層である。

5号土壙

長軸 100cm、短軸80cm、深さ50cmを計る楕円形の土壙で、Ⅵ層上面で検出された。底面は東



第3図　Ⅰ区層位別遺構配置図

第1表　SK－6　出土遺物集計表

種別	土師器					須恵器	縄文	
器種	坏(非ロクロ)	坏(ロクロ)		甕(非ロクロ)		坏		
	無段		底部切離技法					計
部位	口縁部～体部	口縁部～体部	回転糸切り	体部		口縁部～体部		
外面調整	不明	ロクロ	手打ちヘラケズリ	ハケメ	ナデ	ロクロ		
破片数	1		1	1	1	1	2	7
実測数		1						1
	1	2		2		1	2	8

第2表　SK－3
出土遺物集計表

種別	土師器		計
器種	甕(非ロクロ)	甕(ロクロ)	
部位	体部	体部	
外面調整	ケズリ	ロクロ	
破片数	1	1	2
	1	1	2

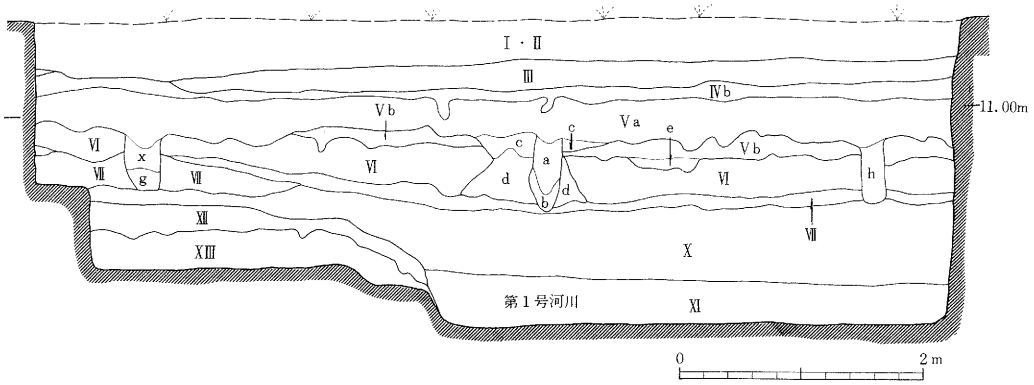
側にピット状の落ちこみがあり、西壁は若干オーバーハングしている。堆積土は5層にわかれ、土器片を4点出土している。ロクロを使用した土師器片が1点含まれる。中世陶器（鉢）片2点を出土している。

6号土壙

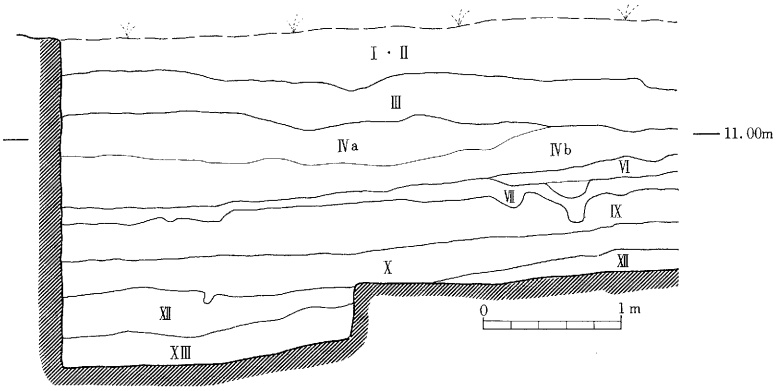
長軸180cm、短軸80cm、深さ30cmを計る楕円形の土壙で、Ⅵ層上面で検出された。断面形はU字状で底面は平担である。堆積土は2層であり、ロクロを使用した土師器2点(第9図No.1)ロクロを使用しない土師器片3点、縄文土器片2点を出土している。

7号土壙

長軸100cm、短軸70cm、深さ15cmを計る楕円形の土壙で、Ⅶ層上面で検出され、断面はV字状である。堆積土は1層であり出土遺物はない。

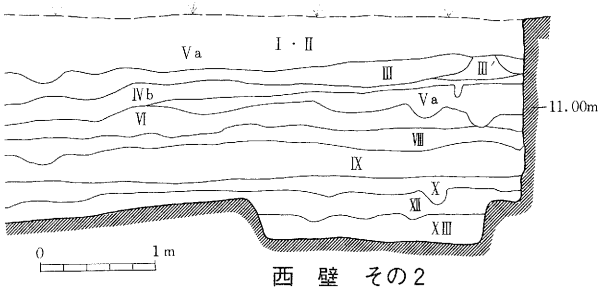


北　壁



西　壁　その1

第4図　Ⅰ区土層断面図　その1

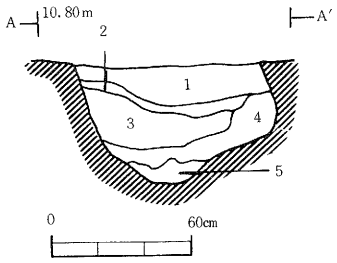


第5図　I区土層断面図　その2

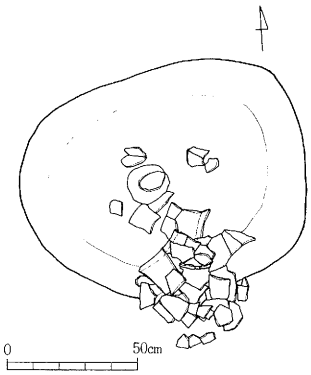
第3表　SK－5　出土遺物集計表

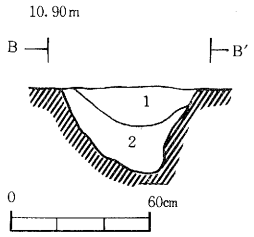
種別			土師器				中世陶器	計
器種			坏(非ロクロ)	坏(ロクロ)		甕(非ロクロ)	鉢	
			無段					
部位			口縁部～体部	口縁部～体部		体部		
外面調整			ヨコナデ	ロクロ	不明	不明		
層	1～2	破片数		1	1		2	4
	3～4	破片数	1			1		2
			1	2		1	2	6

層No.	土色	土質	その他	層No.	土色	土質	その他
I・II			盛土及び表土	XI	10YR5/6・黄褐色	粗砂	
III	7.5GY5/1・暗緑灰色	シルト	旧耕作土・酸化鉄・炭化物を含む	XII	5Y3/1・オリーブ黒色	砂質シルト	炭化物を含む
III′	7.5YR5/4・褐色	砂	酸化鉄・マンガン粒を含む	XIII	10YR5/4・黄褐色	粗砂	酸化鉄を含む
IVa	7.5YR5/4・褐色	細砂		a	10YR5/4・褐色	粘土質シルト	砂や炭化物を含む
IVb	7.5YR5/4・褐色	細砂	酸化鉄を含む	b	7.5YR3/2・黒褐色	粘土質シルト	炭化物を含む
Va	10YR3/4・暗褐色	シルト	砂・マンガン粒の他、遺物、炭化物を含む	c	10YR3/4・にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒・酸化鉄を含む
Vb	10YR5/6・褐色	シルト	炭化物を含む、遺物を含む	d	2.5Y5/3・にぶい橙色	砂質シルト	マンガン粒を含む
VI	10YR5/3・にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄・炭化物を含む、遺物を含む	e	2.5Y5/3・黄褐色	砂質シルト	炭化物（径2cm弱）を含む
VII	2.5Y7/1・灰白色	灰	灰白火山灰層、マンガン粒、遺物を含む	f	10YR5/4・にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒を含む
VIII	10YR3/3・暗褐色	シルト	炭化物を含む、遺物を含む	g	2.5Y5/2・暗灰黄色	シルト	
IX	10YR5/6・褐色	シルト	マンガン粒・炭化物を含む、遺物を含む	h	10YR3/4・黄褐色	粘土質シルト	砂や炭化物を含む
X	10YR5/4・にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒・炭化物を含む、遺物を含む	i	7.5YR5/4・褐色	シルト	酸化鉄を含む



第6図　5号土壙断面図





第8図　1号ピット断面図

第7図　7号土壙および一括土器平面図

第5号土壙

層No.	土色	土質	その他
1	10YR3/3・暗褐色	シルト	炭化物、遺物を含む
2	10YR3/4・暗褐色	シルト	
3	10YR3/3・暗褐色	シルト	炭化物、焼土を含む
4	10YR3/3・暗褐色	シルト	炭化物（5mm以下）、砂を含む
5	10YR5/6・黄褐色	粘質シルト	

第7号土壙埋土

層No.	土色	土質	その他
単層	2.5Y5/3・オリーブ褐色	粘土質シルト	炭化物、焼土粒、酸化鉄、砂、遺物を含む

第1号ピット

層No.	土色	土質	その他
1	10YR3/3・暗褐色	シルト	砂、炭化物を含む
2	10YR3/3・暗褐色	シルト	

(2)　1号河川跡

調査区の中央部Ⅹ層中で検出された。方向は、N—20°—Wであり、東側の立ち上がりは調査区外にあるために河川の幅は確認できないが、上端幅は6m以上であり、深さは1.5m以上を計る。堆積土は2層以上であり、1層は本調査区全体にも検出され黄褐色、砂質シルトである。出土遺物は土師器片が4点ある（第9図No.4）。この1号河川は本調査区の南隣にある旧笊川に直交する。

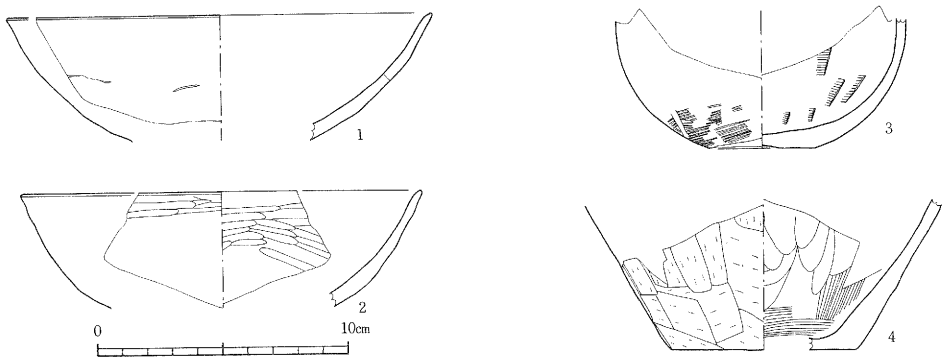
(3)　ピット

ピット4　Ⅴb層上面で検出　円形で直径40cm、深さ13cmを計る。堆積土は1層で土師器片2点を出土。ロクロを使用した土器が1点含まれる（第9図No.2）。

ピット15　Ⅵ層上面で検出　楕円形で長径45cm、深さ15cmを計る。堆積土は1層。土師器壺の一部出土（第9図No.3）。この土器は平底の底部よりゆるやかに立ち上がり、体部中央で直立ぎみになる。外面の調整はハケメのちナデ、内面の調整はヘラナデである。

ピット7　Ⅴb層上面で検出　楕円形で長径60cm、深さ20cmを計る。堆積土は1層。土師器片7点、須恵器片1点、計8点を出土。8点ともロクロ使用の土器片である。

他にⅤb層上面で検出されたピットは4個。Ⅵ層上面で検出されたピットは9個ある。

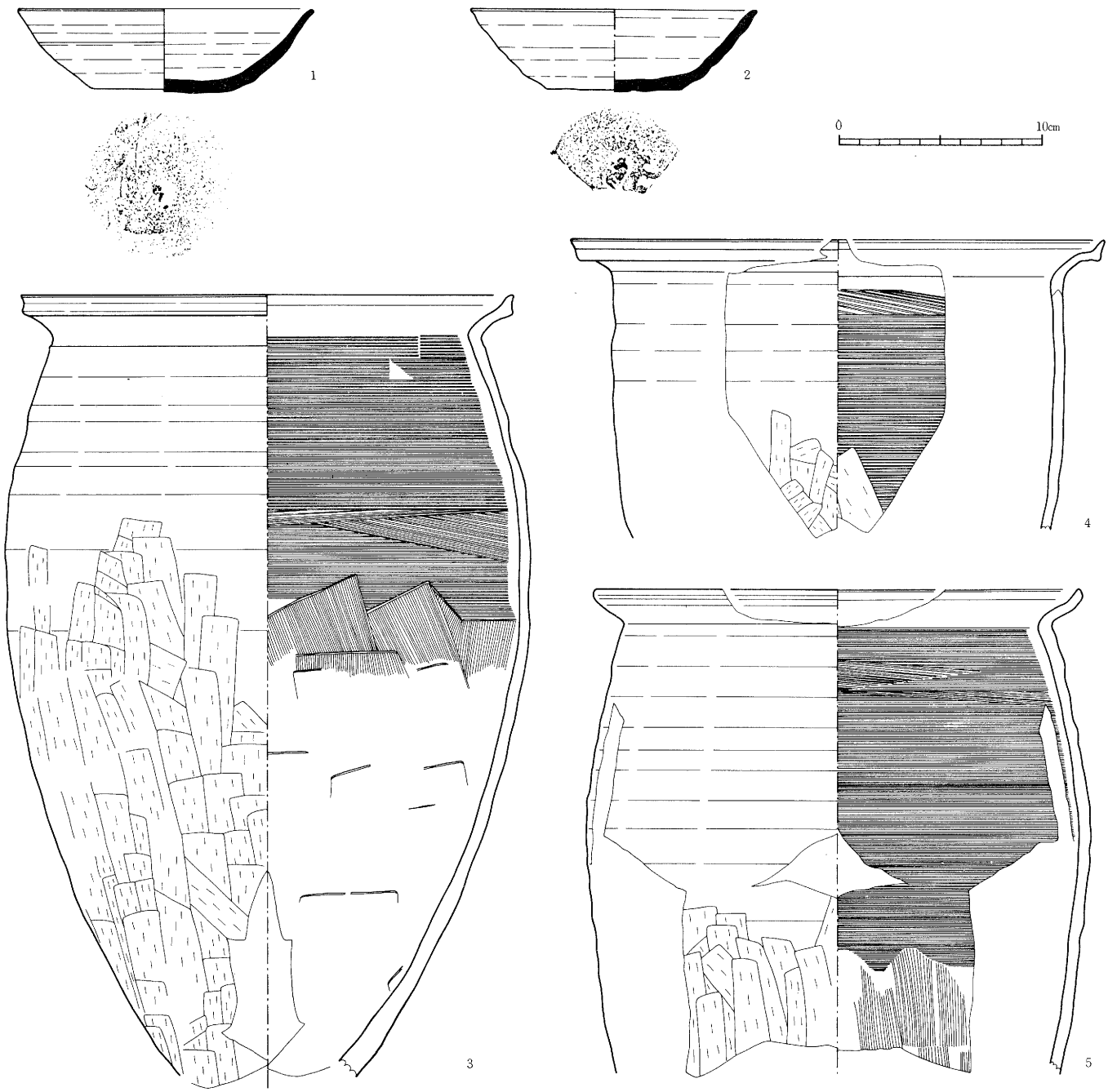


遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	登録No.	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径				
1	土師器	坏	SK6－1層	不明	不明	不明	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(5.0)	16.8		⅙		D－6	
2	〃	〃	Pit 4	ヘラミガキ	ロクロ	不明	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(4.6)	15.8		⅙		D－5	
3	〃	壺	Pit 15		ハケメナデ	ケズリ		ヘラナデ	ヘラナデ	(5.6)		4.2	⅓		C－4	
4	〃	甕	1号河川		ケズリ	ケズリ		ナデ	ヘラナデ	(6.0)		(7.4)	底部⅓		C－3	

第9図　Ⅰ区遺構内出土土器

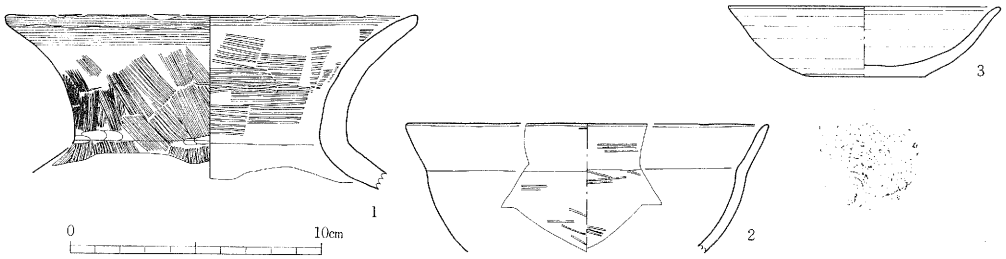
(4)　遺構以外の出土遺物

Ⅴ層より土師器片3点出土している。①土師器坏の口縁部（第11図No.2）体部よりゆるく立ち上がり、頸部より口縁部へ外反する。内外面ともに摩滅しているがハケメが認められる。②



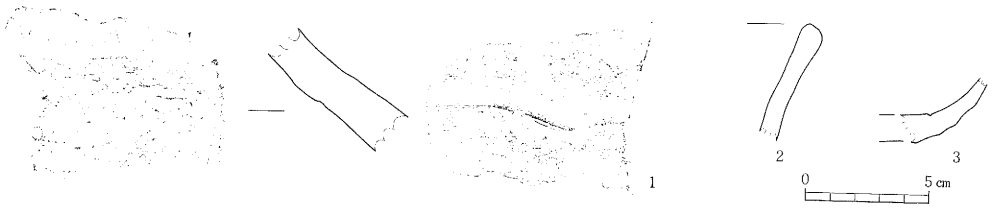
遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	登録No.	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径				
1	須恵器	坏	Ⅷb層	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り 手持ヘラケズリ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	4.1	14.4	7.0	ほぼ完形		E－1	35－5
2	〃	〃	〃	〃	〃	回転ヘラ切り	〃	〃	〃	4.0	10.0	6.6	¼		E－2	
3	土師器	甕	〃	〃	ロクロ ケズリ		〃	ロクロナデ ヘラナデ		(39.0)	24.2		½		D－2	38－4
4	〃	〃	〃	〃	ロクロ ケズリ		ヨコナデ	ロクロナデ ケズリ		(14.7)	26.0		⅙		D－4	38－2
5	〃	〃	〃	〃	ロクロ ヘラケズリ		ロクロ	ロクロナデ ヘラナデ		24.0	23.7		⅓		D－3	38－3

第10図　Ⅰ区南西角Ⅷ層出土一括土器



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	登録No.	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径				
1	土師器	甕	Ⅴ層	ヨコナデ、ハケメ一部ナデ			ヨコナデハケメ			(6.4)	16.2		口縁完形		C－2	37－6
2	〃	坏形土器	〃	ハケメ	ハケメ		ハケメ	ハケメ		(5.1)	14.3		⅛		C－1	
3	〃	坏	〃	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ロクロ	ロクロ	ロクロ	2.8	10.7	4.6	¼		D－1	38－1

第11図　Ⅰ区Ⅴ層出土土器



1．Ⅴ層出土　2．SK5 1～2層出土　3．Ⅴ層出土
第12図　陶磁器

土師器甕の口縁部（第11図No.1）頸部より口縁部へ外反し、口唇部で直立する。内外面の調整はともにヨコナデ、ハケメである。③土師器坏（第11図No.3）回転糸切り底部切り離し技法で、器高2.8cmと小さい、内外面ともにロクロ調整である。

Ⅸ層より須恵器2点、土師器3点出土している。①須恵器坏（第10図No.1）底部は回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリで器高4.1cm、内外面ともにロクロ調整である。②須恵器坏（第10図No.2）底部は回転ヘラ切り無調整、器高4.0cm、内外面ともにロクロ調整である。③土師器（第10図No.3）いわゆる長胴甕で、口縁部は「く」の字形をしており口唇部に至るところに凹をもつ。外面の調整はロクロ調整で、体部下半はその後ヘラケズリであり、内面の調整はロクロ調整後、体部下半はその後ヘラナデ。④土師器甕（第10図No.5）③と同じ長胴甕で調整も同様であるが、口唇部に至るところに丸味をもつ。全体にすすが付着している。⑤土師器甕（第10図No.4）体部上半は直立し口縁部に至って、大きく外反し口唇部に至って直立ぎみとなる。内外面ともにロクロ調整、体部下半はその後ヘラケズリ。

陶磁器としては、中世陶器片3点と青磁1点が出土している。第12図No.1はⅤ層より出土した赤褐色を呈する無釉陶器の甕の体部片で、内外面ともナデにより調整される。No.2は5号土壙から出土した無色からやや緑がかった自然釉が薄くかかった灰色の鉢形の陶器である。調整

は内外面ともロクロによる。平安末期から鎌倉時代にかけての常滑産と考えられる。これと同一個体片が他に1点5号土壙から出土している。No.3はオリーブイエローの釉のかかった中国産青磁の碗で、内面には劃花花弁文が描かれている。年代としては13～14世紀頃と考えられる。

Ⅵ. Ⅱ区の調査

1．発見遺構

Ⅱ区における発見遺構は、Ⅴ層上面で竪穴住居跡1軒（ＳＩ１）、掘立柱建物跡1棟（ＳＢ１）、土壙3基（ＳＫ1･2･3）、溝3条（ＳＤ2･8･9）、ピット数個、Ⅵ層上面で掘立柱建物跡1棟、溝2条（ＳＤ5･6）、竪穴状性格不明遺構1基（ＳＸ１）、Ⅶ層上面で溝2条（ＳＤ3･4）、Ⅷ層上面では4個の柱穴からなる性格不明遺構1基（ＳＸ２）、溝1条（ＳＤ７）といった遺構がある。

(1) 竪穴住居跡

1号住居跡（SI1）

〔確認面・重複〕　水田床土下の酸化鉄層を除去したⅤ層上面で検出された。1号掘立柱建物跡及び8・9号溝に切られている。

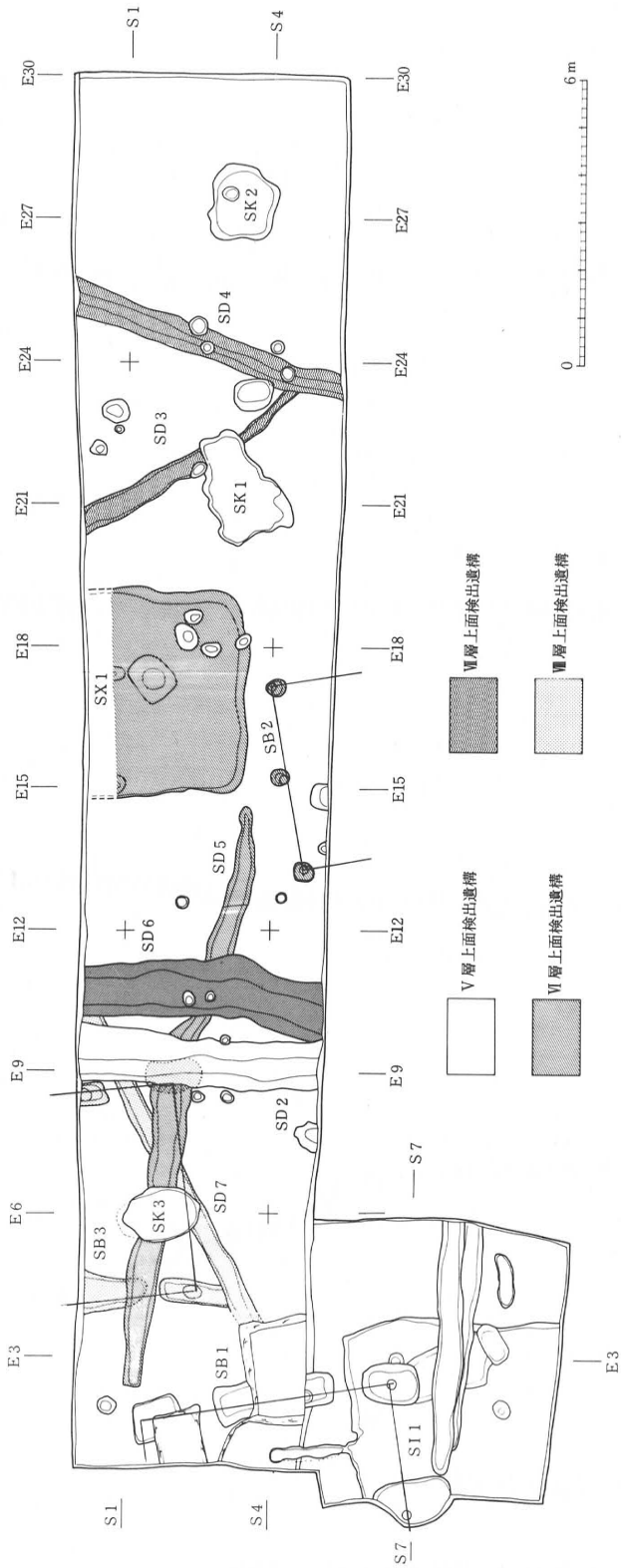
〔平面形・規模・保存状況〕　調査区の拡張部においても、南辺及び西辺の全部と東辺及び北辺の一部を検出できず、その規模については不明である。検出部の範囲は東西　4.27m・南北4.23mを計る。平面形は方形または長方形を呈すると考えられる。柱穴及び9号溝によって床面の一部が削平されているが、比較的保存は良い。壁は北側程保存が良く、南側程耕作による削平が深い。

〔堆積土〕　堆積土はベルトの位置で18層に大別されたが、その大部分を占めるのが、2層と3層である。2層は暗褐色の粘土質シルト層で堆積土の上部を占め、3層は黒褐色の粘土質シルト層で堆積土の下部を占める。堆積土の厚さは北部で24cm、南部で12cmを計る。

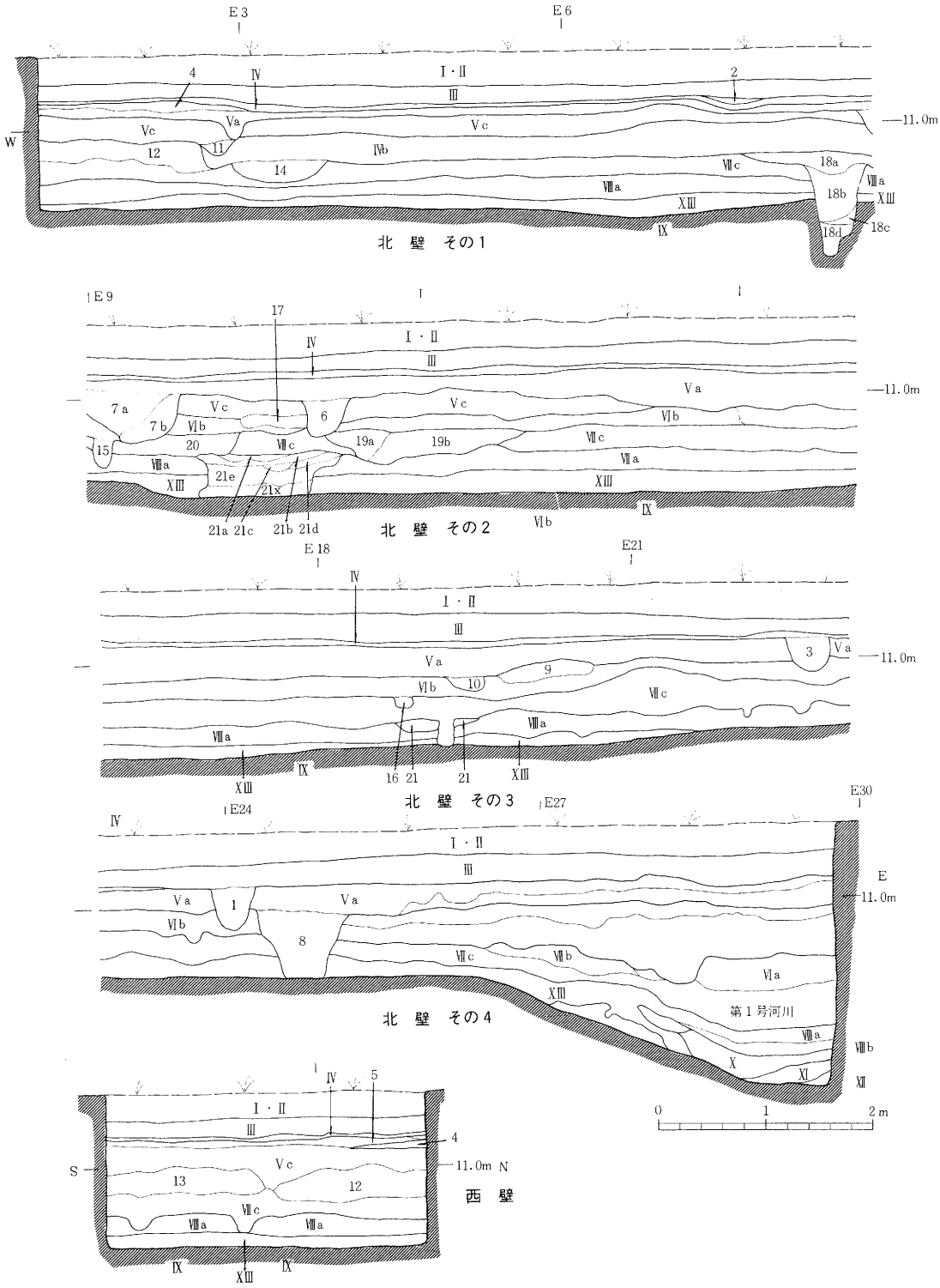
〔壁・床〕　床面はほぼ平坦で、壁は床面より約70°の角度で立ち上がる。壁面の東辺北部は外方にわずかに張り出している。

〔柱穴〕　床面の検出範囲内においては、ピットが2個検出されたが、柱穴と考えられるものではなかった。竪穴内に柱穴があったとすれば、北東角のものについては、1号掘立柱建物のＰ4によって切られている可能性が強い。

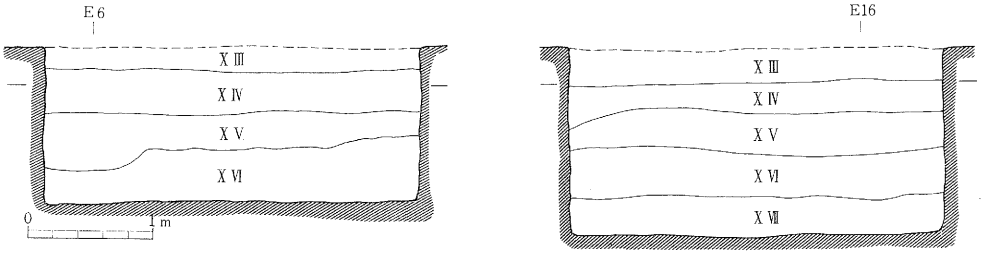
〔カマド〕　カマドは北壁と東壁にそれぞれ新旧の二基が検出された。



第13図　Ⅱ区層位別遺構配置図



第14図　Ⅱ区西壁面及び北壁面図



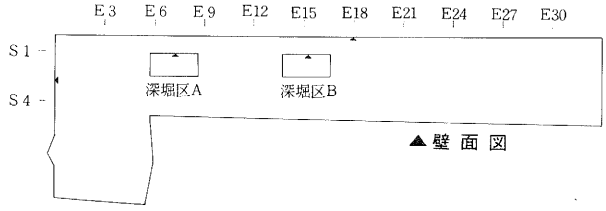
第15図　Ⅱ区深掘区A・B北壁断面

層No.	土色	土質	その他
1	10YR3/2 灰黄褐色	シルト	マンガン粒・焼土・酸化鉄・炭化物を含む
2	2.5Y5/2 暗灰黄色	シルト	マンガン粒を多く含む
3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒を含む、5Y5/1灰色の粘土をブロック状に含む
4	2.5Y5/2 暗灰黄色	シルト	マンガン粒を多く含む
5	2.5Y5/2 暗灰黄色	シルト	マンガン粒を多く含む
6	10YR4/4 褐色	シルト	
7a	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	炭化物・焼土・マンガン粒を多く含む
7b	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土・遺物を含む
8	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒を含む
9	10YR3/2 黒褐色	シルト	マンガン粒を含む、10YR5/4褐色の粘土を含む
10	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
11	10YR5/3 暗褐色	シルト	焼土・炭化物・マンガン粒を含む
12	7.5YR5/2 灰褐色	粘土質シルト	焼土粒を多量に炭化物は少量含む
13	10YR5/3 暗褐色	シルト質粘土	焼土粒を多量に炭化物は少量含む
14	7.5YR5/3 褐色	粘土質シルト	焼土粒を多量に炭化物は少量含む
15	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	焼土とマンガン粒含む
16	10YR3/3 暗褐色	シルト	
17	2.5Y3/3 黒褐色		
18a	7.5YR5/4 褐色	粘土質シルト	焼土粒を多く炭化物は少量含む
18b	10YR5/4 褐色	粘土質シルト	少量の焼土粒を含む
18c	10YR5/4 褐色	粘土質シルト	砂を含む
18d	10YR5/4 褐色	粘土質シルト	砂・酸化鉄を含む
19a	10YR5/4 褐色	シルト	
19b	10YR5/4 褐色	粘土質シルト	
20	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	焼土粒・炭化物を含む
21	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
22a	2.5Y5/3 黄褐色	砂	
22b	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物と焼土を含む
22c	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	粗砂
22d	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	粗砂を含む
22e	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄・炭化物を含む
22f	10YR5/6 黄褐色	細砂	酸化鉄を含む

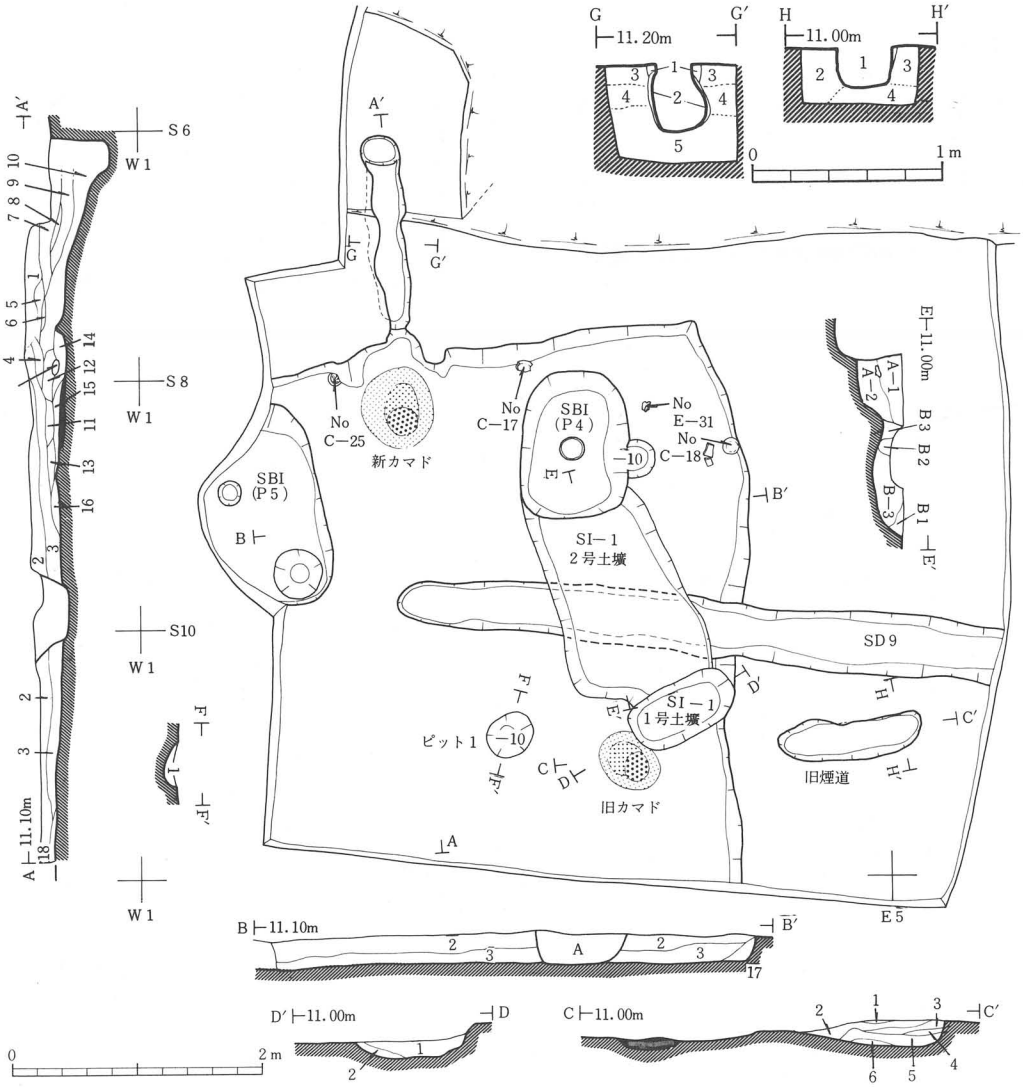
層No.	土色	土質	その他
Ⅰ・Ⅱ			盛土及び表土
Ⅲ	2.5YR5/1 黄灰色	シルト	炭化物を多く含む（水田床土）
Ⅳ	7.5YR5/4 褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む、遺物を含む
$Ⅴ_a$	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	炭化物を多量に含む、焼土粒・マンガン粒を含む、遺物を多く含む
$Ⅴ_b$	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	マンガン粒を含む
$Ⅴ_c$	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	マンガン粒を多量に含む、少量の酸化鉄を含む、遺物を多く含む
$Ⅵ_a$	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	灰色の粘土を帯状に含む、遺物を含む
$Ⅵ_b$	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒・砂を含む
$Ⅶ_a$	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	灰色の粘土を含む、遺物を含む
$Ⅶ_b$	10YR5/4 褐色	砂質シルト	5YR5/1褐灰色の粘土を帯状に含む、マンガン粒を含む
$Ⅶ_c$	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒を少量含む
$Ⅷ_a$	2.5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
$Ⅷ_b$	10YR5/4 オリーブ黒色	粘土	酸化鉄を帯状に多く含む
Ⅸ	2.5Y5/3 暗灰黄色	砂	酸化鉄を帯状に含む
Ⅹ	5GY5/1 オリーブ灰色	細砂	酸化鉄を帯状に含む
Ⅺ	N3/1 暗灰色	粘土質シルト	酸化鉄を帯状に含む、炭（?）を含む
Ⅻ	7.5GY3/1 暗緑灰色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む
XIII	褐色	粘土質シルト	遺物は出土していない
XIV	5GY5/1 オリーブ灰色	細砂	酸化鉄と炭（?）を帯状に含む
XV	N3/1 暗灰色	粘土質シルト	酸化鉄と炭（?）を帯状に含む
XVI	7.5GY3/1 暗緑灰色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む
XVII	7.5GY5/1 緑灰色	粘土	酸化鉄を斑状に含む

Ⅱ区土層註記表

Ⅱ区層序註記表



第16図　Ⅱ区深掘区位置図



（cm）

規　模	方　向	壁残存高	カ マ ド	周　溝	主柱穴	重　複	備　考
南北軸（423） 東西軸（427） 面　積	南 北 軸 N－2－W 東 西 軸 N－82－E	東　21 西　— 南　— 北　27	位　置　北壁中央付近 燃焼部　（縦96）×（横90） 煙　道　156×30	なし 床面標高 10.80m	不明	SI1 SD8.9　SB1	

層No.	土　色	土　質	そ の 他	層No.	土　色	土　質	そ の 他
1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	黒褐色焼土の大ブロックを多く含む	11	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	赤褐色焼土・炭化物を少量含む
2	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	炭・焼土・灰白土を含む	12	7.5YR4/6　褐　色	灰　・　焼　土	焼土は大形のブロック
3	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	炭・焼土を少量含む	13	7.5YR2/1　黒　色	シルト質粘土	焼土粒少量、灰・炭化物を多量に含む
4	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	赤褐色・暗褐色・焼土を含む	14	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	焼土・灰・炭化物を多量に含む
5	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	黒褐色焼土の小ブロックを多く含む	15	10YR2/1　黒　色	粘土質シルト	灰・炭化物を多量に含む
6	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト		16	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	
7	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	黒褐色焼土を多く含む	17	10YR3/3　黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒を含む
8	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土		18	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	褐色土を含む
9	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	焼土・炭を多量に含む	A	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	焼土粒を含む
10	7.5YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	暗褐色～黒褐色焼土粒を多量に含む	B	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物を少量含む

第17図　1号住居跡実測図

新しい方のカマドは、北壁と東壁との接点より240cmの所に中軸を置いて施設されている。カマド本体はほとんど残存せず、壁際に袖の一部が残るだけである。残存部の幅は約90cmで、煙道との接点から焼面の南端部までは約96cmを計る。煙道は幅が30cmで、接続部からの長さは156cmを計る。煙道の底面は北側が低くなり、端部はピット状に深くなっている。

古い方のカマドは、焼面と煙道の一部が残っている。焼面の中心は、北壁より約340cm離れ、東壁より75cmのところにある。東壁より焼面の西端までは102cmを計る。煙道は東壁から40cmのところから156cmのところまで、長さ116cm・幅32cmの溝状に検出された。古い方の煙道の底面も外方（東側）が低くなっている。

〔その他の施設〕　床面では2基の土壙と2個のピットが検出された。

1号土壙は、床面で検出され、2号土壙・旧カマド焼面及び東壁の一部を切っている。長軸87cm・短軸46cmを計り、平面形は隅丸長方形を呈す。深さは12cmを計り、断面形は舟底形を呈する。

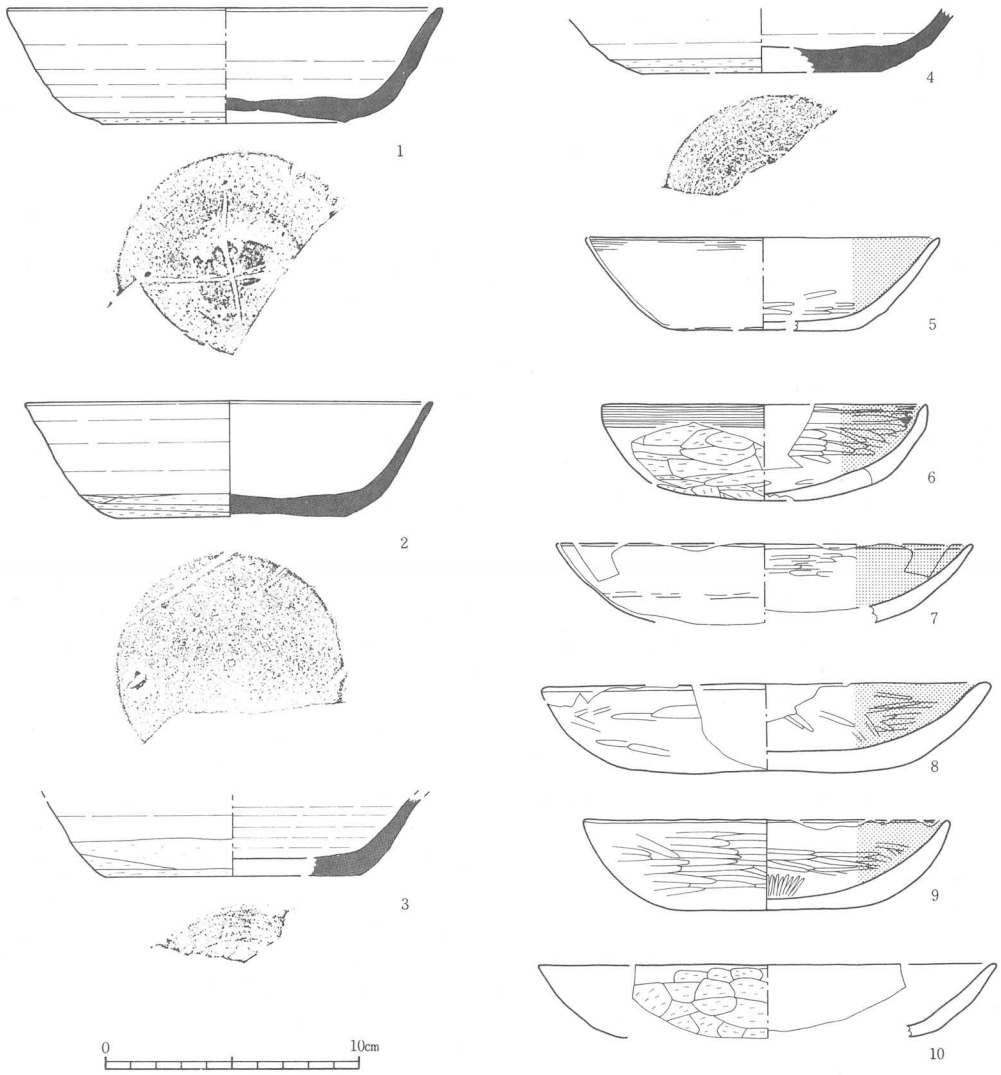
2号土壙は北辺と南辺をそれぞれ1号掘立柱建物跡P4・1号土壙に切られているが、隅丸長方形を呈するものと考えられる。長軸は190cm・短軸112cm・深さ35cmを計る。底面は2段となり北側が一段低くなっている。

2個ピットのうち、ピット1は旧カマドの前方やや左寄りに位置するが、このピット内には、カマド内から掻出したような焼土と灰が堆積していた。

第4表　SI－1出土遺物集計表

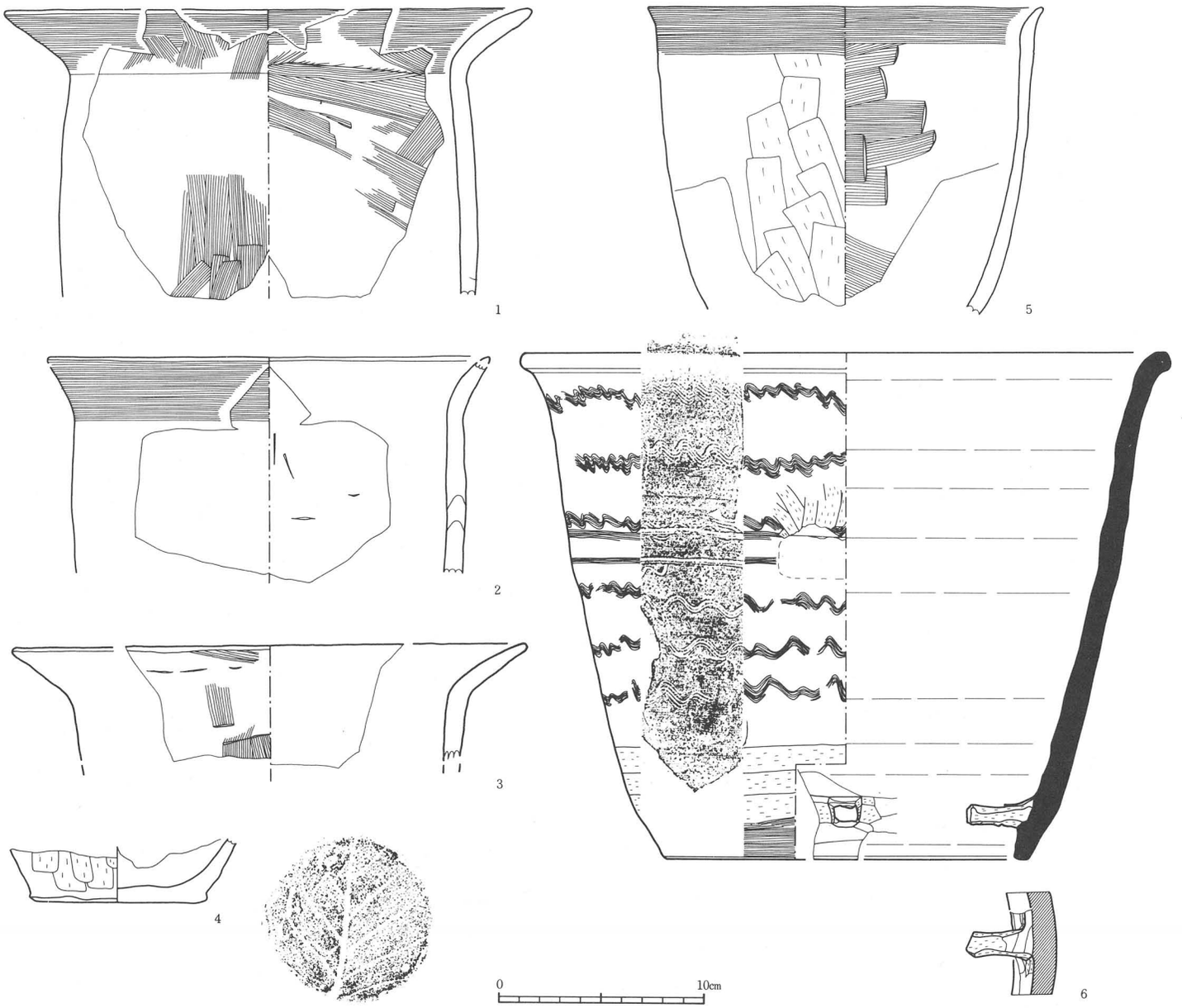
種別			土師器																			須恵器												縄文	鉄製品	
器種			坏（非ロクロ）							坏（ロクロ）	甕（非ロクロ）									甕（ロクロ）		坏				甕				高台付甕	瓮	甑		鉄滓		
			有段		無段																	底部切離し技法→調整														計
部位			口縁部～体部		口縁部～体部			底部		口縁部～体部	口縁部	体部						底部		口縁部	体部	口縁部～体部	ヘラ切り			回転糸切り	口縁部	体部								
外面調整			ヨコナデ	不明	ヨコナデ	ミガキ	不明	丸底	平底	ロクロ		ハケメ	ケズリ	ナデ	ヘラナデ	不明	ケズリ	木葉痕	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	無	回転ヘラケズリ	回転	不明	無	無 文	ロクロ	タタキ目						
出土地点	確認面	破片数										1	1	1				1		2	1															7
	2層	破片数	4		47	6	2		2	1	11	12	12	41		32	3	5			7	1				1	2	1	5		1	2	3	2	203
	3層	破片数			35	22	2		1		8	8	29	45		18	1	3	1	2	7				1			6	3	1		1	5		220
		実測数			2									2									3													7
	床面	破片数				1																														1
	床直	破片数			4	2						6		1					1										1							15
		実測数				2									1								1													4
	灰下	破片数				1																							1							3
	旧煙道内	破片数	1		1	1											1																			4
	かまど内	破片数			2	1	1	1			1																	1								7
		実測数					1				1																					1				3
	1号土壙	破片数			1															1			1													3
	2号土壙	破片数			6	4					2																									12
		実測数		1																																1
計			155							1	268								7		23					20				1	1	4	8	2	490

〔出土遺物〕　出土遺物は2・3層中より437点、床面・カマド内その他より53点の計490点と、多数の遺物が出土したが、実測可能なものは須恵器坏4点・土師器坏6点・土師器甕5点・須恵器甑1点の計16点である。須恵器坏は、床面出土品も3層出土品も、口径に比して底径が大きく、器高が小さいもので、底面は切り離し技法のわかるもの（第18図 No.1）は回転ヘラ



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	登録No.	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径				
1	須恵器	坏	2層	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り 回転ヘラケズリ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	4.5	17.0	9.4	3/5		E－29	35－4 36－2
2	須恵器	坏	2層	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り 回転ヘラケズリ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	4.6	15.9	9.0	1/2		E－30	35－3
3	須恵器	坏	2層		ロクロ	不明 回転ヘラケズリ		ロクロ	ロクロ	(3.0)		10.0	1/4		E－28	
4	須恵器	坏	床直		ロクロ	不明 回転ヘラケズリ		ロクロ	ロクロ	(2.4)		9.4	1/3		E－31	
5	土師器	坏	2層	ヨコナデ	不明	不明	不明	不明	ヘラミガキ	3.7	13.8	(7.0)	1/4		C－15	
6	土師器	坏	2層	ヨコナデ	ケズリ	ケズリ	ヨコナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.8	12.6	8.3	2/3		C－16	37－2
7	土師器	坏	SK－2	不明	不明	不明	ヘラミガキ	不明	不明	(3.1)	16.3		1/6		C－20	
8	土師器	坏	床直	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	3.5	17.4	7.3	1/2		C－17	37－5
9	土師器	坏	床直	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	3.6	14.2	7.5	完形		C－18	37－4
10	土師器	坏	カマド内	不明	ケズリ	ケズリ	不明	不明	不明	(2.8)	17.8		1/6		C－19	

第18図　1号住居跡出土土器(1)



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	登録No.	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径				
1	土師器	甕	2層	ヨコナデ ヘラナデ	ヘラナデ		ヨコナデ ヘラナデ	ヘラナデ		(14.0)	25.2		¼		C－22	
2	土師器	甕	床直	ヨコナデ	ヘラナデ		不明	ヘラナデ		(10.5)	21.4		⅓		C－23	
3	土師器	甕	カマド内	ヘラナデ	ヘラナデ		不明	不明	不明	(5.5)	19.6		⅙		C－24	
4	土師器	甕	カマド内		ケズリ	木葉痕		ヘラナデ	ヘラナデ	(2.9)		7.6	底部完形		C－25	
5	土師器	甕	2層	ヨコナデ	ケズリ		ヨコナデ	ヘラナデ		(14.7)	19.0		¼		C－21	37－7
6	須恵器	甑	カマド内	ロクロ	ロクロ 波状沈線 一部ケズリ	回転ヘラケズリ 一部ヘラナデ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	24.6	31.0	17.6	⅓		E－23	36－1

第19図　1号住居跡出土土器(2)

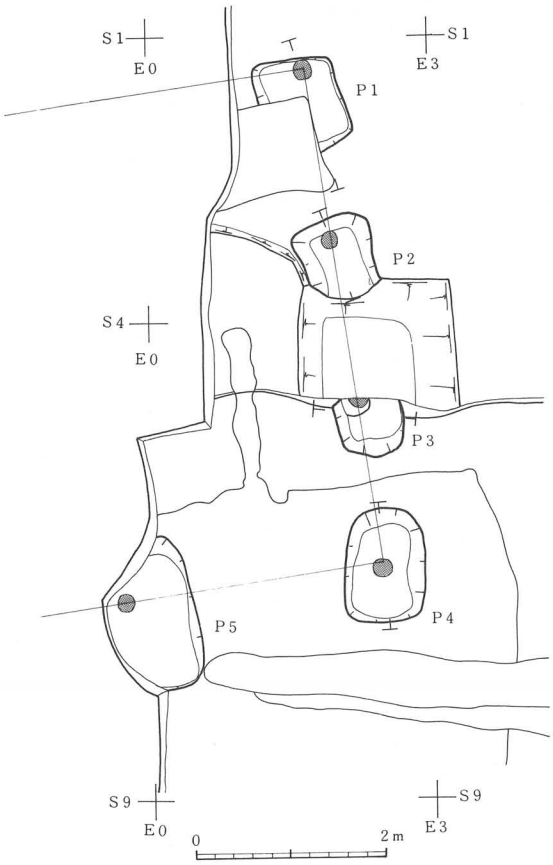
切リによる。切り離し後は底面と体部下端は回転ヘラケズリ調整されている。土師器は坏・甕ともロクロは使用されていない。坏は、丸底または丸底風平底のもので、底部と口縁部の境に沈線状の段を有し、口縁が内弯するもの（第18図 No.7）と、底部から口縁部まで内弯して立つもの（第18図 No.6・8・9・10）と、底部から口縁部まで外傾して立つものがある。土師器甕は体部上半4点と底部片1点がある。体部上半は体部と口縁部の接続部はほとんどくびれず、口縁部は幅が広く強く外に折れるもの（第19図 No.1・3）と口縁幅が狭く軽く外反するものとがある。口縁部は内外面ともヨコナデ調整され、体部内面はヘラナデ調整されるものが全てであるが、体部外面はヘラナデによるもの（第19図 No.1・2・3）と、ヘラケズリによるもの（第19図 No.5）がある。須恵器の甑は孔部のすぼまる円筒形を呈し、孔部は単孔となっている。孔部の内面に孔端部より2cm程上に幅1.5cm・厚さ1cm・長さ約3cmの断面四角形の棒状の突起が付されている。突起は3本か4本と考えられるが、明らかでない。体部外面には、中央よりやや上に2条（条間約1.5cm）の沈線が巡ぐり、沈線の上には把手を付けたと考えられる剝離痕がある。沈線の上部と下部にはそれぞれ3段、計6段の波状沈線文が巡ぐらされている。なお、この甑はカマド煙道端部埋土出土片と、住居跡埋土3層出土片等が接合したものであり、住居跡と直接関係のあるものとは考えられない。

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（SB 1）

Ⅱ区の西端及びその拡張区のⅤ層上面で検出された。東列と南列の一部だけの検出であるが、東西棟建物跡と考えられる。東西桁行1間（275cm）、梁行3間（北より 180＋170＋175cm）、桁行総長275cm以上、梁行総長525cmを計る。建物の方向はN—8°30′—Wである。柱穴掘り方は隅丸の方形または長方形で長軸が110cm～160cm・短軸70～85cmを計る。確認面の最も高い東列1南1の上面を基準とした深さは68～95cmまである。ただし東列1南1（ピット4）については掘り方底面より30cmまでは柱を入れる以前に叩き締めながら埋めているので、柱の底面までの深さは55cmとなっている。柱痕跡は平均直径19cm程である。柱穴掘り方埋土は褐色から黒褐色を主体としたシルトまたは粘土質シルト層からなる。1号住居跡を切っている。

出土遺物には掘り方中より出土した106点の土器の破片がある。縄文土器片・土師器片・須恵器片があるが、図化できたのは、土師器坏2点と、須恵器の短頸壺の口縁部片1点である。土師器坏は、ロクロを使用していない丸底風平底のもので、底部から口縁部まで外傾して立ち上がる。実測した実物のうち、（第22図 No.1・3）については、1号住居跡内の遺物を反映している可能性がある。出土遺物には図化したもの以外にロクロを使用した土師器の坏及び甕があり、この遺構の年代については、このロクロ土師器の年代をもって考えるべきである。



◀ 第20図　1号掘立柱建物跡実測図

P 1

層No.	土色	土質	その他
1	10YR3/3 黒褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物を少量含む
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	

P 2

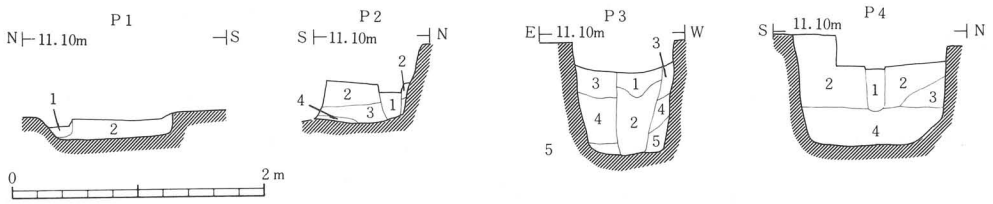
層No.	土色	土質	その他
1	5Y4/1 灰色	粘土質シルト	焼土を少量含む
2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物を少量含む
3	10YR3/3 黒褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物を少量含む
4	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	砂をわずかに含む

P 3

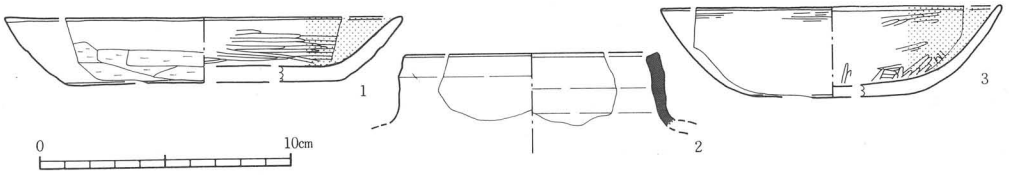
層No.	土色	土質	その他
1	10YR3/3 黒褐色	シルト	
2	10YR4/4 褐色	シルト	炭を多く含む
3	10YR3/3 暗褐色	シルト	
4	10YR6/3 にぶい黄褐色	シルト	
5	10YR3/3 黒褐色	シルト	

P 4

層No.	土色	土質	その他
1	10YR3/3 黒褐色	粘土質シルト	
2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	褐色土・焼土を含む
3	10YR3/3 黒褐色	粘土質シルト	褐色土を斑状に含む
4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	褐色土及焼土を含む、強く叩き締められている



第21図　1号掘立柱建物跡柱穴断面図



SB−1

遺物No.	種別	器形	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	法基 器高	法基 口径	法基 底径	残存	分類	登録No.	写真図版
1	土師器	坏	Pit4	不明	ケズリ	ケズリ	不明	ヘラミガキ	ヘラミガキ	2.6	15.8	(11.0)	1/4		C−13	
2	須恵器	壺	Pit2	ロクロナデ			ロクロナデ			(2.7)	10.0		口縁 1/8		E−27	
3	土師器	坏	Pit5	ヨコナデ	不明	不明	ヨコナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	3.6	13.4	(6.2)	1/6		C−14	

第22図　1号掘立柱建物跡出土土器

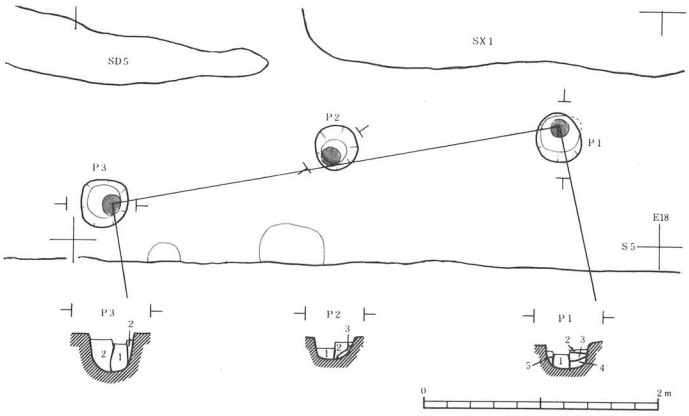
第5表 SB－1出土遺物集計表

種別			土師器														須恵器					縄文	
器種			坏（非ロクロ）					坏（ロクロ）	甕（非ロクロ）					甕（ロクロ）		坏	蓋	壺	甕				
			無段																				計
部位			口縁部～体部			底部			口縁部	体部			底部	口縁部	体部	口縁部～体部							
外面調整			ヨコナデ	ミガキ	ケズリ	不明	丸底	平底		ハケメ	ケズリ	ナデ	不明	木葉痕	ロクロ	ロクロ	ロクロ		ロクロ	タタキ目			
出土地点	Pit 1	破片数	1							4	1	2				2		1	1				12
	Pit 2	破片数								3	2				2	1	1	1					10
	Pit 3	破片数		3						4	3	2					3			1		1	17
	Pit 4	破片数		4		1	1	1		3	4	3		2	1					1			22
		実測数			1																		1
	Pit 5	破片数	6	4		2			1	2	5	2	5	4	1		3	2			1	3	1	42
		実測数	1																1				2
計			26						1	52						9		6	2	1	7		2	106

2号掘立柱建物跡（SB 2）

Ⅱ区中央部南壁寄りのⅥ層上面で検出されたが、柱穴の深さ及び検出時の状況により判断するとⅤ層上面から掘り込まれた可能性が強い。この建物の主体は調査区の南側にあり、調査区内からは北列が検出されただけである。これが桁行か梁行かは不明である（梁行の可能性が強い）が、東西2間（西より 190＋195cm）・総長 385cm を計る。建物の方向は N—11°—W である。柱穴掘り方はほぼ円形で直径 40cm 前後・深さ 20～30cm、柱痕跡は直径 15cm 程である。掘り方埋土は、黒褐色から灰黄褐色の粘土質シルトからなる。

出土遺物には、縄文土器片2点・土師器片13点、計15点がある。土師器片のうちにはロクロを使用した甕の体部片があり、このことからも、この建物跡は、ロクロ使用土師器を出土する以前の1号住居跡の検出面であるⅤ層より下のⅥ層が掘り込み面とは考えられない。したがって、2号掘立柱建物跡の掘り込み面はⅤ層より上の層であり、その年代については、ロクロ土師器出現以降の年代と考えられる。



層 No.	土色	土質	その他
P1－1	10YR⅔ 黒褐色	粘土質シルト	焼土・砂を含む
2	10YR⅘ 灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を多く含む
3	2.5Y⅗ 暗オリーブ褐色	粘土質シルト	焼土を少量含む
4	2.5Y⅗ 暗オリーブ褐色	粘土質シルト	
5	2.5Y⅗ 暗オリーブ褐色	粘土質シルト	
P2－1	10YR⅔ 黒褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土・砂を少量含む
2	10YR⅘ 灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を多く含む
3	10YR¾ 暗褐色	粘土質シルト	
P3－1	10YR⅔ 黒褐色	粘土質シルト	
2	10YR⅘ 灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を多く含む

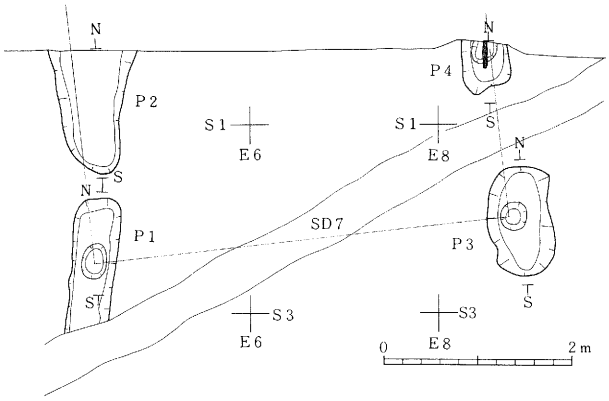
第23図 2号掘立柱建物跡実測図

第6表 SB－2出土遺物集計表

種別			土師器						縄文	
器種			坏（非ロクロ）	甕（非ロクロ）			甕（ロクロ）			
			無段							計
部位			口縁部～体部	口縁部	体部		体部			
外面調整			ヨコナデ	ミガキ		ナデ	不明	ロクロ		
出土地点層位	床面	破片数				2				2
	Pit 1	破片数				3	2		2	7
	Pit 2	破片数	1	1	3			1		6
計			2	10				1	2	15

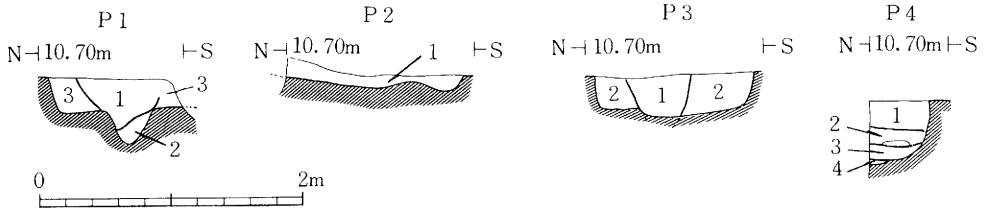
3号掘立柱建物跡

調査区西寄りのⅧ層上面で検出された。北側が調査区外にのびるため南北の間数及び、東西棟か南北棟かは不明である。南列の中央に柱穴は検出されない。東西1間で間尺は440cm を計る。南北は1間以上（180cm）である。建物の方向はN—6°30′—W である。柱穴掘り方は一律ではないが、楕円形から長方形を呈し、長軸115～130cm・短軸45～90cm を計る。柱痕跡は抜き取りによって不明確になっているが、抜き取り穴の下部は直径25～30cm の落ち込みとなっている。柱穴掘り方埋土は褐色の粘土質シルトを主体としている。7号溝に切られている。出土遺物は、P4より木片が1点出土しただけである。



第24図　3号掘立柱建物跡平面図

層 No.	土　色	土　質	そ　の　他
P1—1	10YR5/3　灰黄褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物を少量含む
2	10YR5/1　灰色	粘　土	緑灰色粘土を斑状に含む
3	10YR5/6　褐色	粘土質シルト	暗オリーブ褐色土・暗褐色土・灰色粘土を斑状に含む
P2—1	10YR5/6　褐色	粘土質シルト	暗オリーブ褐色・暗褐色・灰色の粘土をブロック状に含む
P3—1	10YR5/3　灰黄褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物及び灰色粘土を含む
2	10YR5/6　褐色	粘土質シルト	暗オリーブ褐色粘土ブロック及び暗褐色土・砂を含む
P4—1	10YR3/4　暗褐色	シ　ル　ト	
2	2.5YR5/1　黄灰色	粘土質シルト	木片出土
3	7.5YR3/3　黒褐色	粘土質シルト	
4	7.5YR3/3　黒褐色	砂質シルト	



第25図　3号掘立柱建物跡柱穴土層断面図

(3) 土　壙

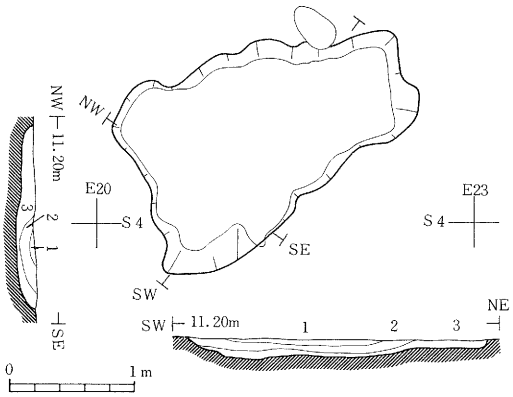
1号土壙

長軸230cm・短軸155cm・深さ17cm を計る不整形の土壙で、Ⅴ層上面で検出された。底面には緩い起伏があり、壁面は大小の凹凸がある。堆積土は3層からなるが、このうち第2層には灰白色の火山灰からなる。

出土遺物には土師器と須恵器の細片が65点と、土錘が1点ある。土師器片にはロクロを使用した土師器片が含まれている。

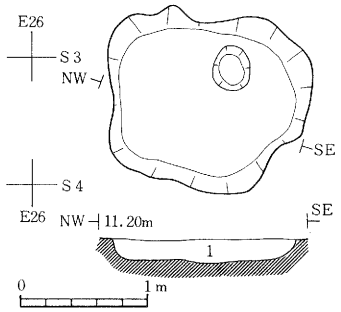
2号土壙

長軸155cm・短軸140cm・深さ20cm を計る不定形の土壙で、Ⅴ層上面で検出された。断面形



層 No.	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR 3/4 褐色	シ　ル　ト	マンガン粒・灰白色火山灰を少量含む
2	7.5YR 8/1 灰白色	火　山　灰	
3	10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト	

◀ 第26図　1号土壙実測図



層 No.	土　色	土 質	そ　の　他
1	10YR 3/3 暗褐色	シルト	酸化鉄・灰赤色粘土のブロックを含む

▲ 第27図　2号土壙実測図

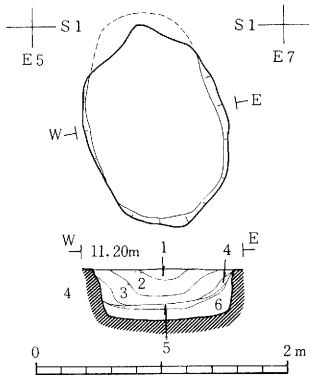
第7表　1号土壙出土遺物集計表

種　別		土　師　器									須　恵　器					土製品	
器　種		坏(非ロクロ)		坏（ロクロ）		甕（非ロクロ）				甕(ロクロ)	坏		甕			土錘	
		無　段			底部切離し・調整							底部切離し・調整					計
部　位		口縁部～体部		口縁部～体部	ヘラ切り	体　部				体　部	口縁部～体部	ヘラ切り	口縁部	体　部			
外面調整		ヨコナデ	ミガキ	ロクロ	無	ハケメ	ケズリ	ナデ	不明	ロクロ	ロクロ	回転ヘラケズリ	無　文	ロクロ	タタキメ		
層位 1	実測数															1	1
層位 2	破片数	3	4	1	1	6	9	6	14	8	5	1	1	2	4		65
計		7		2		35				8	6		7			1	66

第8表　2号土壙出土遺物集計表

種　別	土　師　器					須　恵　器		縄文	
器　種	坏（非ロクロ）		坏(ロクロ)	甕(非ロクロ)		坏	甕		
	無　段								計
部　位	口縁部～体部		ヘラ切り	体　部		口縁部～体部	口縁部		
外面調整	ヨコナデ	ミガキ	不　明	ケズリ	ナデ	ロクロ	不　明		
	6	1	1	1	3	1	1	1	15
計	7		1	4		1	1	1	15

層 No.	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR 3/4 暗褐色	シ　ル　ト	炭化物・焼土を少量含む
2	10YR 3/4 暗褐色	シ　ル　ト	炭化物・焼土・褐色土を含む
3	10YR 3/4 暗褐色	シ　ル　ト	焼土を含む
4	10YR 3/4 暗褐色	シ　ル　ト	
5	黒　色	炭　化　物	炭の純層
6	2.5Y 4/1 黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒を含む



第28図　3号土壙実測図

は、浅いU字状を呈す。底面はほぼ平坦で壁は緩やかに立つ。底面の北東寄りには直径30cm・深さ10cmのピットがある。堆積土は1層で、暗褐色のシルト層からなる。

出土遺物には、縄文土器・土師器・須恵器の破片が合計15点ある。土師器片のなかにはロクロを使用した坏の破片が含まれている。

3号土壙

長軸175cm・短軸110cm・深さ40cmを計る楕円形の土壙で、V層上面はほぼ平坦で、壁面は

直立に近く、北壁はオーバーハングしている。堆積土は6層に細分されるが、このうち第5層は炭化物層である。堆積土中には焼土を含むが、壁面・底面とも焼けた形跡はない。

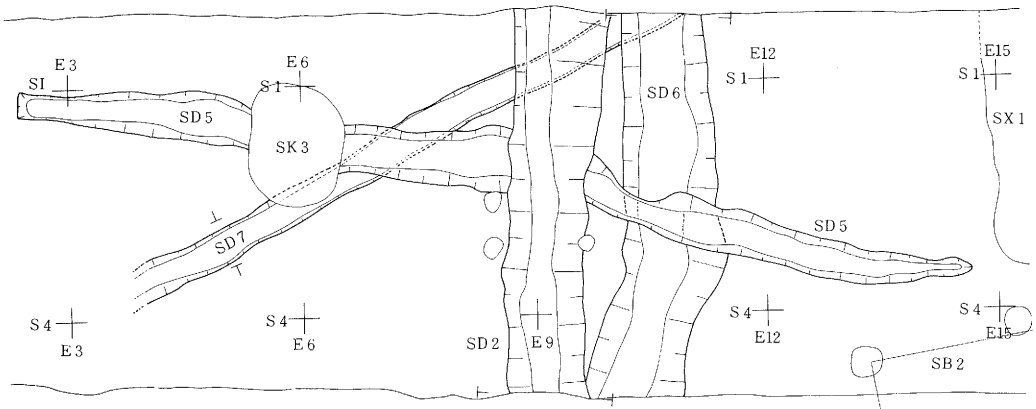
出土遺物はない。

(4) 溝　跡

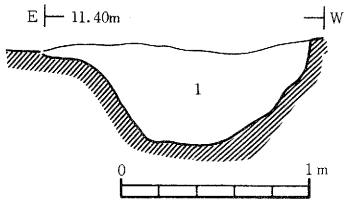
1号溝跡（欠番）

2号溝跡

Ⅴ層上面で検出された。調査区中央西寄りを南北に横断する。上面幅は南側で110cm、北側で120cm、底面幅は35cm前後、深さ50cmを計る。断面形は舟底形から逆台形を呈す。底面に傾斜は認められない。方向はN—1°—Wを指す。堆積土は暗灰黄色砂質シルト1層からなる。5・6・7号溝を切っている。出土遺物は、縄文土器の細片が2点あるだけである。



第29図　2・5・6・7号溝跡平面図



第30図　2号溝跡断面図

層No.	土　色	土　質	そ　の　他
1	2.5Y⅘ 暗灰黄色	粘土質シルト	灰色粘土及び焼土を含む

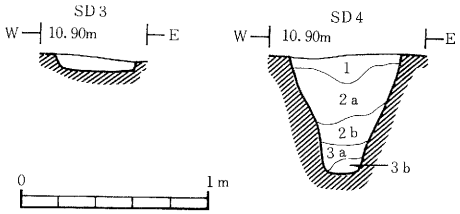
第9表　SD－2出土遺物集計表

種　　別	縄文	
器　　種		
		計
部　　位		
外面調整		
破 片 数	2	2
計	2	2

3号溝跡

Ⅶ層上面で検出された。調査区の東部に位置し、調査区を斜めに横断する。南端は4号溝によって切られている。幅は北側ほど広く上面で50cm、底面で40cmを計るが、南側は上面幅20cm、底面幅10cmとなっている。断面形は浅い逆台形を呈し、深さは北部で15cm、南部で5cmを計るが底面に傾斜は認められない。溝の方向はN—30°—Wを指す。堆積土は暗褐色砂質シルト1層からなる。

出土遺物には、縄文土器と土師器の破片が計9点ある。土師器片にはロクロを使用した土師器片が含まれている。



第31図　3・4号溝跡断面図

No.	No	上　色	上　質	そ の 他
3号—1		10YR3/4 暗褐色	破質シルト	黄灰色粘土ブロック及び砂を含む
4号—1		25Y4/4 オリーブ—褐色	砂質シルト	褐灰色土を含む。
	2a	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	褐灰色粘土を含む
	2b	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	
	3b	5Y5/2 灰オリーフ—色	粗　砂	酸化鉄を多く含む
	3b	5Y5/2 灰オリーフ—色	粗　砂	

第10表　SD—3出土遺物集計表

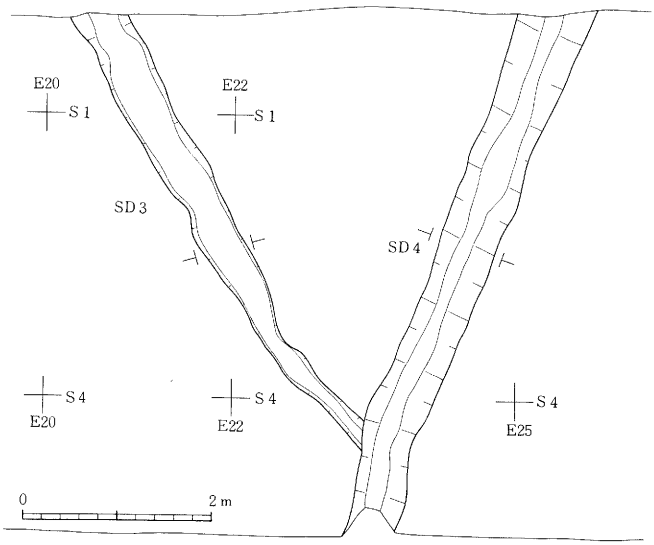
種　別			土　師　器				縄文	
器　種			甕(非ロクロ)		甕（ロクロ）			
								計
部　位			体 部	底 部	口縁部	体 部		
外面調整			不 明	不 明	ロクロ	ロクロ		
層	1	破片数			1	1		7
	2	破片数		1				1
位	3	破片数					1	1
			6		2		1	9

第11表　SD—4出土遺物集計表

種　別	土　師　器		縄文	
器　種	坏(非ロクロ)	甕(非ロクロ)		
	無　段			計
部　位	口縁部—体部	体　部		
外面調整	ヨコナデ	ケ ズ リ		
破 片 数	1	1	2	4
	1	1	2	4

4号溝跡

Ⅶ層上面で3号溝の東側に検出された。上面幅60cm，底面幅15～30cm，深さ60cmを計る。断面形は整った逆台形を呈す。底面は北側が数cm低くなっている。溝の方向はN—29°—Eを指す。堆積土は5層に細分されるが，上部3層は砂質シルト，下部は粗砂となっている。3号溝を切っている。



第32図　3・4号溝跡平面図 ▶

5号溝跡

Ⅵ層上面で検出された。調査区の西半をやや蛇行しながら縦断する。東西両端は調査区内で浅くなり消えている。中央部では上面幅65cm，底面幅40cm，深さ10cmを計る。底面は西側が数cm低くなっている。溝の方向はN—82°—Wを指す。堆積土は暗褐色粘土質シルト1層からなる。2号溝に切られ，6，7号溝を切っている。

第12表　SD—5出土遺物集計表

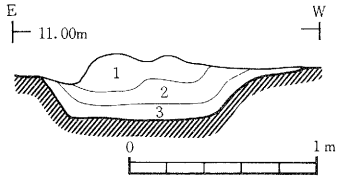
種　別	土　器		須恵器	縄文	
器　種	坏(非ロクロ)	甕(非ロクロ)	甕		
					計
部　位	口縁部—体部	体　部	体　部		
外面調整	ミ ガ キ	ケズリ 不明	タタキ目		
破 片 数	1	1　3	1	2	8
	1	4	1	2	8

出土遺物には，縄文土器，土師器，須恵器の破片が計8点ある。土師器片にロクロの使用さ

れているものはない。

6号溝跡

Ⅵ層上面で2号溝の西側に検出された。調査区を南北に横断する。上面幅120cm，底面幅60cm，深さ30cmを計る。断面形は逆台形を呈す。底面はほぼ平坦となっている。溝の方向はN－1°－Eを指す。堆積土は3層に分けられ，黒褐色から灰黄褐色の粘土質シルトからなる。2，5号溝に切られ，7号溝を切っている。出土遺物はない。

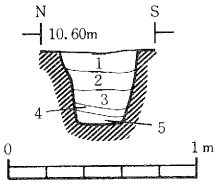


層No.	上色	上質	その他
1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土を斑状に含む
2	1.5Y5/2 暗灰黄色	粘土質シルト	炭化物・焼土を含む
3	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	砂・炭化物を少量含む

第33図 6号溝跡断面図

7号溝跡

Ⅷ層上面で検出された。調査区西部を北東から南西に斜めに横断する。北東端は，2，6号溝によって切られている。上面幅45cm，底面幅20～30cm，深さ40cmを計る。断面形は整った逆台形を呈する。底面は北東側が数cm低くなっている。堆積土は5層に細分され，最下層は4号溝と同様に砂層となっている。方向はN－60°－Eを指す。5号溝，3号土壙，3号掘立柱建物跡に切られる。出土遺物はない。



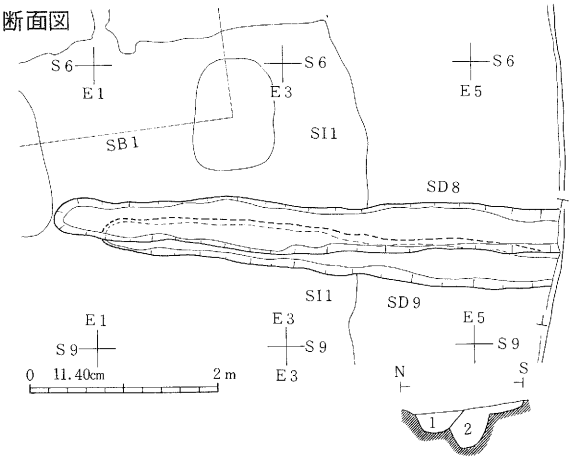
層No.	上色	上質	その他
1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	灰色粘土黄灰色土を含む
2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	灰色粘土を斑状に含む
3	25Y7/2 灰黄色	細砂	
4	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
5	25Y5/1 灰色	細砂	黒褐色土を斑状に含む

第34図 7号溝跡・断面図

8号溝跡

拡張部の5層上面で検出された。西端は拡張部西壁付近で立ち上がる。上面幅55cm，底面幅40cm，深さ10cmを計る。断面形はU字形を呈す。底面は東側か数cm低くなっている。方向はN－88°－Wを指す。9号溝，1号住居跡を切っている。

出土遺物には土師器片と須恵器片が各1点ある。土師器片はロクロによる調整痕が認められる。



層No.	上色	上質	その他
1	10YR3/4 褐色	粘土質シルト	炭・赤褐色焼土を含む　8号溝埋土
2	10YR3/4 褐色	粘土質シルト	黄灰色粘土を含む　9号溝埋土

第35図　8・9号溝跡実測図

第13表　SD－8出土遺物集計表

種別	土師器	須恵器	
器種	甕(ロクロ)	坏	
			計
部位	体部	口縁部一体部	
外面調整	ロクロ	ロクロ	
破片数	1	1	2
	1	1	2

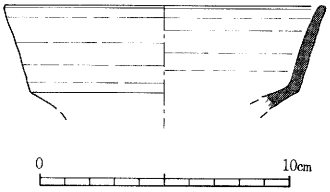
第14表　SD－9出土遺物集計表

種別	土師器							須恵器					縄文	
器種	坏(非ロクロ)	甕(非ロクロ)				甕(ロクロ)		坏	高台付坏	甕				
部位	口縁部一体部	体部			底部	体部		口縁部一体部		口縁部	体部	底部		
外面調整	ヨコナデ	ハケメ	ケズリ	不明	不明	ロクロ	ケズリ			無文	ロクロ			
破片数	7	2	7	7	1	1	1	1		1	2	1	1	32
実測数									1					1
	7	17				2		1	1	4			1	33

9号溝跡

拡張部のⅤ層上面で，8号溝の南側に同溝に切られて検出された。西端も8号溝の切れる所のやや手前で8号溝と同様に立ち上がる。上面幅45cm，底面幅30cm，深さ10cmを計る。断面形はU字形を呈す。底面に傾きは認められない。方向はN－84°－Wを指す。1号住居跡を切る。

出土遺物には，縄文土器，土師器，須恵器片，計33点がある。このうち実測できたのは高台付坏と考えられる須恵器片が1点だけである。(第36図) 土師器片にはロクロ調整痕のあるものが含まれている。



第36図　Ⅱ区9号溝跡出土土器

遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	登録No.	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径				
1	須恵器	高台付坏	1層	ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ		(4.2)	12.7		坏部1/4		E－33	

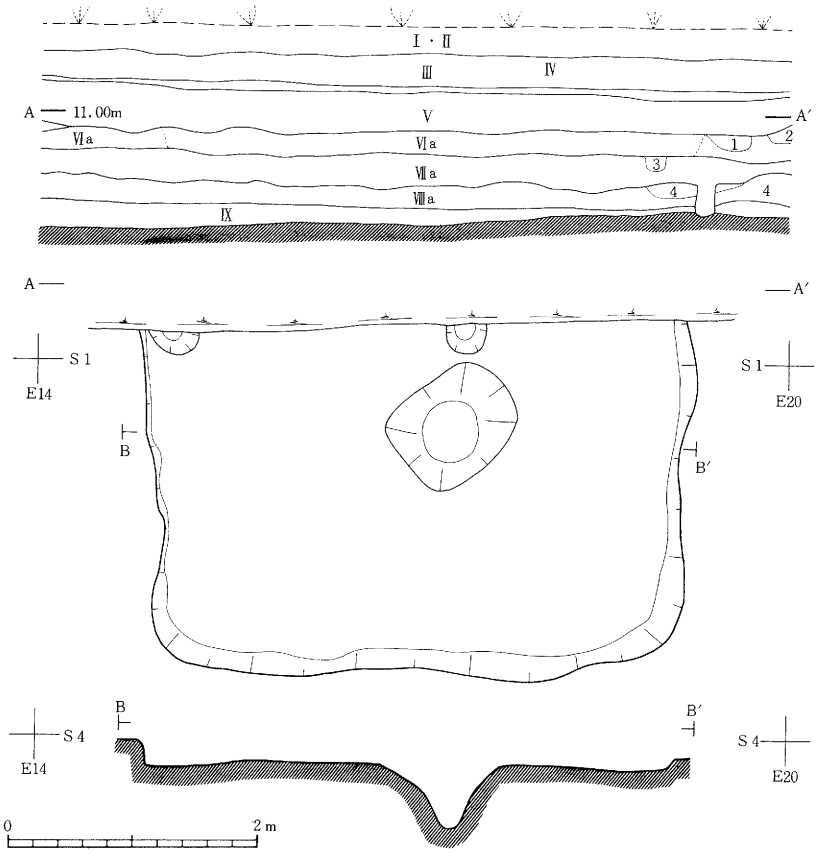
(5) 性格不明遺構

1号性格不明遺構

Ⅱ区の中央部の6層上面で検出された。北辺及び東西両辺の北端部は調査区外へのびる。平面形は方形を呈し，竪穴住居跡に類似したプランとなっているが，カマド，柱穴，及び床面の汚れ等住居跡と認定できるものがない竪穴状の遺構である。底面はほぼ平坦で，壁面は西辺が直立するほかは，南側と西側は緩く立ち上がる。確認面からの深さは10～20cmを計る。底面の中央付近には直径約90cmの逆円錐形の土壙がある。その他底面には2個のピットが検出されている。

第15表　SX－1出上遺物集計表

種別			土師器											須恵器								縄文	
器種			坏(非ロクロ)			甕(非ロクロ)								坏		台付坏	蓋	甕			異形土器		
			無段											底部切離し									計
部位			口縁部～体部			口縁部	体部				底部			ヘラ切り				口縁部	体部				
外面調整			ヨコナデ	ミガキ	不明		ハケメ	ケズリ	ナデ	不明	ケズリ	ナデ	木葉痕	ロクロ	回転ヘラケズリ			無文	ロクロ	タタキ目			
層	1	破片数	2	2	10	20	33	63	65		1	1	1	4	1	1	1	1	2	10		9	227
		実測数		1									1		1		2			1	1		7
	2	破片数	1	1	1					14													17
位	3	破片数	1																				1
			19			199								6		1	3	14			1	9	252

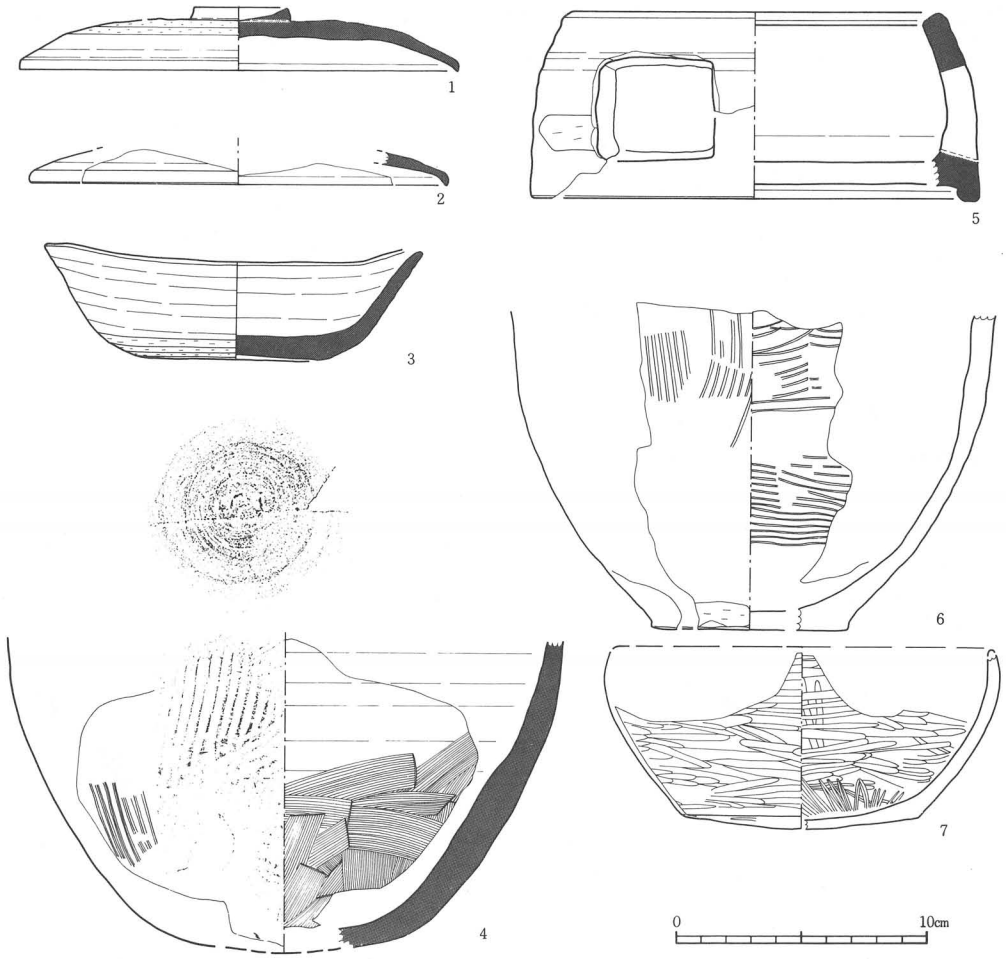


第37図

1号性格不明遺構実測図

層No.	上　　色	上　質	そ　の　他
Ⅰ・Ⅱ			盛上及び表土
Ⅲ	2.5ＹＲ5/1黄灰色	シルト	炭化物を多く含む(水田床土)
Ⅳ	7.5ＹＲ5/4 褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む遺物を含む
Ⅴ	10ＹＲ5/2　灰黄褐色	シルト	炭化物・焼土を含む遺物を多く含む
Ⅵa	10ＹＲ3/4　暗褐色	粘土質シルト	灰色の粘土を帯状に含む遺物を含む
Ⅶa	10ＹＲ4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰色の粘土を含む遺物を含む
Ⅷa	25Ｙ3/1　黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む遺物は出土していない
Ⅸ	褐色	粘土質シルト	遺物は出土していない
1	10ＹＲ3/2　黒褐色	シルト	灰色粘土を含む
2	10ＹＲ3/2　黒褐色	シルト	白色細砂を含む
3	10ＹＲ3/3　暗褐色	シルト	
4	10ＹＲ4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	黒褐色土を斑状に含む

出土遺物は1～3層中に縄文土器，土師器，須恵器の破片が252点出土した。実測できたものには，須恵器蓋2点，坏1点，甕1点，異形土器1点，土師器坏1点，甕1点の計7点がある。(第38図) No.1の蓋は断面が三角形のリング状のつまみを有するもので，端部は短かく下方に折れる。外面の天井部は回転ヘラケズリ調整されている。No.3の坏は口径に比して底径が大きく，底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整され，底部との境は不明瞭となっている。No.4は小形の甕で，外面は平行叩キ後，上部ロクロ調整され，内面はロクロ調整後下



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	登録No.	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径				
1	須恵器	蓋	1層		天井	つまみ	ロクロ	天井	つまみ	2.5	17.2	つまみ須	½		E－35	35－9
2	〃	〃	〃		天井 ロクロ			天井 ロクロ		4.4	16.6		⅛		E－36	
3	〃	坏	〃	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ 回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	4.6	14.9	7.6	完形		E－34	35－1
4	〃	甕	〃		平行タタキ ロクロ	不明		上端ロクロ 下端ヘラナデ	不明	(12.2)	体部径 22		体部下端 ½		$\overline{E}$	
5	〃	異形	〃		ロクロナデ 一部ケズリ	不明		ロクロナデ	不明	7.4	14.6	17.6			E－38	35－11
6	土師器	甕	〃		ハケメ	ハケメ ケズリ		ハケメ	ヘラナデ	(12.2)		7.4	⅛		C－27	
7	〃	坏	〃		ヘラミガキ	ヘラミガキ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.0		9.4	⅓		C－26	

第38図　1号性格不明遺構出土土器

部がヘラナデ調整されている。No.5は高さ7.4cm，直径17.6cmを計る口縁の内傾する土器で，体部には縦約4cm，横約5cmの方形の透孔を有する土器である。口縁端部は平らで，やや内傾している。底部には体部からそのままのびた台が付く。底部はほとんど欠損しているため，これがあったのか，孔が穿たれていたかは不明である。No.6は甕の体部下半の破片で，外面はハケ

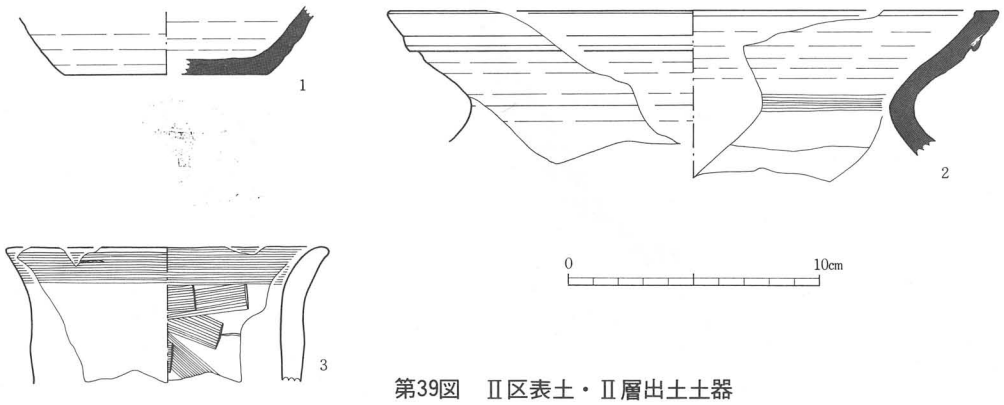
メ調整，内面はハケメ状工具によるヘラナデ調整されている。No.7は丸底風平底のロクロを使用しない坏で，底部から内弯ぎみに立ち上がる。内外面ともヘラミガキ調整される。

2．遺構以外のⅡ区出土土器

本調査区においては，表土からⅦ層に至るまで，多くの遺物が出土している。縄文土器片を除く土師器，須恵器片で実測できたのは以下の通りである。

(1)表土出土土器

須恵器坏1点，土師器甕1点が出土している。須恵器坏は回転ヘラ切り後ナデ状の調整がされる。底径が比較的小さな破片である。底面に左半部を欠損するが「冨」と読めるヘラ抽き文字がある。(第39図No.1)，土師器甕は口縁部ヨコナデ，体部外面ナデ，内面ヘラナデにより調整され，口縁部は軽く外反する。(第39図No.3)



第39図　Ⅱ区表土・Ⅱ層出土土器

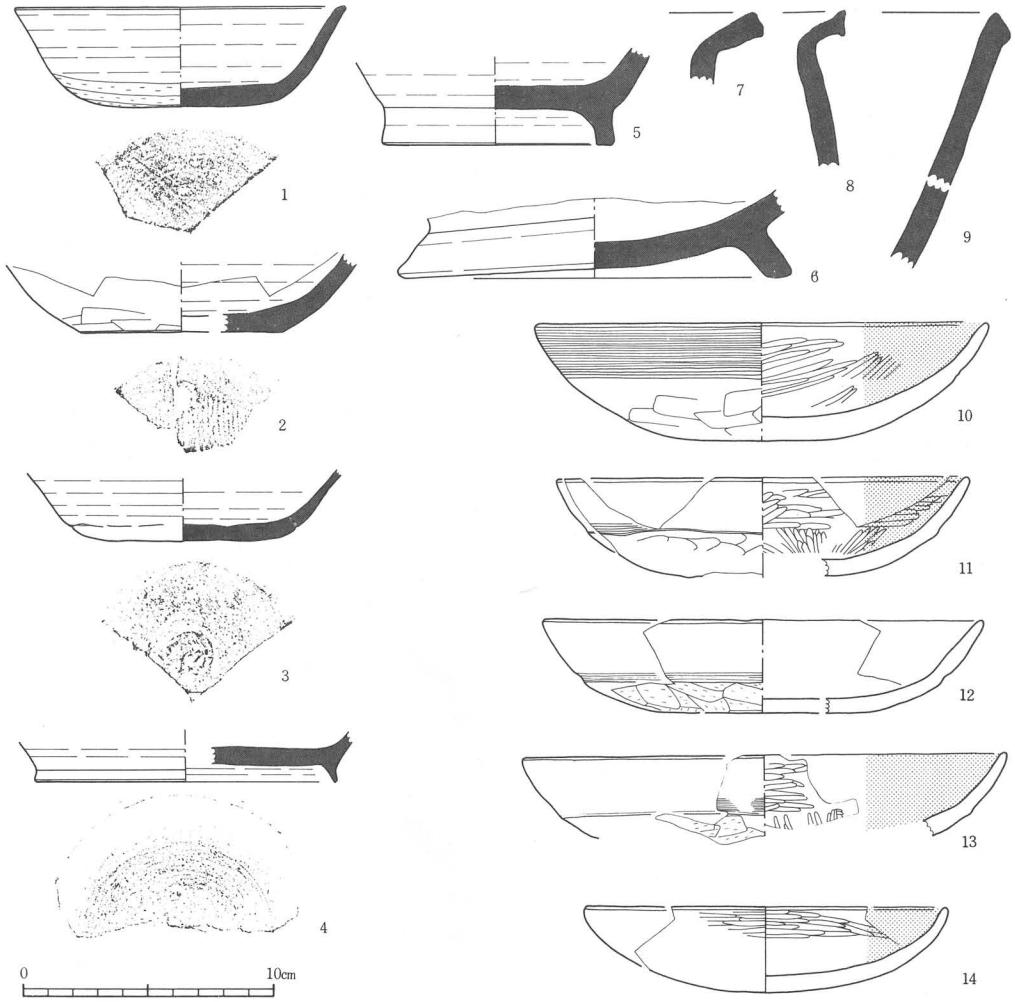
遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	登録No.	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径				
1	須恵器	坏	表採		ロクロ	回転ヘラ切 不明		ロクロ	(2.3)	(2.3)		8.0	¼		E－3	36－3
2	〃	甕	Ⅱ区Ⅱ層	ロクロ	ロクロ		ロクロ	くびれ部 ヨコナデ		(6.7)	22.6		口縁 ⅙		E－4	35－6
3	土師器	〃	表採	ヨコナデ	ナデ		ヨコナデ	ヘラナデ		(5.4)	12.8		口縁¼		C－5	

(2)　Ⅱ層出土土器

須恵器甕片1点がある。肩部から口縁にかけての破片で，口縁部は一度外反した後内弯ぎみに立ち上がり，口唇部は平坦になっている。外面の口唇直下には山形の突帯が巡っている。

(3)　Ⅴ層出土土器

須恵器坏4点，甕類5点，土師器坏5点が実測できた。(第40図)



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	登録No.	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径				
1	須恵器	坏	5層	ロクロ	上部ロクロ 回転ヘラケズリ	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	ロクロ	4.0	13.1	7.0	¼		E－5	35－2
2	〃	〃	〃	ロクロ	上部ロクロ ヘラケズリ	静止糸切 手持ヘラ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(3.1)		(8.0)	¼		E－7	
3	〃	〃	〃	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(2.6)	6.0	6.0	底部 ¼		E－6	
4	〃	高台付坏	〃		ロクロ	静止糸 回転ヘラ		ロクロ	ロクロ	4.91		11.0	⅓		E－8	
5	〃	高付甕	〃		ロクロ	回転ヘラ切 回転ヘラケ		ロクロ	ロクロ	(4.5)		7.0	底部 完形		E－13	
6	〃	〃	〃		ロクロ	ロクロ 平行タタキ		ナデ		(3.2)		13.4	台のみ 完形		E－12	
7	〃	甕	〃	ロクロ			ロクロ						口縁 1/16		E－9	
8	〃	〃	〃	〃			〃								E－10	
9	〃	〃	〃	〃			〃								E－11	
10	土師器	坏	〃	ヨコナデ	ケズリ	ケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.7	17.8	15.6	½		C－6	37－1
11	〃	〃	〃	ヨコナデ	ナデケズリ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(4.0)	16.2		¼		C－7	
12	〃	〃	〃	ヨコナデ	ケズリ	ケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(3.7)	17.2	13.8	⅙		C－8	
13	〃	〃	〃	ヨコナデ	ケズリ	ケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(3.3)	19.7				C－9	
14	〃	〃	〃	ヘラミガキ	ケズリ	ケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	3.4	14.2	11.8	⅗		C－10	37－3

第40図　Ⅱ区Ⅴ層出土土器

No.1は口径に比して底径の大きな坏で，底面から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整されている。底部と体部の境は不明瞭である。

No.2は，静止糸切り後底部縁辺から体部下端にかけて手持ちヘラケズリ調整されている。

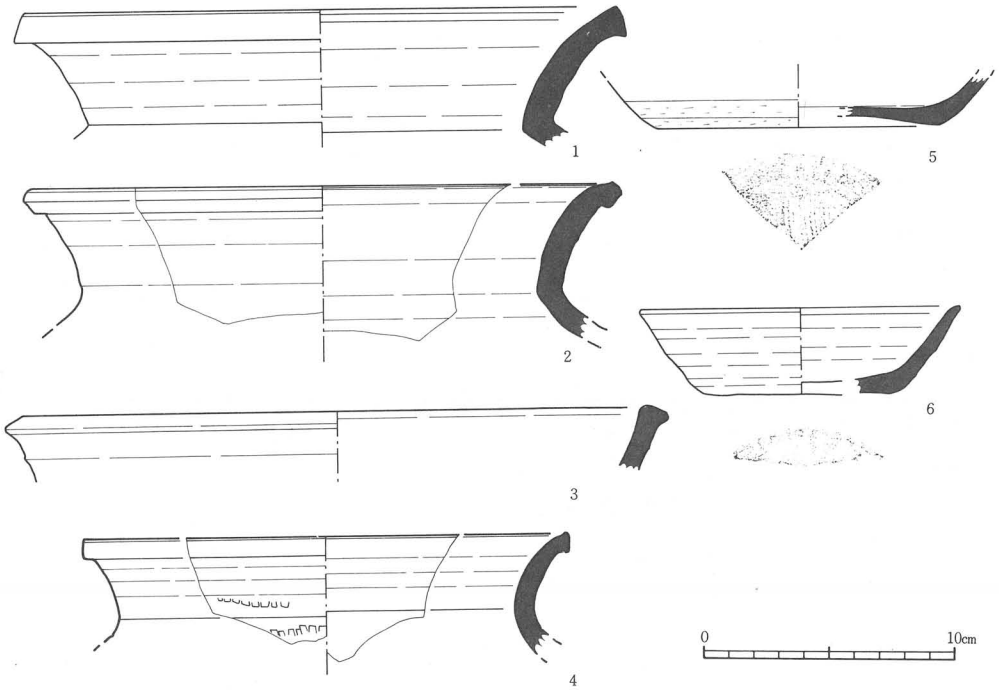
No.3は，回転ヘラ切り無調整の底部片である。底部と体部の境は丸くなっている。

No.4は，高台付坏の底部片で，底部は静止糸切り後回転ヘラケズリ調整されている。

No.5，6は，甕または壺の高台付底部片で，No.5は内外ともロクロ調整され，No.6は平行叩き痕の底部にリング状の台を付けている。

No.7，8は，甕または鉢の口縁部片の断面で，内外面ともロクロ調整される。

No.9～14の土師器坏はいずれもロクロを使用しないもので，No.9～13は丸底で，底部と口縁部の境にわずかな段を有し，口縁が内弯する。調整は外面口縁部ヨコナデ，底部ヘラケズリ，内面ヘラミガキされる。No.14は丸底の底部から内弯ぎみに立つもので，内外面ともヘラミガキ調整されている。No.12は再酸化されて内面の黒色処理が失われている。



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	登録No.	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径				
1	須恵器	甕	5～6層	ロクロ			ロクロ			(5.1)	23.8		⅙		E－16	
2	〃	〃	〃	ロクロ			ロクロ			(5.4)	23.2		⅛		E－17	
3	〃	〃	〃	ロクロ			ロクロ			(2.6)	26.4		⅛		E－23	
4	〃	〃	〃	ロクロ ヤキメ			ロクロ			(4.2)	19.2		⅛		E－18	
5	〃	坏	〃		ロクロ	回転糸切 手持ヘラ		ロクロ	ロクロ	(1.9)		11.2	¼		E－19	
6	〃	〃	〃	ロクロ	ロクロ	不明	ロクロ	ロクロ	ロクロ	3.5	12.6	(7.0)	¼		E－15	

第41図　Ⅱ区Ⅴ～Ⅵ層出土土器

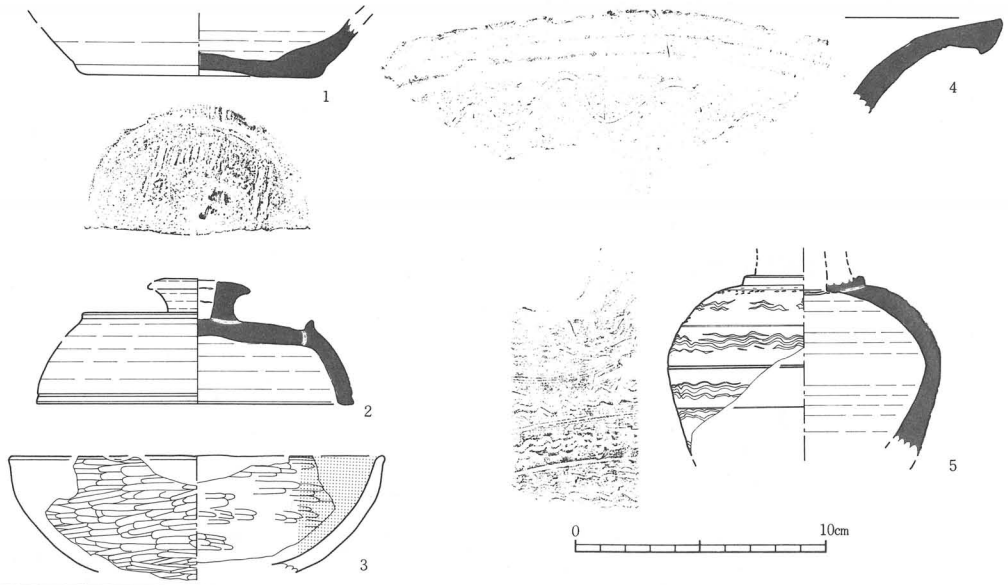
(4) Ⅴ～Ⅵ層出土土器

これは，取り上げ時に混乱があり，Ⅴ層中のものかⅥ層中のものか不明のもので，甕の口縁部片４点，坏の破片２点が実測できた。

No.１～４の甕はいずれもロクロ調整されるもので，端部はわずかに肥厚し，それぞれ個性的な形態となっている。

No.５は，静止糸切り後底部周縁及び体部下端が回転ヘラケズリ調整される。

No.６は，底部の切り離し技法は不明で，ナデ状の調整が行なわれている破片である。



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	登録No.	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径				
1	須恵器	坏	6層		ロクロ	回転ヘラ切		ロクロ	ロクロ	4.8		8.8	½		E－20	
2	〃	蓋	〃	ロクロ	天井	つまみ		天井	つまみ	5.0	12.6	つまみ径	⅓		E－21	35－8
					ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ			4.1				
3	土師器	坏	〃	ヘラミガキ	ヘラミガキ		ヘラミガキ	ヘラミガキ		(4.6)	4.6		⅓		C－11	
4	須恵器	甕	〃	ロクロ 波状文			ロクロ								E－22	35－7
5	〃	壺	〃	頸部	波状文		頸部	ロクロ		(7.2)	頸部	最大径	⅓		E－26	35－10
				刺突文	沈線		ロクロ				5.0	10.8				

第42図　Ⅱ区Ⅵ層出土土器

(5) Ⅵ層出土土器

Ⅵ層中からの出土品では，須恵器の坏，蓋，甕，壺が各１点と土師器の坏１点が実測できた。

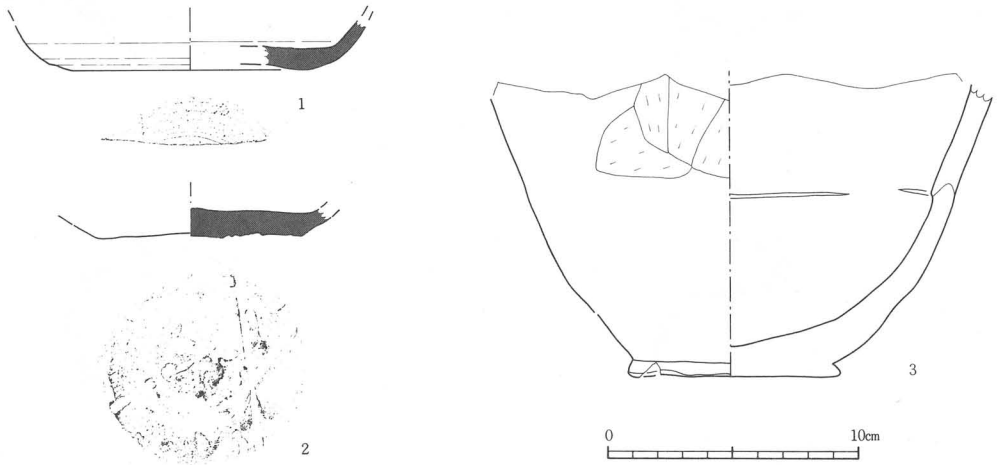
No.１は，回転糸切り無調整の坏底部片である。底部と体部の境は明瞭となっている。

No.２は，口径に比して深い造りの蓋で，わずかに傾斜する天井部には内弯ぎみに下方へ折れる幅の広い口縁がつく。天井の縁辺部には山形の断面形を呈する突帯が巡ぐり，つまみはリング状の高いもので，上端が外方に帳り出している。

No.3は，丸底の坏で底部から口縁に至るまで内弯して立ち，口縁端部がわずかに外反する。調整は内外面ともヘラミガキによる。

No.4は，甕の口縁部の破片で，端部は上下に肥厚する。口唇直下には波長の長い波状沈線文が2段に施文されている。

No.5は小形の壺で，体部には1.6～1.7cm間隔に3条の沈線が巡り，その沈線間及び上下に波状沈線文が抽かれ，沈線の下部には2段に波状沈線が配され，波状文は計5段に巡っている。また，最上部の波状沈線文の上・肩部には1段の櫛抽き連点文が施されている。体部と頸部の境には低い隆帯が一条巡っている。



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	分類	登録No.	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径				
1	須恵器	坏	1層		ロクロ	回転糸切		ロクロ	ロクロ	(1.8)		9.4	¼		E－24	
2	〃	〃	〃		ロクロ	不明 回転ヘラケ		ロクロ	ロクロ	(10.9)		7.5	底部完形		E－25	
3	土師器	甕	〃		ヘラケズリ	不明		下端ヘラナデ		(11.1)		7.9	⅓		C－12	37－8

第43図　Ⅱ区Ⅶ層出土土器

(6)　Ⅶ層出土土器

須恵器坏2点，土師器甕1点が実測できた。

No.1は，静止糸切りと考えられる坏の底部片で，切り離し後は調整を受けていない。

No.2は，回転ヘラ切り無調整の坏底部片で，棒状のものの圧痕が付いている。

No.3は，甕の体部下半の破片で，外面にはヘラケズリ調整，内面にはヘラナデ調整が認められる。底部下端は外側に張り出している。

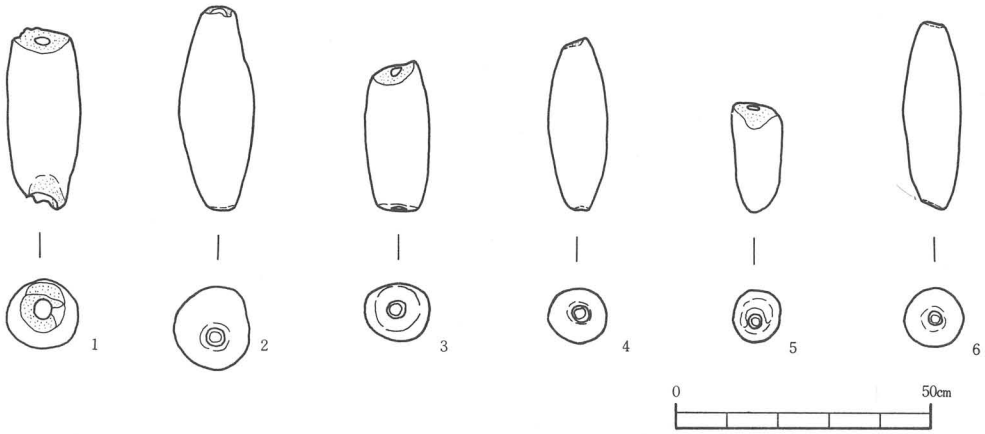
基本層中から出土した遺物のうち実測可能な破片には以下のようなものがある。ただし，Ⅴ層上面が1号住居跡―ロクロ使用以前の土師器出土（国分寺下層式）―の確認面であるにもか

かわらず、Ⅴ～Ⅶ層中からも調査中に検出できなかった攪乱壙またはピットへの混入品と考えられるロクロ土師器（坏・甕片）が出土しているので、図示した遺物が必ずしも基本層の年代を反映せず、上層からの混入遺物も含まれている可能性がある。

3．その他のⅡ区出土遺物

(1) 土　錘

土錘は第44図に示した６点のうち５点がⅡ区から出土している。遺構から出土したのはⅠ区１号土壙１層からNo.６だけで、他はⅡ区Ⅳ～Ⅵ層中より出土している。形態は中央がやや脹らむ長さ 3.4 ～ 4 cm、真径９～16.5cmの円径を呈するもので、大きさとしては小形のものである。表面に特に調整痕はなく掌で粘土をまるめ、中軸に片方より孔を穿って作製したようである。



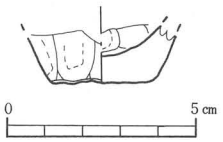
(mm・g)

No.	出土遺構層位	登録No.	長　さ	直　　径	孔　径	重　量	色　　調	残存状況
1	Ⅳ層	P 1	(36)	13.5×14	3.5	6.8	浅黄橙色	両端一部欠損
2	Ⅳ～Ⅴ層	P 2	40	14.5×16.5	2～3	7.0	にぶい黄橙色	
3	Ⅴ～Ⅵ層	P 4	(30)	11.5×13	2.5～3.5	4.8	にぶい黄橙色	一端一部欠損
4	Ⅵ層	P 5	34	11　×11.5	2.5～3	4.2	灰白～明褐色	
5	Ⅵ層	P 6	(22)	9××10	2～2.5	1.8	にぶい黄橙色	約１/３欠損
6	Ⅰ区ＳＫＨ	P 7	37	11.5×12	2～2.5	4.1	にぶい黄橙色	

第44図　土錘実測図

(2) 小形手捏ね土器

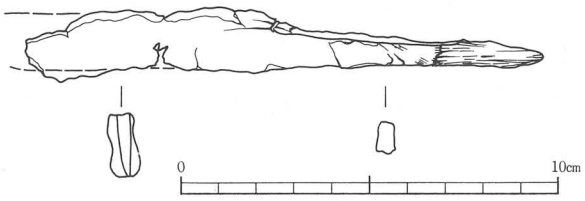
Ⅴ層中より１点だけ出土した。口縁部は欠損している。底部は 2.5 cmを計る。内外面とも指で押えた痕跡が認められる。



第45図　小形手捏ね土器

(3) 刀　子

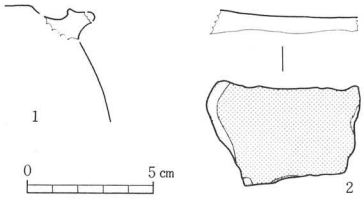
調査区両端角近くのＳ１とＥ３の交点下の６層中で検出された。銹化が進み鋒は欠損している。残存長13.7㎝、刀幅 1.7㎝、背幅 0.6㎝、茎長7.1㎝を計る。平背で、関には背側にわずかな段があるが、刀側には段差が認められない。茎の端部３㎝には酸化鉄が吸着した木質が残っている。



第46図　刀　子

(4) 陶　硯

Ⅱ層中とⅤ層中より各１点の破片が出土している。第47図No.１は円面硯の周縁部と考えられる小片で、端部の上面にはやや内側した小突帯が巡っている。No.２は硯面の破片で全面が平滑になっている。



1. Ⅲ層出土　2. Ⅴ層出土（Ⅱ区）

第47図　陶　硯

この他縄文土器片、石器も出土しているが、これについては後述する。

Ⅶ．ま　と　め

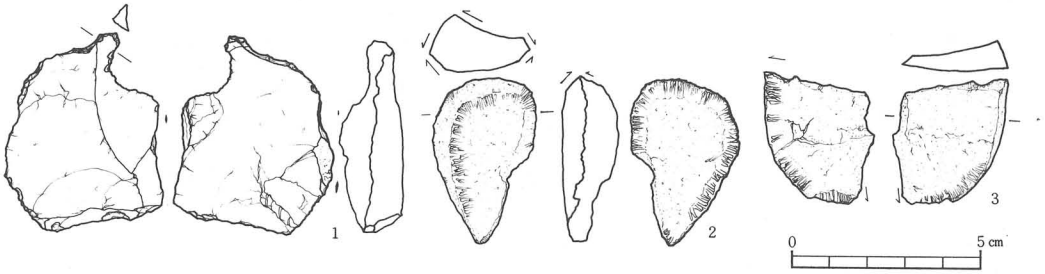
1．出土遺物の総括

Ⅰ区・Ⅱ区の調査において出土した遺物には、石器・縄文土器・須恵器・土師器・土錘・刀子・陶硯・中世陶器・青磁がある。これらの出土遺物については、それぞれ以下のように考察される。

(1) 石　器

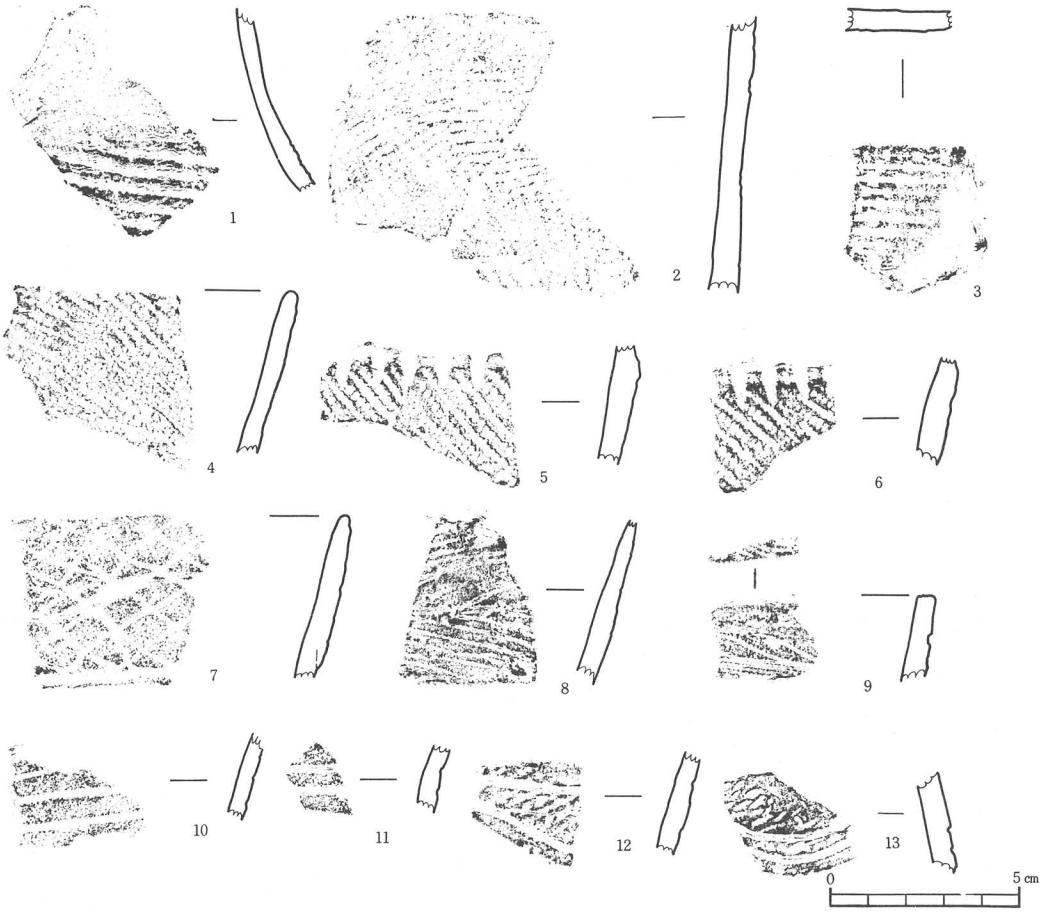
Ⅰ区からスクレイパー１点、Ⅱ区Ⅴ層から、スクレイパー、二次加工がある石器、石核が各１点、Ⅴ～Ⅵ層から石錐１点、ＳＤ－１埋土から不明石器が２点、合計７点出土した。

石材は、頁岩、凝灰岩、メノウ等である。



番号	地区遺構	層位	名称	石材	備考	登録No.	写真図版
1	Ⅱ区	5～6	石錐	頁岩		K－5	39－6
2	Ⅱ区、SD1	埋土	不明	凝灰岩	鋭利な刃物をといだ	K－6	39－5
3	〃	〃	〃	〃	ような使用痕がある	K－7	39－4

第48図　石器



番号	区	層位	文様	登録番号	4	Ⅱ	表米採	縄文(単節)	7	8	Ⅱ	5～6	撚糸(単)	9	11	Ⅱ	5	無文＋沈線	11
1	Ⅰ	5	撚糸(単節)	1	5	Ⅱ	7	〃	6	9	Ⅱ	6	〃	8	12	Ⅱ	5	不明＋沈線	12
2	Ⅱ	7	羽状縄文(単節＋無節)	2	6	Ⅱ	5	〃	3	10	Ⅱ	5	無文＋沈線	10	13	Ⅱ	5	〃	13
3	Ⅱ	SD－4 埋土	細代	14	7	Ⅰ	6	撚糸(細目)	4										

第49図　縄文土器拓影

(2) 縄文土器

基本層位、遺構埋土から出土しているが、基本層位に限定して述べる。(第16表)

Ⅰ区はⅤ層から16点、Ⅱ区はⅤ～Ⅶ層から 152点、合計 168点出土した。磨滅が著しく、縄文か撚糸か判別しがたいものが96点ある。地文は無節縄文・単節縄文・羽状縄文・単節撚糸文・網目状撚糸文・無文があるが、単節縄文が35点と全体の20.8%を占める。特徴的なものは、拓影を作成したが (第49図)、図版番号 7・8・9は縄文後半期に帰属する可能性があるが、小破片のため、確証はない。他に、縄文中期に属すると思われる把手がⅡ区のⅤ層から 1点出土している。

第16表　基本層位出土縄文土器片集計表

区	層位	無文	不明	縄文		羽状縄文	撚糸		沈線＋無文文	沈線＋不明	把手	合計
				無節	単節	無節＋単節	単節	網目(単節)				
Ⅰ	Ⅴ		6	9				1				16
Ⅱ	Ⅴ	1	54	10	18		2		2	2	1	90
	Ⅴ～Ⅵ		1				1					2
	Ⅵ		25	2	3			2				32
	Ⅶ		10	1	14	1	2					28
小合計		1	96	22	35	1	5	3	2	2	1	168
表採		1	3	3	2							9
合計		2	99	25	37	1	5	3	2	2	1	177

(3) 須恵器

多くの破片が出土したが実測できたのは、37点である。器種としては、坏・蓋・壺・甕・甑、異形のものがある。

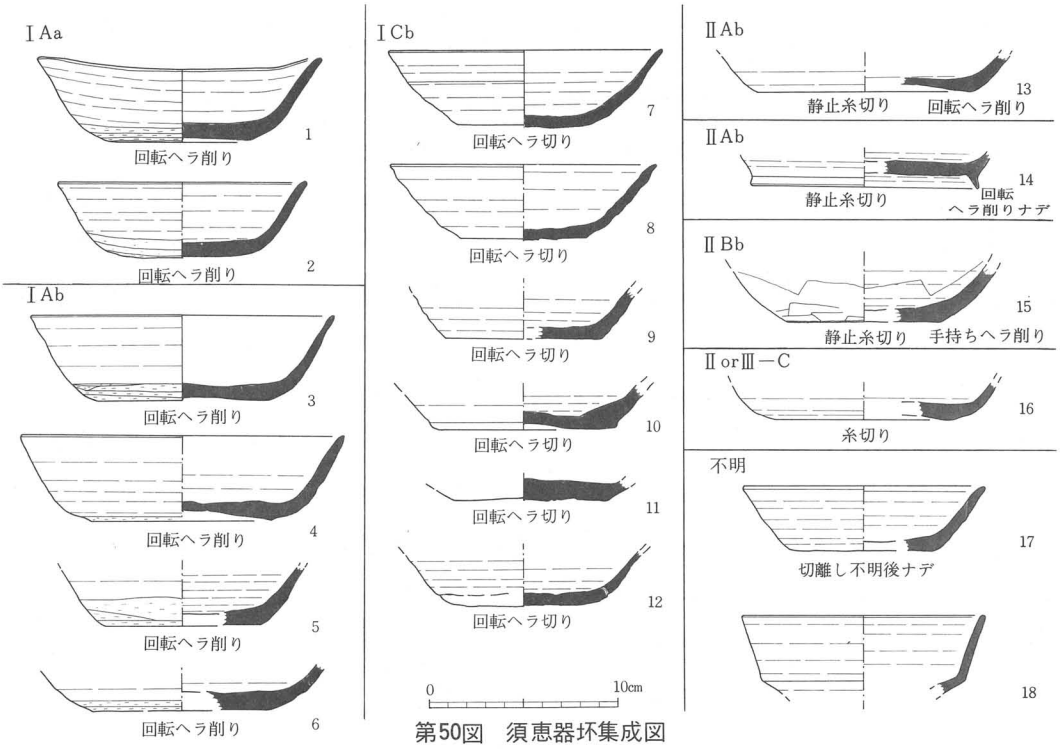
〔坏〕

坏は18点実測できたが、切り離し技法・切り離し後の調整及び器形の特徴により、第17表の分類基準に従って分けると、第50図に示したような組み合わせによる分類が可能である。第50図No.16・17については切り離し技法が不明確なので分類できない。また18は底部を欠損しているので分類の対象外である。

第17表　須恵器坏の分類基準

1．切り離し技法による分類	2．切り離し後の調整による分類	3．底部と体部の接続部の形状による分類
Ⅰ　回転ヘラ切り	A　体部下端がら底部全面または同縁部が回転ヘラケズリされる	a．境が不明瞭なもの
Ⅱ　静止糸切り	B　手持ちヘラケズリされる	b．境が明瞭なもの
Ⅲ　回転糸切り	C　無調整	c．高台の付くもの

各分類の年代については、ここで行なった分類と同じ基準で分類した岡田茂弘　桑原滋郎両氏の『多賀城周辺における古代坏形土器の変遷』(註12) により考えることにする。本書の 6つの分類は、上記論文によれば、それぞれ第18表に示したように分類され、年代が与えられてい



第50図　須恵器坏集成図

第18表　須恵器坏分類表

本書・分類	第図No.	登録No.	出土地点	多賀城分類	年代観
ⅠAa	1	E34	Ⅱ区SXⅠ－1層	1－a	7世紀末～世紀前葉
	2	E 5	Ⅱ区　Ⅴ層		
ⅠAb	3	E30	Ⅱ区SⅠ1－3層	1－b	8世紀前葉
	4	E29	Ⅱ区SⅠ1－3層		
	5	E28	Ⅱ区SⅠ1－3層		
	6	E31	Ⅱ区SⅠ1－床		
ⅠCb	7	E 1	Ⅰ区86層一括	6－b	8世紀末～9世紀末
	8	E 2	Ⅰ区8b層一括		
	9	E20	Ⅱ区　Ⅵ層		
	10	E25	Ⅱ区　Ⅶ層		
	11	E 3	Ⅱ区　表土		
	12	E 6	Ⅱ区　Ⅴ層		
ⅡAb	13	E19	Ⅱ区　Ⅴ～Ⅵ層	3	8世紀中葉
ⅡAbc	14	E 8	Ⅱ区　Ⅴ層	(3)	(8世紀中葉)
ⅡBb	15	E 7	Ⅱ区　Ⅴ層	4	8世紀中葉

る。

須恵器坏の分類とその年代によると、本遺跡出土の須恵器坏には、明確な回転糸切り技法によるとのはなく、7世紀末から8世紀前葉のもの1種2点・8世紀中葉のもの3種7点、8世紀末から9世紀のもの1種6点が出土した。出土遺構及び基本層位との関係についてみると、Ⅱ区Ⅴ層上面で検出された1号住居跡の床面直上及び堆積土下部より出土したⅠAb類の4点

が基準となる。ⅠＡｂ類は８世紀中葉の年代か与えられるので、１号住居跡も同年代のものと考えることができる。したがって１号住居跡の検出面であるⅡ区Ⅴ層の形成年代は８世紀中葉以前となり、Ⅴ層より７世紀末から８世紀前葉のⅠＡａ類（第50図No.２）が出土していることとは矛盾はない。また、Ⅱ区Ⅴ層中からは、ⅠＡａ類だけではなく、ⅡＡｂ類（第50図No.13、14)、ⅡＢｂ類（第50図No.15）も出土していることも考え合わせると、Ⅴ層の形成年代は、８世紀前葉から中葉にかけての時期と考えられる。その下のⅡ区Ⅵ層上面については、Ⅵ層上面検出のＳＸ－１よりⅠＡａ類が出土しているので、７世紀末から８世紀前葉には形成されていたと考えることができる。さらにⅡ区Ⅶ層はそれ以前の年代が考えられる。ただし、Ⅱ区のⅤ層、Ⅵ層、Ⅶ層中からⅠＣｂ類の坏片（第50図No.９・10・12）が出土し、上述の年代観に矛盾を生じている。調査者としては、ⅠＣｂ類の年代が、７世紀末にまでさかのぼると考えるより、Ⅱ区の基本層出土遺物に関しても述べたように、調査中に検出できなかった攪乱及びピット等があり、これらへの混入品を基本層のものとして取り上げたとするのが妥当と考えている。

Ⅰ区とⅡ区の須恵器坏についてみると、Ⅰ区で実測できたものはⅠＣｂ類２点(第50図No.７・８）があるだけで、Ⅱ区のように８世紀前葉以前にさかのぼるものはないようである。

〔蓋〕

蓋には第42図No.２のように口径の割に天井の高いものと第38図No.１のような口径の割に天井が低く偏平なものと２種類が出土している。前者は短頸壺・後者は坏の蓋と考えられる。ともにリング状のつまみがつく。年代については、Ⅱ区Ⅵ層より出土した第42図No.２は類例がないので確かなことは不明であるが、このように天井部が高く、天井の縁辺部に突帯が巡るものが、Ⅲ期(７世紀前半～７世紀後半)の末からⅣ期(７世紀後半～８世紀末)の初頭にかけて存在することから考えると、本品の年代は７世紀の末頃と考えられる。これは坏の年代よりみたⅡ区Ⅳ層の年代と相応し、矛盾は生じない。

第38図No.１　２の偏平な蓋については、ＳＸ－１での須恵器坏ⅠＡａ類との共存関係により７世紀末～８世紀前半の年代が考えられる。

〔壺〕

壺類は３点（第９図No.３・第22図No.２・第42図No.５）出土しているのが、年代のわかるものはない。ただ第42図No.５は５段の波状沈線文と櫛書き連点文を有し、装飾性の高い点を考えると９世紀を下るものではなく、また、陶邑編年のⅠ期、Ⅱ期のような細かくシャープな波状沈に比べるとかなり荒い波状文となっていることからすると、７世紀から８世紀頃のものと考えられる。

〔甕〕

甕は13点実測したが、年代の得られるものはない。共存する坏と同時期またはそれに近い年代と考えられる。

〔甑〕

須恵器の甑は、無底式で内面底部近くに突起を有し、体面外部には6段の波状沈線文を施すという特徴を有している。年代としては、1号住居跡の埋没年代である8世紀中葉以前と考えられる。

宮城県内より出土した須恵器甑の例は少なく、管見する範囲では、鳥屋窯跡三角田南地区2号窯跡出土品（大和町）(註13) 亀岡遺跡3号土壙・同第1号住居跡（大衡村）(註14) 清水遺跡Ⅱ区（名取市）(註15) の4点があるだけである。管見外のものがあったとしても、その出土点数は、他の器種と比較しても著しく少なく、特殊な存在であると考えられる。

〔台形土器〕

第38回No.5は器種の名称がわからないために、異形土器と呼んだものである。実測図では、径の狭い方を上にして実測したが、逆になる可能性もある。これとまったく同形の類例を求めることはできなかったが、類似したものには、陶邑古窯址群のＭＴ21号窯跡出土の49番に図示されたものがある（註16)。これは、器高約5cm、体部径約29cmのもので、体部に直径2.5cmの円径の孔を穿っている。実測図は本書のものとは逆に、開いた側を下にしているが、その天井部（本書の底部に当る）には、推定径13.5cmの大きな円形の穴が開かれている。器形については述べられていない。いずれ何かの台として使用されたのではないかと考えられる。

年代については、ＳＸ－1の1層で共存している須恵器坏1Ａ$_a$の年代により、7世紀末から8世紀前葉と考えられるが、ＭＴ21の年代―Ⅳ期初頭（7世紀後半頃）と矛盾しない。

(4) 土師器

土師器は、ロクロ使用前のものと、ロクロ使用後のものがあり、前者には坏・壺・甕の器種があり、後者には坏と甕がある。

〔杯〕

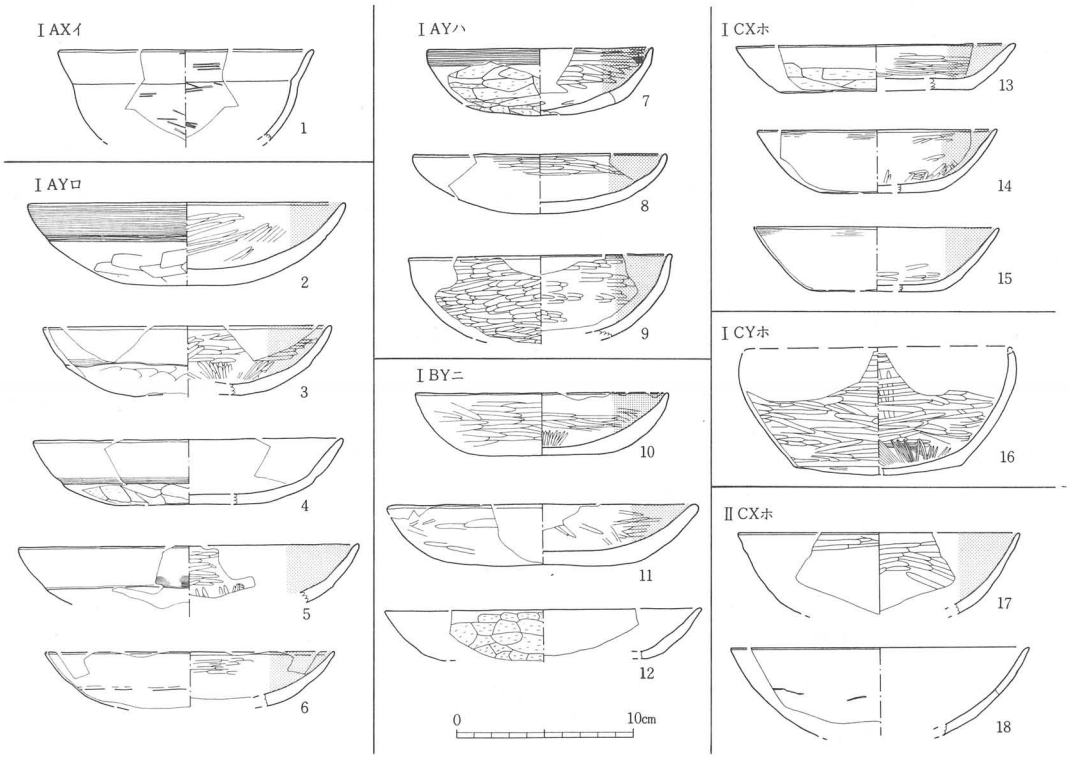
実測できたものは18点ある。これを各遺物の器形の特徴によって第19表の分類基準を設け、これに従って分類すると第51図及び第20表のようになる。これを型式編年に当てはめると、ＩＡＸイに分類された第51図No.1は、塩釜式に相当し、ＩＡＹロからＩＣＹホに分類されたNo.12～16は国分寺下層式に相当し、ⅡＣＸホ類は表杉ノ入式に相当する。表でわかるようにＩ区では塩釜式及び表杉ノ入式が出土しているが、Ⅱ区においては実測しうるような塩釜式及び、表杉ノ入式の遺物は出土していない。反対にＩ区ではⅡ区で実測できるものだけで15点も出土しているのに対し、国分寺下層式と認定できる遺物は出土していない。

次に国分寺下層式の第51図No.2～16までの土器に限定して考えることにする。

須恵器との共存と基本層位，出土遺構の関係についてみると、共存関係において最も信頼性

第19表　土師器坏の分類基準

1.ロクロ使用の有無	2.底部の形状による分類	3.口縁部の形状による分類	4.体部と底部の体の形状による分類
Ⅰ　ロクロ未使用	A　丸　底	X．外傾する	イ外面がわずかにくびれ、対応する内面に稜を形成 ロ外面にわずかな段を形成し、内面には変化なし ハ特に変化がなく口縁に至る ニ不明瞭ではあるが、丸味のある角を確認できる ホ角がついて境がわかる
Ⅱロクロ使用	B　丸底風平底 C　平底	Y．内湾する	



第51図　土師器坏集成図

の高いものは、1号住居跡床面直上及び、カマド内から出土したⅠ BYニ類に分類された3点の土師器坏と、同床面から出土したⅠ Ab類の須恵器坏との関係である。この関係に着目すると、3点の土師器の年代は8世紀中葉頃に位置付けることができる。また1号住居跡の3層中には床面と同類の須恵器坏3点が出土していることから推察すると、住居跡床面の遺物と3層(堆積土下部)との時間差がかなり少ないと考えられる。とすれば、同じ1号住居跡3層出土の第51図No.7（Ⅰ AYハ）及び第51図No.15（Ⅰ CXホ）についても、床面遺物と同時期のものと考えられる。これをまとめてみると、1号住居跡の床面直上（カマドを含む）の遺物はⅠ BYニ類に限定されるが、堆積土中より出土しているⅠ AYニ類及び、Ⅰ CXホとの時期は少なく、むしろほぼ同時期のもので、8世紀中葉頃の年代が考えられる。

第20表　土師器坏分類表

No.	分　類	登録No.	出　土　地　点	共存須恵器坏	須恵器の年代観
1	ⅠAXイ	C－1	Ⅰ区　Ⅴ層		
2	ⅠAYロ	C－6	Ⅱ区　Ⅵ層	(ⅡAb)	(8世紀中葉)
3		C－7	Ⅱ区　Ⅵ層	(ⅡAb)	(　〃　)
4		C－8	Ⅱ区　Ⅴ層	ⅠAb	7世紀末～8世紀前葉
5		C－9	Ⅱ区　Ⅴ層	ⅠAa	〃
6		C－20	Ⅱ区　SⅠ－1－SK2		
7	ⅠAYハ	C－16	Ⅱ区　SⅠ－1　3層	ⅠAb	8世紀中葉
8		C－10	Ⅱ区　Ⅴ層	ⅠAa	7世紀末～8世紀前葉
9		C－11	Ⅱ区　Ⅵ層	(ⅡAb)	(8世紀中葉)
10	ⅠBYニ	C－18	Ⅱ区　SⅠ－1　床直	ⅠAb	8世紀中葉
11		C－17	Ⅱ区　SⅠ－1　床直	ⅠAb	〃
12		C－19	Ⅱ区　SⅠ－1　カマド	ⅠAb	〃
13	ⅠCXホ	C－13	Ⅱ区　SB－1		
14		C－14	Ⅱ区　SB－1		
15		C－15	Ⅰ区　SⅠ－1　3層	ⅠAb	8世紀中葉
16	ⅠCYホ	C－16	Ⅱ区　SX－1　1層	ⅠAa	7世紀末～8世紀前葉
17	ⅡCXホ	D－5	Ⅰ区　P4		
18		D－6	Ⅰ区　SK－1		

では、Ⅰ AYハ類、Ⅰ BYニ類、Ⅰ CXホ類(第51図No.7～15)と、Ⅰ AYロ類(第51図No.2～6)との関係についてみると、Ⅰ AYロ類は、1号住居跡の検出面であるⅤ層及び、その下のⅥ層中よりの出土であるから、当然Ⅰ AYハ類及び、Ⅰ BYニ類、Ⅰ CXホ類の土器よりも古いものと考えることができる。そしてその年代については、須恵器坏で検討した結果から得られたⅤ層、Ⅵ層の年代―7世紀末から8世紀前葉―と同一に考えられる。ただし、Ⅱ区Ⅴ層、Ⅵ層中からも先にⅠ AYハ類と分類し、8世紀中葉とした土器(第51図No.8、9)も出土しているので、これが、Ⅱ区Ⅵ層から1号住居跡出土土器まで大きな時間差がないことを示しているのか、また同じⅠ AYハ類でも、口縁部直下までヘラケズリだけによって調整されるものと、外面全体がヘラミガキ調整されるものとでは時間差があることを示しているものなのか、あるいは、前々より述べているように、上層よりの混入品があったのかについては、今後別の検討が必要のようである。

なお、SX－1出土の第51図No.16についても、他の同遺構出土品と同様に、7世紀の年代を与えることができるかどうか今後の検討が必要である。

〔壺〕

第9図No.3に示した土器は、体部下半の破片であるが、やや偏平な球形を呈しており、壺と考えられる。外面の体部下端には細いハケメ調整痕が残り、体部内面はヘラナデ調整されている。底部は小さく、やや上げ底風に削られている。器形及び、調整の特徴から塩釜式期のものと考えられる。

〔甕〕

甕は13点実測できた。このうち９点はロクロ使用前、３点はロクロ使用後のもので、他に１点、ロクロが使われたかどうか不明のものがある。

第11図No.１の甕は、頸部から口縁部にかけて幅が広く、大きく外反し、口唇部ヨコナデ、頸部から肩部にかけての外面ハメケ、内面ヘラナデにより調整される。体部と頸部の境続部内面には稜が形成される。このような特徴を有するものは、塩釜式期に属するものと思われる。

第19図No.１～５の１号住居跡出土品で、器形及び調整については、すでに述べたようであるが、ここでもう一つのそ特徴として、大型のもの(第19図No.13)は口唇部が幅広く、強く外反するのに対し、小型のもの（第19図No.２・５）は口縁部が短かく、軽く外反することが指摘できる。またこの段階では、栗囲式の甕の特徴となっていた体部と口縁部の境の段は、消滅してしまう。１号住居跡出土の土師器甕の年代は、３層出土品を含め、共存の須恵器と同じく、８世紀中葉頃と考えられる。また、表土より出土している第39図No.３についても１号住居跡出土第19図No.５と類似するので、８世紀中葉頃と考えられる。

第　図No.　の体部下半部片については、土器の特徴からは栗囲式または国分寺下層式から判断できないが、ＳＸ－１出土須恵器の年代から７世紀末から８世紀前葉の年代が考えられる。

第43図No.３のⅦ層出土甕は、底部の端部が外側に張り出している点は、栗囲式以前の甕には見られず、国分寺下層式になって見られる特徴であることから、国分寺下層式期に属するもので、年代としてはⅡ区Ⅶ層の年代と同一に考えられる。

第10図No.３～５の一括出土の甕３点は、共存する須恵器坏が、８世紀末から９世紀末のものであることから、この年代幅の中で考えることができる。３点の甕は、肩部から口縁端部にかけての器形は個性的であるのに対し、器面調整においてはかなり類似性が強く認められる。

(5)赤焼土器

赤焼土器は、出土量が少なく、実測できたのは第11図３の１点だけである。これの年代については、白鳥良一氏による「多賀城跡出土土器の変遷」(註17) におけるＥ群土器の須恵器及び須恵形土器に器形の類似性を認めることができる。Ｅ群土器についてはほぼ10世紀の年代が与えられているので、本遺跡出土の赤焼土器についても10世紀頃という年代が考えられる。

(6) 土　錘

土錘はⅠ区から１点、Ⅱ区から５点出土している。Ⅱ区から出土したものはⅣ層中のものからⅥ層中のものまであるが層的に大きさ及び形状に大差は認められない。年代について明確なものはないが、Ⅱ区の須恵器、土師器の年代が、７世紀末から９世紀に限定されていることか

ら、これらの土錘もこの年代のものと考えられる。

(7) 刀　子

刀子は、形状のわかる唯一鉄製品である。Ⅵ層から出土しているので、7世紀末から8世紀前葉のものと考えられる。他にも鉄製品と考えられるものの断片が少数出土しているが、銹化が著しく形状のわかるものはない。また、Ⅴ層及びⅥ層中からは、鉄滓が少量出土している。（写真38－7）

(8) 陶　硯

陶硯は、どちらも小破片であるので、他の跡ものと比較することはできないが、Ⅴ層より出土しており、これがⅤ層への混入品でないとすれば、すでに8世紀前半に、当遺跡で硯を使用するに至っていたことになる。陶硯は、近接する下ノ内遺跡からも出土しており、下ノ内遺跡及び、当遺構の掘立柱建物跡群との関係において、古代におけるこの地域の歴史的性格について再考する必要があると考えられる。

(9) 陶磁器

陶磁器については、Ⅴ－1－(4)で述べたようにⅠ区より3点出土している。平安時代末から鎌倉時代にかけてと考えられる常滑産の鉢（第12図No.2）が最も古い。中国産の青磁は、13～14世紀頃と考えられる。(註18) 第12図No.1の甕片は、中世の陶器と考えられるが、年代及び生産地については明らかでない。

2．発見遺構の年代と総括

(1) Ⅰ区の土壙・ピット

土壙が7基、ピットが15個、それぞれⅤ層、Ⅵ層、Ⅶ層上面で検出された。このⅤ、Ⅵ、Ⅶ層について時期を決定すべき資料を得られず、土壙、ピット内の出土遺物より考えてみると、3号、5号、6号については、錐積土中よりロクロ土師器が出土していることから9世紀以降と考えられる。7号、9号、13号ピットについても、堆積土中よりロクロ土師器が出土していることより9世紀以降と考えられる。

(2) Ⅰ区1号河川

1号河川は、Ⅹ層中で検出された。Ⅷ層は、灰白色火山灰層である。この火山灰が、多賀城

跡及び陸奥国分寺跡で検出されているものと同一のものとすると、10世紀中頃と考えられ、この旧河川は、10世紀中頃以前に埋まってしまったと考えられる。(註19)

(3) Ⅱ区の土壙・ピット

Ⅱ区の工壙及びピットは、全てⅤ層上面で検出されたものである。Ⅴ層年代が8世紀中葉頃と考えられるので、これらの土壙ピットの年代は8世紀中葉をさかのぼるものではない。1・2号土壙については、堆積土中よりロクロ土師器が出土していることから9世紀以降と考えられる。また、1号土壙の2層中より検出されている灰白色火山灰が、多賀城跡及び、陸奥国分寺跡で検出されているものと同起源のものであるとすれば、白鳥良一氏の年代的考察に従って(註20)、10世紀中頃と考えられ、1号土壙もこの年代を与えることができる。

1・2号土壙の性格については、形態及び出土遺物からみても、それを明らかにすることはできない。3号土壙については、形が整い、堆積土下部に多量の炭火物が層をなしていることからすれば、何かの貯蔵穴とも考えられる。

(4) 溝　跡

溝跡は、Ⅱ区において8条検出された。各層の検出層は、Ⅴ層上面3条、Ⅵ層上面が2条、Ⅶ層上面が2条、Ⅷ層上面が1条である。ただし3号溝についてはロクロ土師器が出土しているので、Ⅴ層またはそれより上層よりの掘り込みと考えられる。溝跡の方向には統一性は認められないが、Ⅴ層、Ⅵ層上面検出の溝跡(2、3、5、6、8、9号溝)は、3号を除くとほぼ南北または東西方向にのびるのに対し、下のⅦ層、Ⅷ層上面検出の溝跡(4、7号溝)は、真北に対して斜方向に延びるという傾向が認められる。また4号や7号溝のように検出面が深く、さらに掘り込みの深い溝跡の底面には砂の錐積が認められ、かなりの水量があったと考えることができる。

溝の底面は、調査範囲が狭いために大きな傾きを示すのはもなかったが、4、5、7、8号溝においてわずかに認めることができた。Ⅶ層検出の4号、及びⅧ層検出の7号は、遺跡の北側の後背湿地の方向が下がっている。5号、8号は、それぞれ西方と東方の反対方向の傾きを呈している。

溝の年代としては、ロクロ土師器の出土している3、8、9号については9世紀以降のものと考えられる。Ⅴ層上面検出の2号については8世紀中葉以降、Ⅵ層上面検出の5、6号については7世紀末から8世紀前葉頃、Ⅶ・Ⅷ層上面検出の7号については7世紀末以前の年代が考えられる。

(5) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は3棟分検出されているが、調査区が狭いためにその全容のわかるものはない。建物跡の規模及び柱穴掘り方の規模も個別的である。1号掘立が最も大きく梁行が3間（5.25m）あり、桁行も3間を超えるものと思われる。柱穴の掘り方も方形または隅丸方形と比較的整っている。これに対し、2号掘立柱建物跡は梁行2間（3.85m－検出例を梁と考えた場合）と小規模で、柱穴掘り方も小さな円形のものである。1号、2号掘立柱建物跡には、構造上の差は建物の機能的差異を示しているものと考えられる。

3号掘立柱建物跡は、南列が1間で4.4mを計る建物である。このように1間の間尺が4mを越えるような掘立柱建物は一般的に見られるものではない。また、柱穴掘り方も不統一である。このことから考えると、3号掘立柱建物跡とした遺構は、掘立柱建物跡ではなく、床面を含む上部を削平された南北2間東西1間からなる6本柱主穴の竪穴住居跡の柱穴で、検出柱穴はその南側2/3と考えられる。

1、2号掘立柱建物跡の年代は、柱穴掘り中よりロクロ土師器片を出土していることから、9世紀以降と考えられる。3号掘立柱建物跡とした遺構についてはⅦ層上面が検出面であることから7世紀末以前のものと考えられる。

(6) 竪穴住居跡

竪穴住居跡としてプランが検出できたのは、Ⅱ区の1号住居跡1軒だけである。大きさは一辺4.2m以上で、煙道を有するカマドが付設されている。カマドは二時期あり、東壁中央付近から北壁に造り換えている。出土遺物は少ないが、床面出土土器及び堆積土下部出土土器から8世紀中葉の廃棄年代が考えられる。

3．調査成果のまとめ

① 本調査では、Ⅰ区において土壙　基、ピット多数、旧河川跡1条、Ⅱ区において遺物包含層3枚、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡3軒（竪穴住居跡の柱穴の可能性のある遺構1基を含む)、土壙3基、溝8条、性格不明竪穴遺構1基、ピット多数と、多くの遺構が検出され、これに関係する遺物も多数出土した。これにより、これまで遺跡として周知されていなかった下ノ内浦地区も、周辺地区と同様に多数の遺構の存在する遺跡であることが判明した。

② Ⅰ区とⅡ区では基本層及び出土遺物が多少異なり、Ⅰ区では4世紀代の塩釜式土師器の後は9.10世紀代の土師器、須恵器、赤焼土器の時期に至るまで、その中間時期の遺物は出土して

いない。これに対し、Ⅱ区においては7世紀末から9世紀代の遺物は出土しているが、その前後の遺物として明確なものは縄文土器があるだけである。

③ 今回発見された遺構のうち時期のわかるものは、7世紀末頃と考えられる溝、性格不明の竪穴遺構から、10世紀中頃と考えられるⅡ区1号土壙まであるが、これ以外の時期の縄文式土器や、塩釜式土器、中世の陶磁器類も少量ながら出土しているので、これらの時期に関係する遺構も、今後の調査によっては発見されることが予想される。

④ Ⅱ区は遺跡の中央部よりやや南の位置に、Ⅰ区は旧笊川にほぼ接する南端部に位置するが、基本層は暗褐色、灰黄褐色を基調とする粘土質シルト、Ⅰ区は褐色、黄褐色を基調とするシルト、砂質シルトと、層の変化が著しい。

両区のⅤ層前後の標高10.4～11.2mの範囲で、7世紀後半から10世紀代に限定される生活面が確認された。又、灰白火山灰降下時期に近接した時期に、両区とも一部笊川の影響を受けていることが確認された。Ⅱ区で一部深掘区を設定し調査したが、前記以前の遺物包含層は確認できなかった。

註　　記

註1　田中他　　：「六反田遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第34集（1981.12）

註2　篠原信彦他　：「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報」Ⅱ『仙台市文化財調査報告書』第　集（1983.3）

註3　仙台市教委　：「山口遺跡」現地説明会資料（1982.　）

註4　　註2に同様：

註5　渡部・主浜他：「山田上・台遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第30集（1981.3）

註6　佐藤・斎藤他：「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第36集（1982.3）

註7　岩渕・佐藤他　「三神峯遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第25集（1980.12）

註8　佐藤・吉岡　：「山口遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第33集（1981.3）

註 9　伊東・伊藤・岩渕「裏町古墳発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第 7 集
(1974. 3)

註10　長島栄一　：「大野田古墳群」年報Ⅲ　『仙台市文化財調査報告書』第41集 (1982. 3)

註11　渡辺・結城　：「富沢窯跡」『古窯跡研究会研究報告』第 3 冊　(1975. 9)

註12　岡田・桑原　：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ　(1974. 3)
宮城県多賀城跡調査研究所

註13　東北学院大学：「鳥屋窯跡三角田南地区発掘調査報告」『温故』第 9 号 (1975. 3)
考古学研究部

註14　東北学院大学：「亀岡遺跡発掘調査報告」『温故』第12号 (1979. 10)
考古学研究部

註15　丹羽　茂他　：「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告Ⅴ』(1981. 3)

註16　田辺昭三　：『陶邑古窯跡群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ

註17　白鳥良一　：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ (1980. 3)宮城県多賀城跡
調査研究所

註18　東京国立博物館：「日本出土の中国陶磁」　東京美術 (1978)

註19　　註17と同様

註20　　註17と同様

参考文献

大阪府教育委員会：「陶邑」Ⅱ、Ⅲ　『大阪府文化財調査報告書』第29・30輯

氏家和典：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』十輯　(1957)

氏家和典：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
(1967)

写 真 図 版

写真1　Ⅰ区全景
（東より）

写真2　Ⅰ区西壁断面
（東より）

写真3　Ⅰ区北壁断面
（南より）

写真４　Ⅰ区１号土壙
（西より）

写真５　Ⅰ区２号土壙
（南より）

写真６　Ⅰ区３号土壙
（北より）

写真７　Ⅰ区５号土壙
（北より）

写真８　Ⅰ区Ⅶ層上面
一括土器
（東より）

写真９　Ⅱ区北壁断面
E25付近
（南東より）

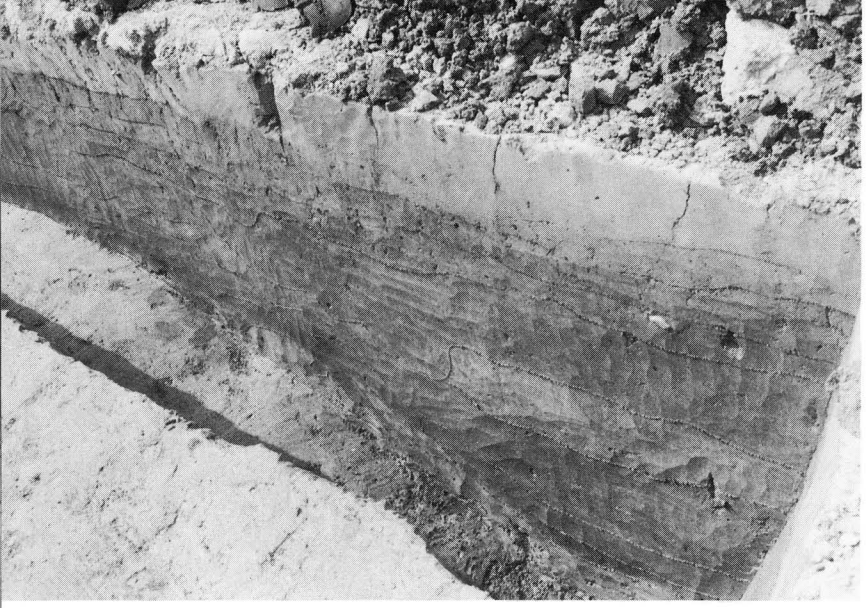


写真10　Ⅱ区北壁断面
—E24～E30—
（南東より）

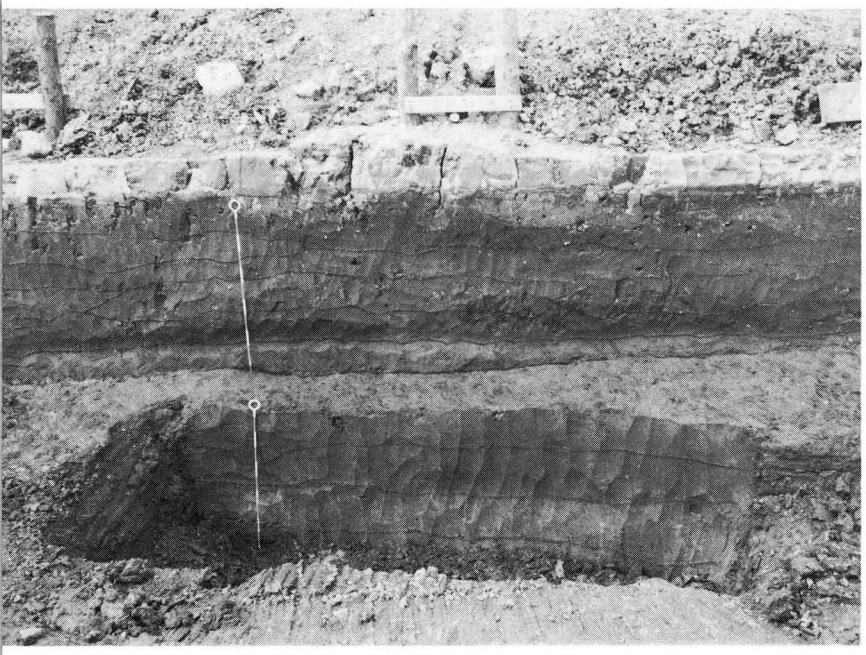


写真11　Ⅱ区北壁深掘り断面
—E12～E18—
（南より）

写真12　1号住居跡全景
（南より）

写真13　1号住居跡
カマド(新)
(南より)

写真14　1号住居跡
カマド(旧)
(西より)

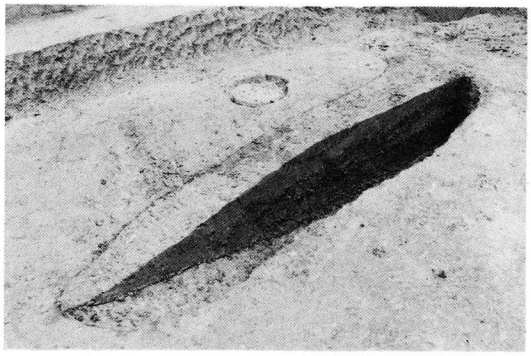


写真15　1号住居跡カマド(旧)
縦断面（南西より）

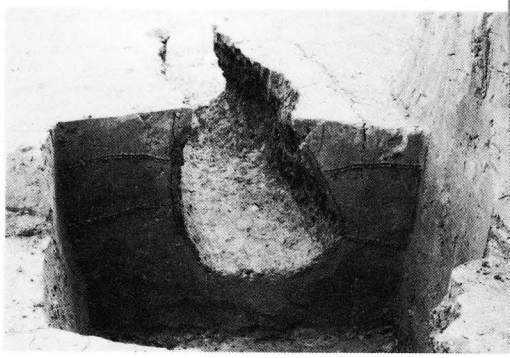


写真16　1号住居跡カマド(新)
横断図（北より）

写真17　1号掘立柱建物跡
P1－2
（南より）

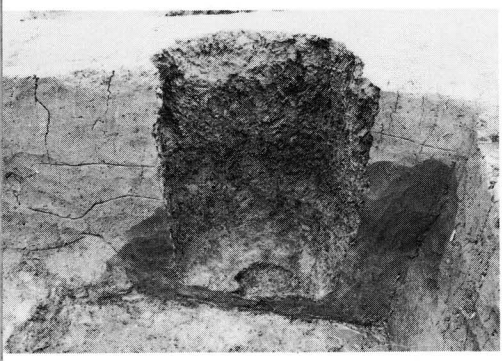


写真18　1号掘立柱建物跡P 3完掘
（北より）

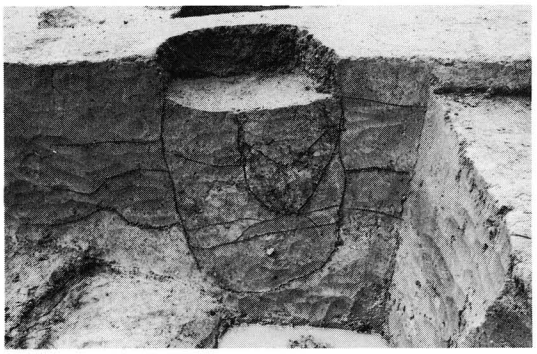


写真19　1号掘立柱建物跡P 4断面
（北より）

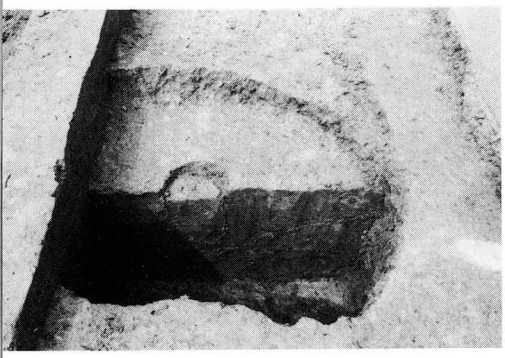


写真20　1号掘立柱建物跡P 4断面
（東より）

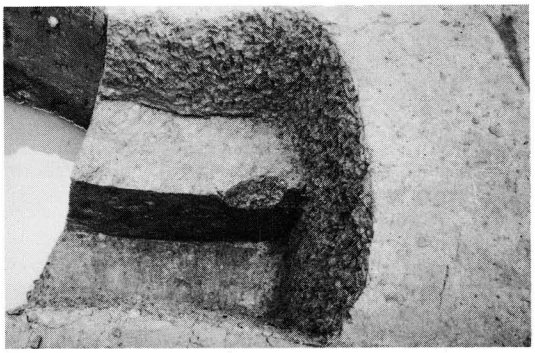


写真21　1号掘立柱建物跡P 2断面
（東より）

写真22　2号掘立柱建物跡
（東より）

写真23　3号掘立柱建物跡
（西より）

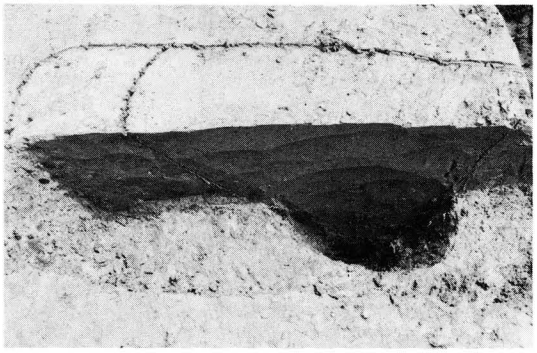


写真24　3号掘立柱建物跡P　断面
（西より）

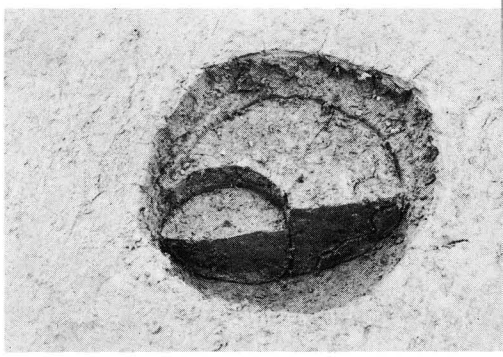


写真25　2号掘立柱建物跡P 2断面
（南東より）

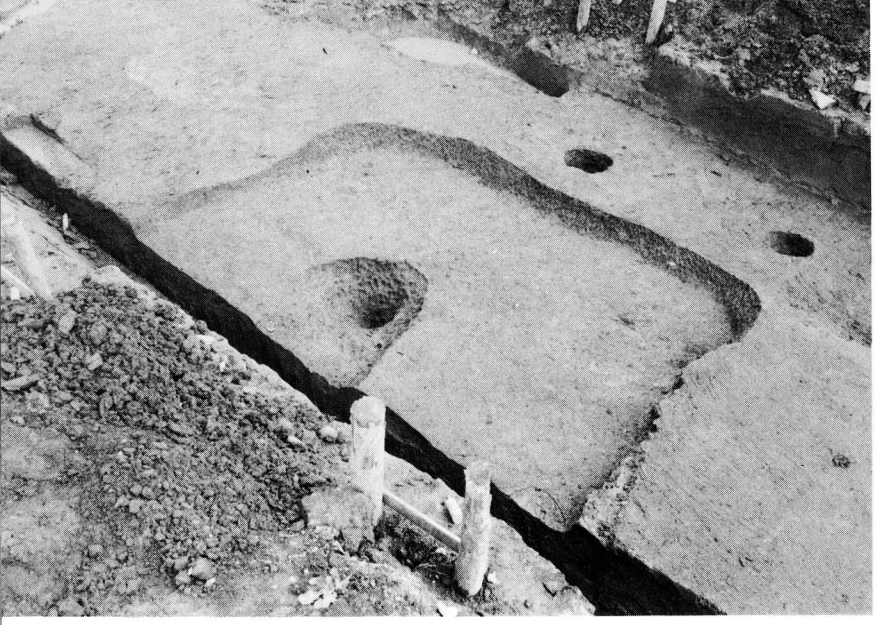


写真26　1号性格不明遺構
（北西より）

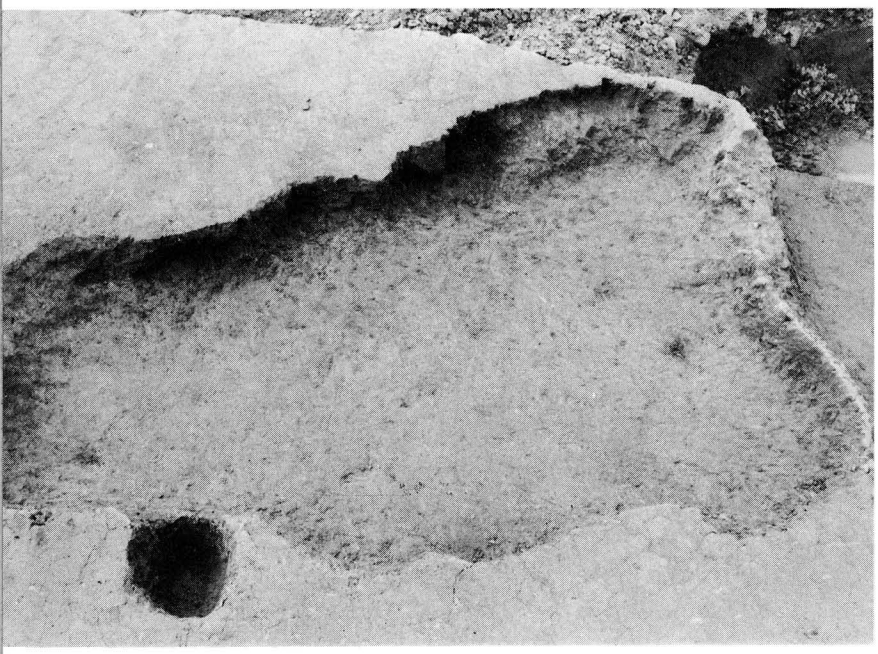


写真27　Ⅱ区1号土壙
（北より）

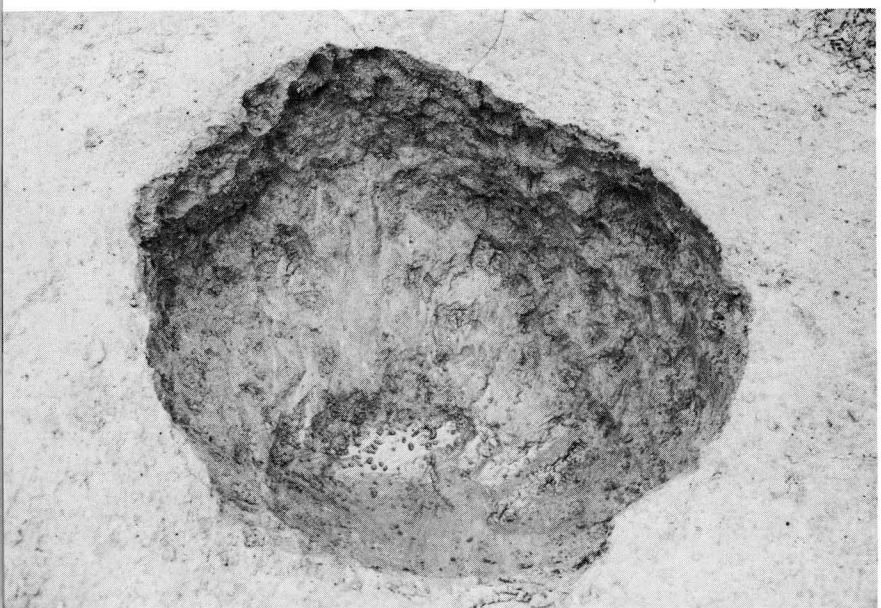


写真28　Ⅱ区2号土壙
（東より）

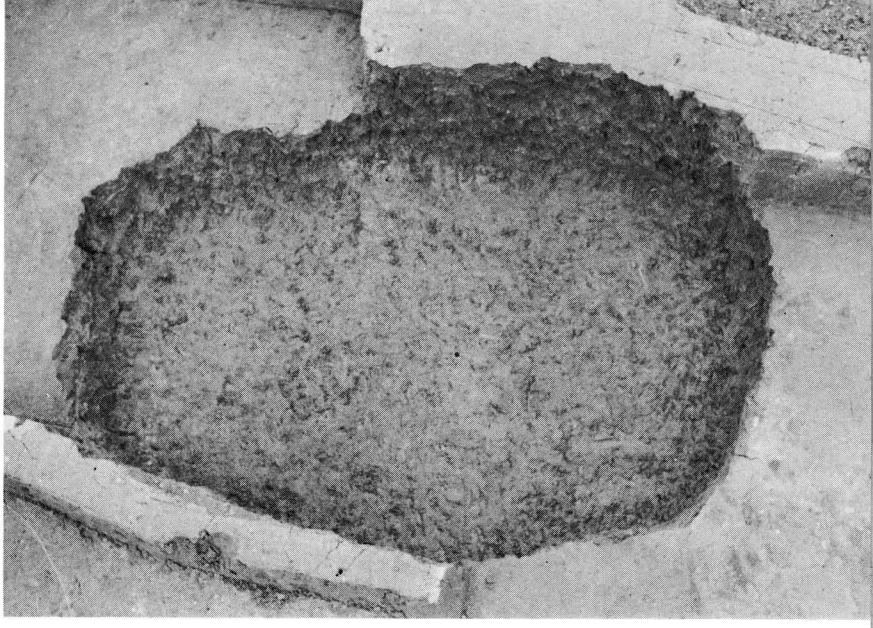


写真29　Ⅱ区３号土壙
（西より）

写真30　２　号　溝
（南より）

写真31　３・４号溝
（南より）
右４号・左３号

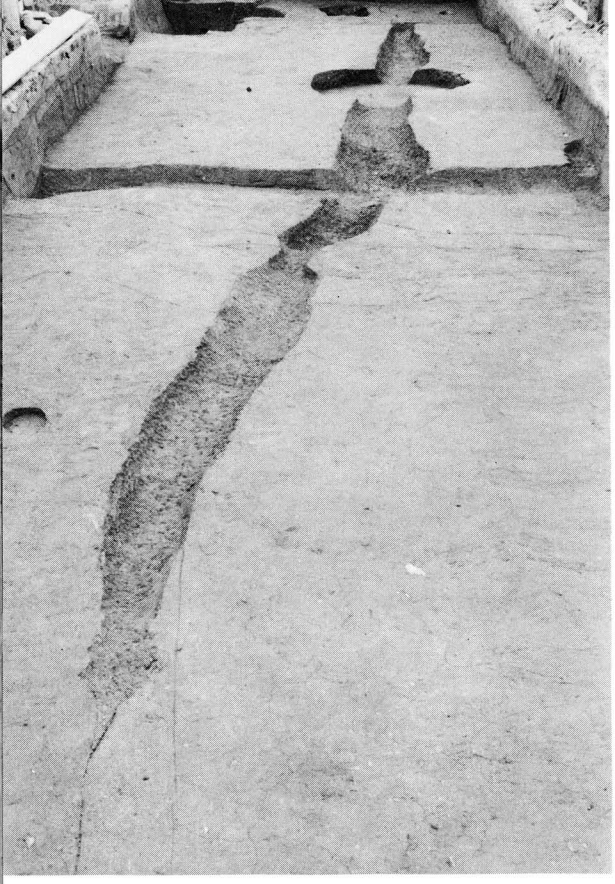


写真32　5・6号溝
—縦5号—
（東より）

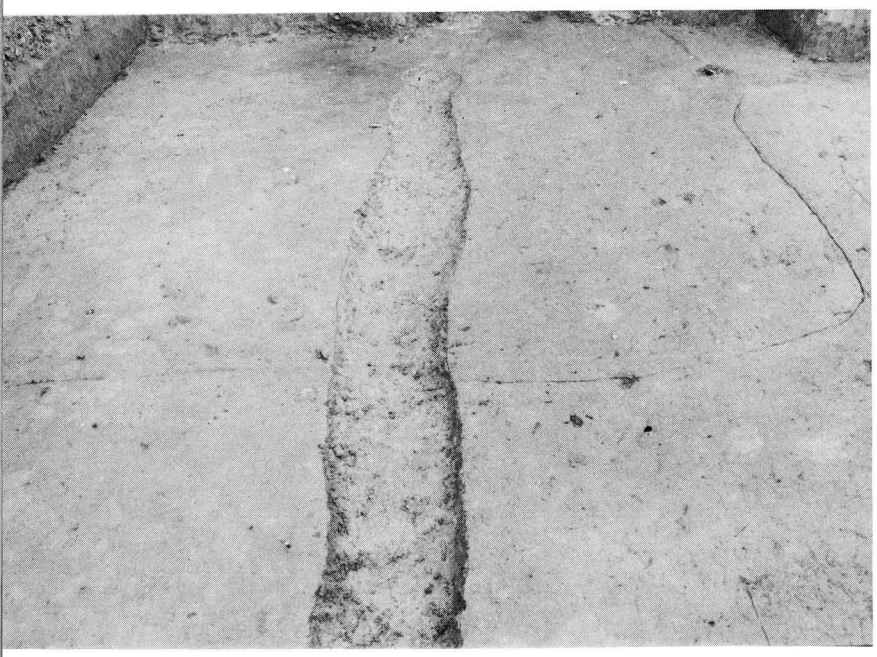
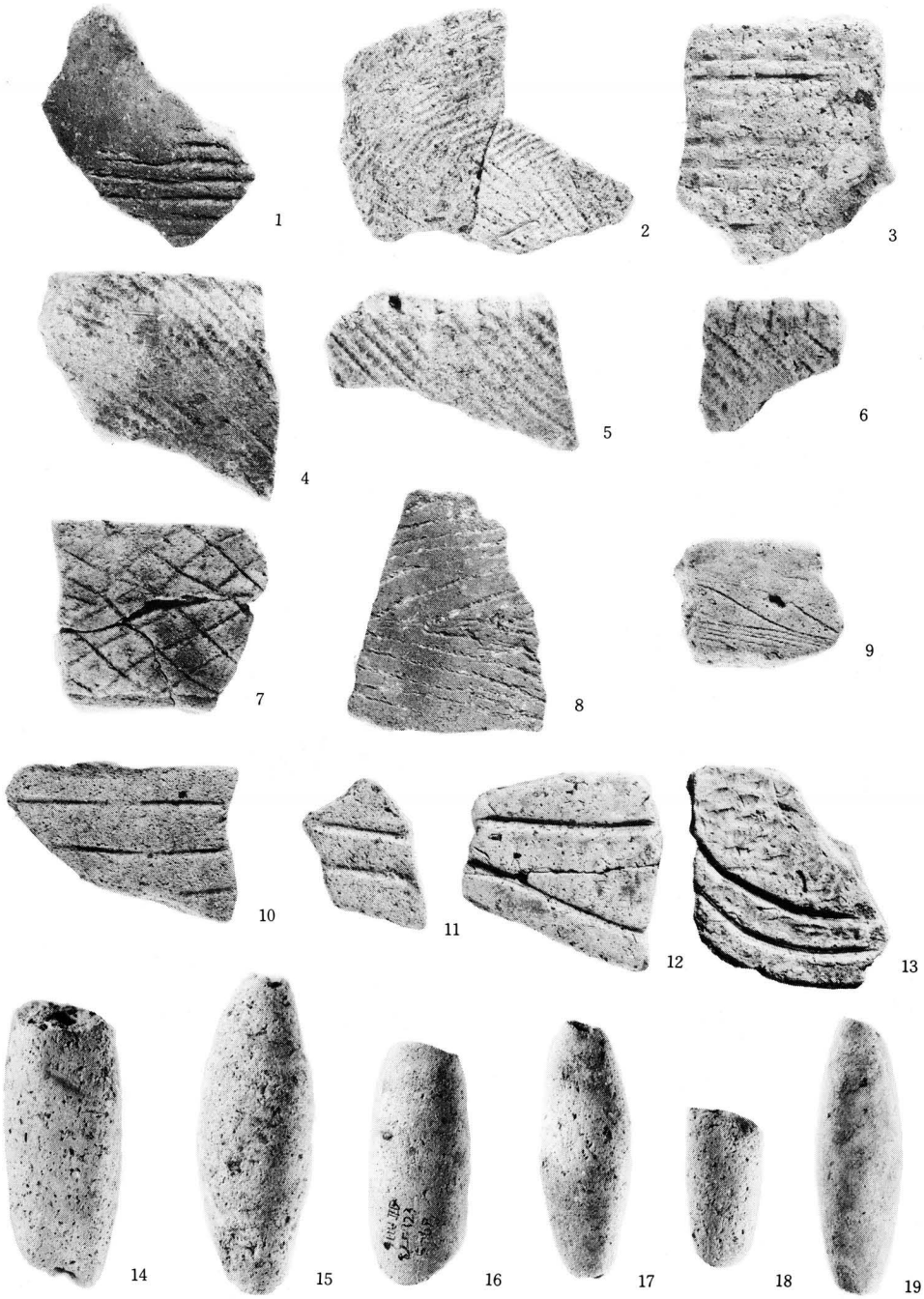
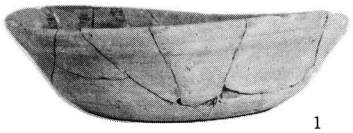


写真33　8　号　溝
（東より）



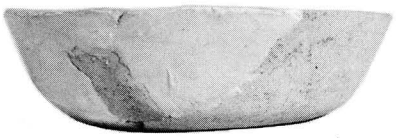
No.	登　録	種　別	地区名	遺　構	層　位	No.	登　録	種　別	地区名	遺　構	層　位
1	A－1	縄文土器	Ⅱ		Ⅴ層	11	A－11	縄文土器	Ⅱ		Ⅴ層
2	A－2	縄文土器	Ⅱ		Ⅶ層	12	A－12	縄文土器	Ⅱ		Ⅴ層
3	A－3	縄文土器	Ⅱ	SP－4		13	A－13	縄文土器	Ⅱ		Ⅴ層
4	A－4	縄文土器	Ⅱ			14	P－1	土錘	Ⅱ		Ⅳ層
5	A－5	縄文土器	Ⅱ		Ⅶ層	15	P－2	土錘	Ⅱ		Ⅳ－Ⅵ層
6	A－6	縄文土器	Ⅱ		Ⅴ層	16	P－4	土錘	Ⅱ		Ⅳ－Ⅵ層
7	A－7	縄文土器	Ⅱ		Ⅵ層	17	P－5	土錘	Ⅱ		Ⅰ Ⅵ層
8	A－8	縄文土器	Ⅱ		Ⅴ－Ⅵ層	18	P－6	土錘	Ⅱ		Ⅵ層
9	A－9	縄文土器	Ⅱ		Ⅵ層	19	P－7	土錘	Ⅱ	SK－1	Ⅴ層
10	A－10	縄文土器	Ⅱ		Ⅴ層						

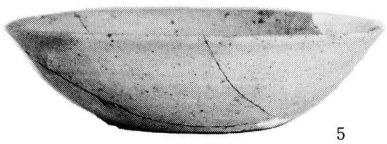
写真34　縄文土器、土製品

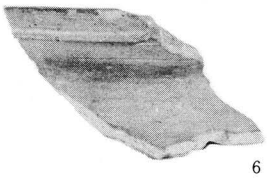

1

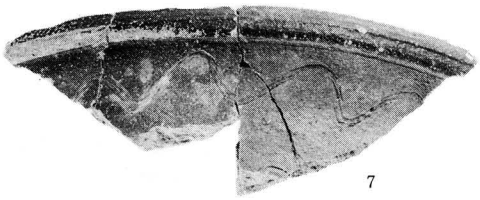
2

3

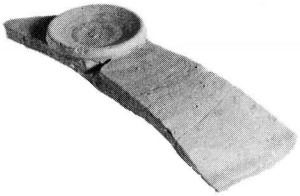

4

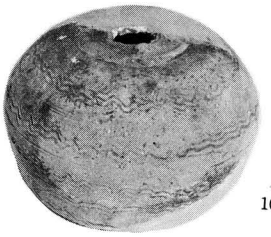

5


6


7

8


9


10

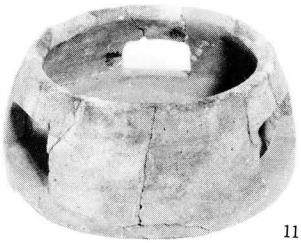

11

写真35　須　恵　器

No.	登録番号	種　別	器形	地区名	遺 遺 構	層　　位
1	E－34	須恵器	坏	Ⅱ	SX－1	1層
2	E－ 5	須恵器	坏	Ⅱ		Ⅴ層
3	E－30	須恵器	坏	Ⅱ	SI－1	3層
4	E－29	須恵器	坏	Ⅱ	SI－1	3層
5	E－ 1	須恵器	坏	Ⅰ		Ⅷb層
6	E－ 4	須恵器	甕	Ⅱ		Ⅱ層
7	E－22	須恵器	甕	Ⅱ		Ⅵ層
8	E－21	須恵器	蓋	Ⅱ		Ⅵ層
9	E－35	須恵器	蓋	Ⅱ	SX－1	1層
10	E－26	須恵器	壺	Ⅱ		Ⅶ層
11	E－38	須恵器	異形土器	Ⅱ	SX－1	1層

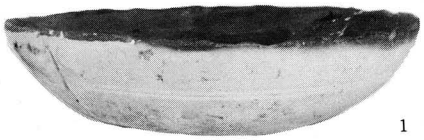
1

2

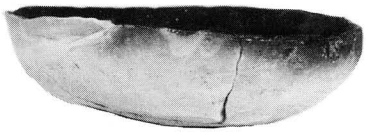
3

No.	登録番号	種　別	器形	地区名	遺　構	層　位
1	E－32	須恵器	甑	Ⅱ	SⅠ－1	かまど内
2	E－29	須恵器	坏	Ⅱ	SⅠ－1	3層
3	E－3	須恵器	坏	Ⅱ		表採

写真36　須恵器

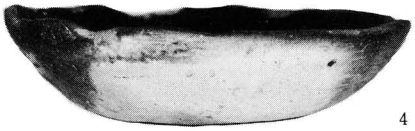


1

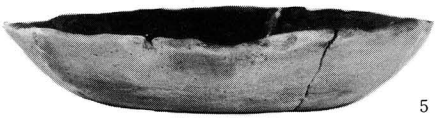


2

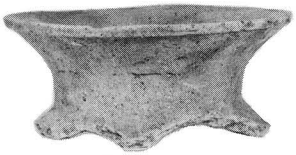
3



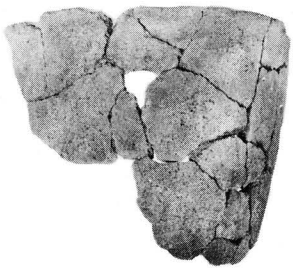
4



5



6



7

8

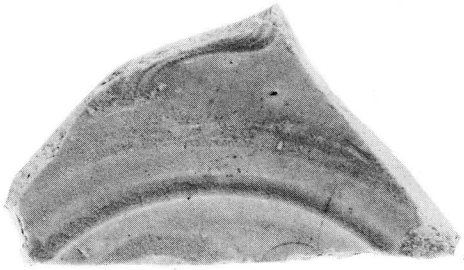
No.	登録番号	種　別	器形	地区名	遺　跡	層　位
1	C－ 6	土師器	坏	Ⅱ		Ⅴ層
2	C－16	土師器	坏	Ⅱ	SⅠ－1	3層
3	C－10	土師器	坏	Ⅱ		Ⅴ層
4	C－18	土師器	坏	Ⅱ	SⅠ－1	床直
5	C－17	土師器	坏	Ⅱ	SⅠ－1	床直
6	C－ 2	土師器	甕	Ⅰ		Ⅴ層
7	C－21	土師器	甕	Ⅱ	SⅠ－1	3層
8	C－12	土師器	甕	Ⅱ		Ⅶ層

写真37　土師器

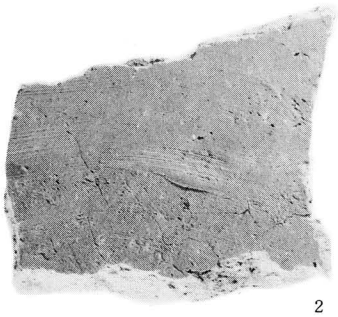
No.	登録番号	種　別	器形	地区名	遺構	層　位	No.	登録番号	種　別	器形	地区名	遺構	層位
1	D－1	土師器	坏	Ⅰ		Ⅴ層	5	P－3	手捏ね土器		Ⅱ		Ⅴ層
2	D－4	土師器	甕	Ⅰ		Ⅷb層	6	N－1	鉄製品	刀子	Ⅱ		Ⅵ層
3	D－3	土師器	甕	Ⅰ		Ⅷb層	7		鉄製品	鉄滓			
4	D－2	土師器	甕	Ⅰ		Ⅷb層							

写真38　土師器、手捏ね土器鉄製品

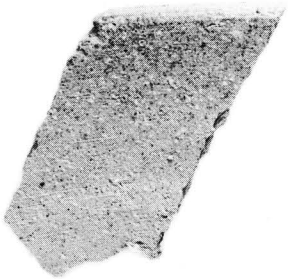
1a



1b

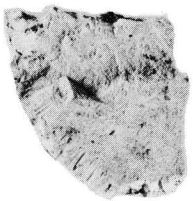


2



3a

3b



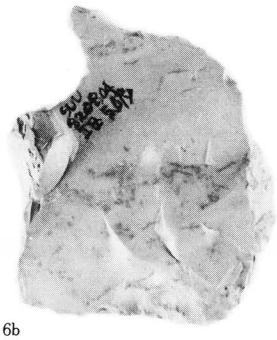
4a

4b

5a

5b

6a



6b

No.	登　録	種　　別	器形	地区名	遺　　構	層　　位
1	J－1	青磁	坏	Ⅰ		Ⅴ層
2	J－2	中世陶器	甕	Ⅰ		Ⅴ層
3	J－3	中世陶器	鉢	Ⅰ	SK－5	1～2層
4	K－7	石器		Ⅱ	SD－1	埋土
5	K－6	石器		Ⅱ	SD－1	埋土
6	K－5	石器		Ⅱ		5～6層

写真39　青磁、中世陶器、石器1／2

職　員　録

社会教育課

課　　長　永野昌一
主　　幹　早坂春一

文化財管理係

係　　長　大沢隆夫
主　　事　山口　宏
〃　　渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼)　早坂春一
教　　諭　佐藤　隆
〃　　渡辺忠彦
〃　　佐藤　裕
〃　　加藤正範
主　　事　田中則和
〃　　結城慎一
〃　　成瀬　茂
教　　諭　青沼一民
主　　事　柳沢みどり
〃　　木村浩二
〃　　篠原信彦
〃　　佐藤　洋
〃　　金森安孝
〃　　佐藤甲二
〃　　吉岡恭平
〃　　工藤哲司
〃　　渡部弘美
〃　　主浜光朗
〃　　斎野裕彦
〃　　長島栄一
〃　　荒井　格
派遣職員　高橋勝也
嘱　　託　鈴木　実

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第1集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集　仙台城（昭和42年3月）
第3集　仙台市燕沢善応寺横沢穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集　南小泉遺跡一範囲確認調査報告書一（昭和53年3月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備調査概報（昭和55年3月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅰ（昭和53年3月）
第22集　経ヶ峯（昭和55年3月）
第23集　年報1（昭和55年3月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集　年報2（昭和56年3月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ一昭和55年度発掘調査概報一（昭和56年3月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年3月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ一昭和56年度発掘調査報告書一（昭和57年3月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ一昭和56年度発掘調査概報一（昭和57年3月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年3月）
第41集　年報3（昭和57年3月）
第42集　郡山遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査一（昭和57年3月）
第43集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和57年8月）
第44集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集　茂庭一茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書一（昭和58年3月）
第46集　郡山遺跡Ⅲ一昭和57年度発掘調査概報一（昭和58年3月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ一昭和57年度発掘調査報告書一（昭和58年3月）
第48集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
第49集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年3月）
第50集　岩切・畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第51集　仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
第52集　南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）
第53集　中田・畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第54集　神明社窯跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第55集　南小泉遺跡一青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年3月）

第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年３月）
第57集　年報４（昭和58年３月）
第58集　今泉城跡（昭和58年３月）
第59集　下ノ内浦遺跡（昭和58年３月）

仙台市文化財調査報告書第59集

下　ノ　内　浦　遺　跡

昭和58年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　針生印刷株式会社
仙台市伊在白山印刷団地３号
ＴＥＬ88－5011